
- 転生者は消耗品を望む -

Smoker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 転生者は消耗品を望む -

【Nコード】

N4155S

【作者名】

Smoker

【あらすじ】

ある日、平凡で退屈な日常を送る俺は仕事中、些細なミスからの事故で死んでしまう。

だが、人生には偶に二度目のチャンスが巡ってくる。

これは二度目のチャンスを得た俺が退屈な日常から刺激的な世界へと転生する物語

P r o l o g u e 〱 回想 〱 (前書き)

どうも、S m o k e rです。

この作品は所謂、処女作であり、作者も初心者である為、不適切な表現や誤字、脱字などの様々な問題が浮き彫りとなるでしょう。

作品を更新していくと共に、より完璧な内容を表現出来る様、精進していこうと思っています。

Prologue 〳 回想 〳

まず、はっきりと言おう

俺は平凡な日常をただ機械的に過ごしてきた。仕事をして生計をたて、偶に息抜きをして刺激的な事とは無縁な生活をしていた。

だが、こんな言葉を言った奴が居た

【人は人生において、生きてから死ぬまでに二度目のチャンスの転機を得る事が出来る。ただ、それを察知して手にするかは本人次第だが】

何を訳の分からん事を言っただけだと鼻で笑ったが………意外と馬鹿にしたモノじゃない

何故かって？

それは……

俺にも二度目のチャンスってのが来たからさ

Prologue 〽 回想 〽 (後書き)

内容が進むにつれて、様々(多少、マニアック)なネタが出てきます。(と言っても、作者が過去に見た物や基本的にはWiki仕込みばかりですが……)

まあ、この作品は八割が作者の自己満足、残りの二割はネタとノリで構成されてるので、深く考えずに「まあ、こんなモノか」という感じで、読んで貰えれば、幸いです。

それでは、

P r o l o g u e 〵 余りに唐突な展開だと、意外に冷静になれる 〵（前書

相も変わらず、操作に四苦八苦してるS m o k e rです。

今回も無茶苦茶な感じですが、どうぞ

Prologue 〽 余りに唐突な展開だと、意外に冷静になれる 〽

さて、先程の話の続きだ。さっきも言ったが、俺は死んだ

工事現場での仕事中に、足を踏み外すという初歩的なミスで20m程の高さから真っ逆さまとなり、黒いアスファルトの上に真っ赤な花を咲かせた……いや、「筈だった」と言っべきか？

落下しながら、「ああ、こりゃ死んだな」と他人事の様に悟って、目を綴じても想像を絶する痛みや衝撃も何一つ、来る事は無かった

「……………」
「？」

ゆっくりと瞳を開けば、そこは硬いアスファルトが広がってる訳でもなく、「異様な空間」だった

そう、例えるなら、何も描かれてない真っ白な画用紙……360度見渡しても距離感すらも無い真っ白な空間のド真ん中に俺は佇んでいた

「何がどうなってんだよ……訳わかんねえ……」

一人呟きながら確認するも、普段の作業着（黒のツナギ）にヘルメット、それにヘビースモーカー最大のトレードマークである煙草……おまけに身体は完璧なまでの五体満足の状態だった。

人間は余りに唐突な展開に遭遇すると意外と冷静になると言っが……

今、正に身を持って経験してるな…

「…い……オ……オイ、その」

ふと、背後からの気配と声に気付き、振り返るとそこには……

「ダ……ダン○ルドア……？」

振り返った俺の目の前には某魔法学校の校長としか言いようのない
姿の老人が居た

「うむ、お主が言いたい事はよく分かる。しかし、お主の………つて、いきなり頬を抓り出す典型的な行動は止めんか」

…OK、頬も痛いしこの痛々しい老人も夢という訳では無いか…

「……それで、アンタは誰で、何でさっきまで、今まさに来世直行コースだった俺はこの真っ白な場所に居るんだ？」

「そうじゃの……先ず、最初の質問に答えるとすれば……儂はお主ら、人間からして神様という………って、携帯を探すのは止めんか、別に精神に支障をきたした老人じゃないわい」

ちっ……人の心を読めてる時点でこの爺さんの言ってる事も嘘……
って事は無いな

じゃなかったから、今頃はアスファルトの上に頭を散らしてる筈だし……

「それで、（自称）神様が何で俺の前に現れるんだ？ 第一に俺はアンタを信仰する程、信心深いワケでも無いし、大罪やら善行を行った覚えも無いぜ？」

「何か、含みのある様な感じで神様といったような気がするが……
…取り敢えず、2つ目の質問に答えるとなると…確かにお主は死んだ」

「いきなりの死亡通知かよ……でも、何で死んだ奴がこんな場所に居るんだ？ 普通なら天国なり地獄なりに行くんじゃない……」

「まあ、待て。お主は死んだ……これは覆しようのない事実……しかし、同時にお主は二度目の人生を送れるのじゃ」

一度死んどいて、二度目の人生を送れる……？

矛盾してないか…それは……？

「実は神々の世界…所謂、天界では稀に人間に二度目のチャンスを与えるという事があるんです。お主らの世界で時折、落雷などで人が死ぬというような極めて僅かな確立じゃが……」

……随分と強引だな、二度目の人生を送る為に一度、死んでもらうのかよ……

「まあ、余り深くは考えないが……それで、二度目の人生ってのは、
どういうの何だ？」

（自称）神：「もう、（自称）は止めんか」……神様は長い髭をさ
すり、こう答える

「お主には転生者となってもらう」

P r o l o g u e 〵 余りに唐突な展開だと、意外に冷静になれる 〵（後書

取り敢えず、あと一話程でP r o l o g u eも終わります。

その後は主人公の転生後の回想とキャラ紹介を予定中……

Prologue 〵 いざ、転生と言っても今一つ、ピンと来ない 〵

【転生者になってもらう】

転生……………

「ああ、北〇の拳の「それは無想転生」……………最後まで、言わせろよ……………」

さて、ポケもここまでにしといて……………

「転生つても、具体的には何をするんだ？」

確かに前に……………いや生前、携帯やらの小説ではよく聞く単語だけど

よ……

まさか、実際に自分になるとなれば………

今一つ、ピンと来ないんだよなあ………

「何、簡単な話じゃ。お主が二度目の人生を次の世界で送る。それに不自由の無いよう、お主の欲しい能力を五つまで儂が授けよう」

つまり、俺が次の世界で自由に生きれる様に能力を五つもプレゼント……って訳か

「やけに気前が良すぎないか？俺は別に大それたような事はしてないぜ？」

「それは、お主にも本来は残りの人生というものがあつた。二度目の人生を送れると言っても、結果的にお主を死なせてしまった」

- これはせめてもの罪滅ぼしじゃ -

そう言つて、神様は俺を前に深く頭を下げる

「……別にアンタのせいじゃねえよ、良くも悪くも俺は二度目のチャンスに選ばれた……ただ、それだけの話じゃねえかよ……」

「……そうか………それじゃ、さっそく能力を聞こうかの？」

……こんの腐れ爺が……

いきなりシリアスな雰囲気から一転させてんじゃねえよ……

「…アンタ、切り換えの速さが異常じゃねえ……？」

「そうじゃの、切り換えの速さは天界一と良く他の神々にも誉められるぞ？」

いや、ドヤ顔で言うなよ。寧ろ、誉められてないって、それは……

「ハア……深く考えずに、さっさと話を進めようぜ……」

しかし……五つか……

「……取り敢えず、超人的な身体能力……それにあらゆる乗り物と銃器、爆薬など兵器の取り扱いとその知識を」

「ふむ、先ずは2つ……他の三つはどうするか?」

「三つ目は知識や肉体を鍛えても限界無く上がり続けて、衰えない……所謂、限界突破ってやつ」

「体力系ばかりじゃな、脳筋にならないかの？」

…確かになあ……………つても…あと2つは……

「あー……………あとの2つは当面の生活や身分の保証にまわしてくれ」

「……………む、了解した」

長い髭をさすりながら、頷く神様

「じゃが、容姿などは良いのか？」

「容姿やらに関してはアンタに任せるさ」

「そうか……それでは……新たな人生を……幸運を祈るぞ、転生者よ」

「ああ、神様に祈ってもらえれば充分さ」

すると俺の足元からは妙な浮遊感が……

……浮遊感……？

足元を見るとそこには、見事にポツカリと穴が開いていた……

つまり、それが意味するのは……

「また、落ちるのかよおおおッ!~!」

答え、再び落下する

「元気でやるのじゃぞー」

俺が最後に見たのは……

どこか、自分の孫を見守るような祖父のような優しげな笑みを浮かべる神様だった

なんだよ……そっちの方が似合ってるぜ、爺さん……

回想 〱 転生から早数年 〱 (前書き)

取り敢えず、2〱3話ほどは回想を続けます

相変わらずのご都合主義な内容と展開ですが……

回想　　転生から早数年　　

転生から早数年、俺は「ダリアス・シーガー」として新たな人生を送っていた

今思えば、身体能力をあげておいて正解だったなあ……

二度目の人生の始まりは、ダウン・タウン下層街からだった

両親の名は知らない、というよりも顔すら覚えてない。俺が生まれて間もなく、強盗に襲われて死んだらしい（俺はすぐに親類の婆さんに引き取られたが）

街の治安は中の下、三時間毎に何処かで一回は殺人が起きるような状態だ。少なくとも、まだ少ない部類に入る

俺は婆さんに育てられ、自分の意志で身体を動かせるようになったのは、5歳頃だった。取り敢えず、神様（と言う爺さん）から授かった身体能力を生かして、食料品の盗みから逆強盗（強盗犯から強盗する事）で生活してきた

だが、14〜15の時に婆さんは病死して、俺は正に天涯孤独の身となった

今思えば、あの頃は一番に荒れた時期だった。盗みから始まり車両窃盗、何でもやった……

16歳になった頃には、ストリート・ギャングの頭として、仲間を仕切っていた。

別に暴力に飢えていた訳じゃない、ただ仲間とつるんで好きな事をやりたい様になっていた。

そして、18歳……

俺は軍隊へと入隊した……いや、正確には「スカウト」されたと言
うべきか……

話は簡単かつ単純だ

何時もの様に俺は高く売れそうな車を捜して、軍用車両を見つけた。迷うことなく、自慢の身体能力を生かして即座に強奪したが、どうやら「当たり前」の車を盗んでいたようだった

そのまま、我が家でもある廃墟と化した工場へと帰宅すると同時に、明らかに一端の兵士とは違う連中が襲撃してきた（後から知ったが、俺が盗んだ車は軍上層部の試作品である最新モデルだったらしい）

超人的な身体能力をフル活用して応戦（素手で）した所、襲撃した部隊を壊滅（半殺し）に追いやった後、車の持ち主である軍上層部の幹部がわざわざ、スカウトに来たという訳だ

それから、軍に入ってから色々あったが……

例を挙げるなら、新人だと見下した上官の顎を砕いたり、上官を半殺しにしたり、上官を磔にしたり……あれ、上官をイジメた覚えしか無えぞ？

まあ、軍に入ってから、2、3年位はあちこちの部署や部隊を転々としていた

行く先々で様々なあだ名や異名を呼ばれることが、俺の日常と化していた

- - - - -

ナイジェリア 反政府ゲリラ殲滅作戦時

「何だ、あのバケモノはッ!？」

「だ、誰か応援を「オラオラア!、テメエ等の股ぐらにぶら下がってんのはピンポン玉か?! 根性、見せてみるや!」ギヤアアアッ!」

ちょうど欲しがっていた刀が手に入り、テンションは最高潮で、刀を両手に敵陣を突っ切っていた際、得たあだ名は「ソード・ジャンキー斬殺狂」、
「バスターカー狂戦士」など

または………

-
-
-
-
-
-

ボスニア 反政府軍掃討作戦時

「距離、2000m 風速、安定 問題無し（オール・クリーン）」

「了解、さっさとゴミ掃除を終わらせろぜ？」

「射撃許可、^{ファイア}発射！！！」

ズドゥウンッ……………キン…………

「発射!!」

ズドゥウウン……カシャツ……

2000m程の距離からの連続超遠距離狙撃の際、一発の撃ち漏らしもない結果、ついたあだ名は「イーグル・アイ驚の目」、ターゲット・シューター「標的処理機」など…

気付けば、80もの軍事作戦に参加&成功させて、入隊から3年後の21歳には大尉へと昇格していた

まあ、それ以上にあだ名や異名は増え続けたが………確か、新たに増えたのは「人間兵器」、リースアル・ウエボン「走る銃座」ランニング・ガンビット………

……自分でも、ロクな異名が無いと思わざるを得ないな………

そして、最近になって思い出したのはあの爺さんが言っていた【次の世界】の事だった。

今の所、前の俺が生きていた現実とは何ら変わりが無い……

違いを言うならば、女軍人の差別などが少なく、男以上に優秀と言う部分か………

だが、この3年後に俺はこの世界が、とある漫画の平行世界と気付く事になる

回想 〱 転生から早数年 〱 (後書き)

次の話からは、原作となる「ヨルムンガンド」のキャラを登場させます。

と言っても、サブキャラを中心としてますが…

回想　　ゝ　少数精鋭って、何だか響きが良い　ゝ（前書き）

取り敢えず、今後、登場する原作メンバーの名前が登場します。

登場させるメンバーは、基本的には作者の好きなキャラです

回想　　少数精鋭って、何だか響きが良い　　

新兵から僅か、3年での大尉へと異例の昇進を果たしてから更に3年後……

24歳となった俺は、常に戦況が激しい戦場での最前線を任されていた（確かに銃弾を刀やナイフで弾いたり、有り得ない距離からの狙撃をする奴を最前線に投入させるのは納得だが）

最早、軍での生きる伝説と化していて、新兵から軍上層部まで知らぬ者は居ない、とまで言わしめる存在となっていた

そんなある日、俺は上官から一つの命令を下された

【我々、軍隊でトップクラスの腕を誇る選りすぐりの精鋭たちを更に選別し、結成した少数精鋭部隊の指揮をとれ】

指揮は苦手なんだが、上官には逆らえない（寧ろ、逆らえば簡単に軍を壊滅できるが、その後が面倒だし）

まあ、結論を言えば引き受けたと言っ訳だ

少なくとも、仲間が居れば、多少は仕事が楽だしな……

だが、そのメンバーが問題だった

何故かって？

先ず、部隊の人数を説明すると……

陸・海・空軍の三つから数少ないそれぞれ、トップクラスの腕を誇る軍人を選び出し、その少数から更に厳選に厳選を重ねて編成した部隊の人数は、俺を含めて……

なんと、僅か4人だった。だが、それだけじゃない上、シャレにならないのは俺以外の三人は全員が「女」である事

確かに身体の構成上、女の方が男よりも利点が多いとは聞くけどよ
.....

拳げ句の果てに、内の二人は軍人では無く、【CIA】所属と言う
始末.....

第一に軍とCIAは共同戦線をして、そこまで仲が良いって訳じ
やない（それに軍隊は連中にとって、駒に過ぎないからだ）

その連中の内、二人が部隊に居るなんて.....冗談にしても笑えね
え...

だが、上官に渡された資料を見た途端、全てに納得できた。

「……【ヘックス】、【チェキータ】……それに【ショコラーデ】……」

そう、それは俺が生前……前の人生で、よく読んでいた漫画……

【ヨルムンガンド】の登場人物の名前だった……

しかし……まさか……

「【ヨルムンガンド】の世界かよ…」

煙草に火を着けて、俺は一人呟いた…

回想　　ゝ　少数精鋭って、何だか響きが良い　　ゝ（後書き）

今後、この三人がシーガーと、どう絡んでいくかは……

また、ノリと勢いでのが即興です……

回想　　キャラが違つと全くの別人　　（前書き）

取り敢えず、今回の話で回想は終了です。

回想　　キャラが違くと全くの別人　　

よし、まずは状況を整理しよう。そうしないと耐えられない（主に俺の頭が）

どうやら、俺は【ヨルムンガンド】に似たような世界……

所謂、パラレル・ワールド【平行世界】ってやつに居るようだ

何故なら、原作ではこの三人はお互いに面識は無く、同期でも無いからだ

それに……この資料には三人の詳細があった

三人の詳細を挙げるとキリが無いから、【ヘックス】のを挙げるとしよう

- - - - -

ヘックス少尉は、陸軍士官学校を卒業後、計画破綻となつて幻と消えた女性編成部隊「WW小隊」選抜訓練にて、特殊部隊帽をかぶれる程の成績を挙げる。

後に軍を辞め、CIAからのスカウトによつて、CIAの最前線……現場での工作（武器調達、監禁、拷問、爆破など）を担当とする
軍事的工作実行班……

「準軍事工作担当官（パラミリタリー・オペレーション・オフィサー）」

通称「P・O・O」（パラミリ）」に所属して、あらゆる状況下にも対応できる優秀な隊員として、抜擢する

-
-
-
-
-
-

資料を読んだだけで何故、平行世界だと分かるかだって？

それは、俺が知っているヘックスとは違っているからだ。

俺が知っているヘックスは、テロで婚約者を失ってから国際法スレスレの手段を用いて、テロリスト狩りを行っていた

その行為を「ただただ国を思つての当然の行為であり、自分が正義」という半ば、盲信的な部分があるのだが……

この世界のヘックスは、確かに愛国心はあるものの盲信的な面は無く、テロを憎む部分は同じでも、テロで両親を失った事をきっかけに、テロと戦う為に軍へと入隊という過去になっている

他の二人に関してはあまり、原作との違いは無いがヘックスは、明らかに原作とは違う

「まあ……どうであっても、俺には関係ない事だしなあ……」

そんな事よりも、最大の問題は「男が俺しか居ない事」だ

確かに考え方によれば、男の夢かも知れない

しかし……

だが、しかし…！

「何で、戦闘面や情報、交渉面においてチート級の女しか居ないんだよおおッ！..」

……失礼、取り乱した……

だが、よく上層部もこのメンバーにしたものだ。最早、核兵器以上

に凶悪な部隊だぞ……

寧ろ、部隊の域を確実に越えている（軽く軍隊という組織に匹敵する）

「エライ事を引き受けちまったなあ……核弾頭を抱え込んだようなモンだぞ、俺……」

因みに、この話から僅か半年後、この時の事を常々に思い出す羽目になるのは余談だ……

回想　　キャラが違つと全くの別人　　（後書き）

最近、更新してく度に短くなっていく上に駄文に磨きがかつくる
……

他の作家の人たちの凄さを痛感する毎日をおくっております……

部隊&キャラ紹介 〵 Aチームと書いて、A（アルファ）チームと読む 〵

今回はキャラ紹介と部隊についての話であって、補足です

部隊&キャラ紹介　　Aチームと書いて、A（アルファ）チームと読む　　

【部隊紹介】

「A - TEAM」

正式名称は「特殊少数精鋭部隊」であり、通称「Aチーム」

軍の生ける伝説「ダリアス・シーガー」大尉の率いる軍の切り札的存在であって、兵士たちの憧れであり、上層部からは畏怖の象徴とされている最強部隊（はつきりと言えば、軍隊と同等の戦力などを兼ね備えている為）

隊員構成は「シーガー」、「ヘックス」、「チエキータ」、「シヨ

「コラーデ」の四名のみ

戦歴：半年前に設立され、その短い間に30回以上の作戦に参加及び、成功を修めている（作戦内容は主に、殲滅、制圧、奇襲など）

また、兵士及び、軍上層部からは「ならず者集団」、「兵器部隊」、「少数軍隊」などの様々な呼び名で呼ばれている

-
-
-
-
-
-
-

【キャラ紹介】

名前：「ダリアス・シーガー」

本作品の主人公であり、転生者

24歳（部隊結成時）の白人男性。茶髪で襟足が長めのオールバックヘアで整った顔立ちと引き締まった無駄の無い筋肉質に、身長は183cmと高め

右手首から肘にかけて炎を模した刺青を、左肘から左肩までは龍を模した刺青を入れているのが特徴

神（シーガー曰わく、ダ○ブルドア）より授かったチートによって異例のスピードで出世を果たした兵士であり、階級は【大尉】（本来ならば、大佐にもなれたのだが「地位よりも給料を上げる」と一蹴した為）

軍の「最終兵器」、「人間兵器」など、様々な異名を持つ

部隊では、指揮官&狙撃手&強襲を担当

-
-
-
-
-
-

「ヘックス」(【ヘックス】とは「魔女」を意味するも、本名は不詳)

20代前半の白人女性で、赤毛のロングヘアーにモデル顔負けの引き締まった女性らしさを強調する肢体を誇り、その見た目とは裏腹に高い戦闘能力を有している(現に士官学校を卒業後、厳しい訓練を合格し特殊部隊を率いれる程の実力を持つ)

軍を辞め、C I Aにて「P・O・O・（パラミリ）」として、活動
する中でその能力を買われ、Aチームへと編成される

両親をテロで失った過去を持ち、相手がテロリスト及び、関係者とな
ると容赦が無くなる（シーガー曰わく、「ゲシュタポも裸足で逃
げ出す程」らしい）

部隊では物資調達、指揮官の補佐（実際はヘックスが指揮を務める
事が多いが）などを担当

-
-
-
-
-
-

「チエキータ」

20代前半の白人女性であり、黒髪と大きめの瞳と口が特徴的で、ヘックスと同等のモデル顔負けのスタイルを誇るも、若干はチエキータの方が上。右腕に太陽をあしらった刺青を入れている

近距離、中距離での戦いを得意としていて、白兵戦の腕は部隊でもトップクラス。愛用武器はナイフ（チートであるシーガーと互角（若干、劣勢ながらも）に渡り合える程の実力を誇る）

元々は、デルタ・フォース陸軍特殊部隊に所属して陸軍一の戦闘能力を買われ、部隊へと編成

部隊では潜入、奇襲などを担当

-
-
-
-
-
-
-

「シヨコラーデ」(CIAでのコード・ネームで「チョコレート」を意味する。ヘックスと同様、本名不詳)

20代前半の白人女性で、金髪の癖つ毛で四方八方にはねている。ヘックスやチエータには劣るものの女性らしさを強調した肢体であり、見た目とは裏腹にかなりの大食い(所謂、痩せの大食いというやつ)

元はCIA所属の情報屋であつて、一応は戦闘能力は一端の兵士と同等だが、盗聴器などの機械関係は専門家以上の腕を誇り、その能力を買われて、部隊へと編成する

部隊では交渉、情報収集やメカニックなど、後方支援を担当

部隊&キャラ紹介 〵 Aチームと書いて、A（アルファ）チームと読む 〵

オリ主である主人公を除く、「ヨルムンガンド」の登場メンバーの紹介は基本的にはWikiでの紹介と同じですが、オリジナル設定も入れている為に違いがありますが、御了承下さい……

任務　ゝ　作戦つてのは奇を以って良しとすべし　ゝ（前書き）

今回は、シーガーたちの任務を書いてみました。

任務　　ゝ　作戦つてのは奇を以って良しとすべし　ゝ

メキシコ　アメリカとの国境から2 k m程、離れた【コヨーテ平原】

広大な大地にコヨーテの群れが生息しているのが特徴で、名前の由来となっている

現在でも、失われつつある数少ない自然というのを改めて、認識できるところ……

その上空で、二機のへりによる空中戦が繰り広げてなければ……

-
-
-
-
-
-
-

俺らは所謂、危機的状況に居るだろう

何故なら、民間のへりで戦闘へりの猛攻から逃げてるのだから…

何故、そんな状況となったのかは今から24時間前に戻る事になる

-
-
-
-
-
-
-

24時間前 C I A メキシコ支部（所在地：機密）

俺らは軍上層部からの命令で、C I Aのメキシコ支部へと来ていた

68

理由は簡単、あるメキシコ人の抹殺任務の為だ（何故、俺らには抹殺や制圧とか、物騒な任務しか来ないんだよ…）

話は戻るが、標的の名前は「アントニオ・トゥコレアス」、通称「

トウコ將軍」だ（しかし、メキシコ人ってのは長い上、読みにくいんだよ、名前が）

何故、メキシコ軍の將軍を抹殺しなければならないかと言えば、ある理由がある

將軍は汚い金で、国境の憲兵たちを買収して裏側の流通ルートを支配しており、CIAの資金源（と言っても非合法のだが）の一部を掌握している為、CIAにとって、正に邪魔者だからだ

CIAも本来なら、パラミリなどを送り込んで始末したいのだが……

このトウコ將軍は、政府高官たちの一部も買収しており、情報の横

流しさせ、既に2度もCIAは將軍の殺害を失敗している

その後、三年間も行方をくらましていたのだが、將軍の側近がアメリカへと亡命を条件に將軍の居所を教えるという取引を持ち掛けてきた

散々、煮え湯を飲まされ続けたCIAは取引に応じ、三度目こそはと俺ら呼んだ訳だ

第一、国よりも自分たちのメンツを重視しているから、二度も失敗すんだよ

つまり、俺らはCIAの尻拭いをさせられる羽目となった訳なんだ

よなあ……

……正直、気乗りしねえ……

とは言っても、任務であるからにはキッチリと仕事を片付けなければならぬ

だが、CIAは今回の作戦の成功を確信しており、俺らにはお粗末な奇襲用装備（消音器付きの軽機関銃、音響手榴弾など）しか支給されなかった……

嫌な予感つてのは、当たるモノ……だから、俺らは「ある保険」をかけておいた

だが、それは將軍自らが俺らを殺そうとしなければならぬが……

だが、その点については抜かりはない。將軍が軍人、若しくは自己顕示欲が強い人間だからか、そう言った事は自分の手でやりたがるタイプだからだ

-
-
-
-
-
-
-

そして、將軍の猛攻から逃げる事となる2〜3時間前の話だ

俺らは、飛行救急搬送隊員（ヘリでの救急搬送をする救命士）として將軍の所へと向かった

内通者である側近の話では、將軍は昔に負った古傷の治療としてヘリでの通院をしているらしい……

しかし、その場所が砂漠のど真ん中ってのが妙な気がしてならない
……

そして、俺の嫌な予感は的中する

側近からの情報は將軍の罾であり、俺らの事も既に知られていたからだ

到着と同時に將軍たちからの手厚い歓迎（という名の銃撃戦）を受けた

まあ、俺ら（俺にヘックス、チエキータの三人と言っても最早、軍隊並み）の反撃で大半を返り討ちとして、撤退……

そして、冒頭に戻る事となる

-
-
-
-
-
-

「何で、こんな状況にならなきゃいけないんっスか!？」

「騒ぐなつての、シヨコラーデ! こっちはさっきから銃弾を避けるので忙しいんだよッ!！」

救急ヘリの狭い機内でシヨコラーデの叫びが響く……

それよりも後方からの機銃攻撃で殆ど聞こえないんだけどな

「シーガー、後方からミサイルが来てるわよお？」

「もっと早く言えよ、ヘックス！ チェキ、ミサイルの始末を頼む！」

助手席にて、悠長な口調でヘックスが言う…（ミサイルを喰らったら、お前も木っ端微塵だぞ？）

「了解、でも守りに徹してるのもつまらない？」

「チェキ、ミサイルをマシンガンで撃ち落とすお前の腕は認めるがせめて、前を見て撃てよ…」

此方（操縦席）を見ながら、迫るミサイルを破壊していくチェキー

タ……（寧ろ、お前の方がチートだろ）

「あの兵装じゃ、ミサイルもそろそろ弾切れじゃない？」

「そんな悠長な事を言ってる場合じゃ……って、また撃ってきたっスよッ……！」

再び、ミサイルが迫る……って連発かよ

「チエキ、ドアを閉めろ！ 全員、何かにしっかり掴まれッ……！」

チートで更に軍で鍛えた操縦技術テクニクを舐めんじゃねえぞ？

-
-
-
-
-
-

トウコ將軍は烈火の如く、怒り狂っていた。畏にかかったグリーンコ（アメリカ人）を始末して、無能なCIAへの見せしめにする筈が、たった四人に部隊を半壊させられた上、救急ヘリで自慢の戦闘ヘリの攻撃を悉く回避され続けてるからだ

「何してる、さっさと叩き落とせッ！！」

怒鳴るように、操縦士に命令を下す

機銃で墜落させることが出来ないなら、更に破壊力のあるミサイルで撃ち落としてやるという魂胆だ

しかし、相手は普通ではない。將軍は知る訳が無いが相手は「ダリアス・シーガー」が率いる部隊……

常識なんてモノは通用する訳がない

將軍は有り得ない光景を目の当たりにする

「見たか、ヘリが宙返りしたぞッ!？」

曲芸の如く、横一回転の宙返りでミサイルを回避してるへりを見て
いる以上、現実だと言いたいようがないからだ

-
-
-
-
-
-
-

「アハハッ！、アハアハ……相変わらず、クレイジーな事をするわ
ねえ、シーガー？」

「どう考えても有り得ないっスよッ！、へりを宙返りさせてミサイ
ルを回避するなんてッ！？」

「シヨコラーデ、コイツは「シーガー」なのよ、それ位は普通じゃない？」

お前らのその会話が出来る程の余裕も普通じゃ、有り得ないだろうが……

「大体、ミサイルも撃ち尽くしただろうな　ヘックス！、例の「保険」はどうなった？」

「ちょっと待っててねえ……」

手にした端末をいじり、画面を見つめるヘックス

「繋がったわあ、「保険」のコールサインは【ハチエット】よ」

【ハチエット】か……なら、次は將軍を誘導……シーガー、相手も奥の手を用意してるみたいよ？」

「あの手の奥の手なら、恐らくは熱感知ミサイルだろう……なら、こつちも奥の手を使うぞ？」

そう言って、操縦桿を引き、更にへりを上昇させる

「何で、真上に上昇するんつかッ！これじゃ、狙ってくださいって言ってるようなモノっスよッ!？」

「シヨコラーデ、軍事作戦において重要な事とは何だ？」

「それは、【常に相手の一歩先を行き、決して逃げない事】って、全く関係ないじゃないっすか！」

「確かに、トウコ將軍を殺しに来たのにこれじゃあ、逆よねえ？」

確かにそれは言えるな

けどよ……………

「相手の一步先じゃ、足りないぜ？ 三步先に行かなきゃな！」

「シーガー、熱感知ミサイルが来たわよ？」

チエキの声を聞き、振り返れば……

二発の熱感知ミサイルが俺らを撃ち落とそうと迫っていた

「まだ死にたくないっスよ、シーガー！」

「騒ぐなって、シヨコラーデ 熱感知の回避方を見せてやるよ」

ミサイルを引きつけ……そして、

「熱感知の回避方法……【熱源カット】だ」

そう言うと同時に熱源となる機器の電源を全て切る。勿論、最大の熱源となる「エンジン」もだ

エンジンを切ったへりは当然、重力に従って地面へと落下する（考えてみれば、よく落下するよな、俺って…）

目の前の熱源を失ったミサイルはへりを通り越して空中へと飛び続けて、射線が交差して衝突、そして爆発する

「ミサイルを回避したのは良いけど、これからどうする気?」

「再点火するから、落ち着け」

遙か上空から落下する機体が立て直すと同時に再点火し、再び飛行を開始する

「いったい、何時まで逃げなきゃならないんっすか!？」

「待て待て待て、ヘックス 【ハチエット】に繋げ。シヨコラーデは、トウコ將軍のヘリの無線に繋げる」

「わざわざ、敵に無線連絡をする必要があるの？」

操縦席へと乗り出して、俺の顔を覗き込むチエキータ……

つか、近いつての……当たってるって、胸が……

「何の考えも無しに、飛び回ってる訳じゃねえよ…… 【ハチエット】、応答しろ」

ヘックスから手渡された端末を片手に呼び掛ける

『こちら、ハチエット どうぞ』

「よし、ハチエット 本機ロックオンの位置を捕捉しろ」

「シーガー、繋がったッスよ！」

これで準備は出来たな……

「トウコ將軍、貴官は合衆国の軍人に対して、不法な戦闘行為を仕掛けている」

「いや、逆だろうが！ 先に仕掛けてきたのはそっちだッ！！」

無線からは怒鳴り散らす將軍の声が響く……こりや相当、キレてるな

「繰り返す、貴官は合衆国の軍人に対し、不法な戦闘行為を仕掛け
ている……それも「合衆国の領空」でな」

手にしている端末の画面には、メキシコ国境を越えて合衆国の領空
へと侵入した二機のへり……

衛星から記された俺らと將軍のへりの座標が映っていた

『こちら、ハチエット 標的を視認した』

前方から飛来してくる機体……

アメリカ空軍所有の戦闘機……

「F-14（トムキャット）」が標的へと迫る……

その標的とは勿論…

「あばよ、メキシコ野郎……ふざけんなッ！」

そう叫ぶと同時にF - 14から発射されたミサイルはトウゴ將軍の
ヘリへと直撃した

「良い腕だ、ハチエツト。協力、感謝する」

炎上して、墜落していく將軍のヘリを横目に端末からハチエツトへ
と連絡をする

『いえ、此方こそ光栄です、大尉。これより、基地へと帰還する』

方向を転換し、基地へとF・14を見つめながら、煙草をくわえて火を着ける……

仕事が終わった後の一服だけは、どうしても止められないものだ

「もしかして、最初から計算済みだったのかしらあ？」

そう言って、操縦桿を握る俺の腕へと軽く抱きつくヘックス……

コイツも中々の大きさで……（何の大きさと聞くのは、野暮ってもんだぜ？）

「でも、あんたは昔からそんな感じだもんねー？」

後ろから首へと腕を回すチエキータ……

おい、そこに手を伸ばすな……それは俺の操縦k a……

「待てって、今は操縦中だっ……それに燃料もそろそろ尽きそうだしな」

「凄いつス、二度とシーガーの事を疑ったりしないっスよッ！」

子供のように瞳を輝かせて、興奮するシヨコラーデ……

お前、そついう所がガキっぽいな

「こつ言つたろ？」

- 作戦は奇を以つて、良しとすべし -

……つてな？

任務　　ゝ　作戦つてのは奇を以って良しとすべし　　ゝ（後書き）

文章が長くなるとその分、駄文へと化していく……

最後の辺りであるように、既にヘックスたち三人はシーガーに好意を抱いています。正直、作者すら何時、フラグを立てたのか…見当すらつきません…

昔話　　〱　昔話といつても、人それぞれ　　〱　（前書き）

今回はヘックスたち、三人のシーガーとの出会い話と好意を持つ理由についてです

昔話　　〽　昔話といつても、人それぞれ　　〽

トウコ將軍の件を片付けた俺らは、2〽3日程、休息をとる様に上層部からの命令を受けた（所謂、休暇命令ってやつか？）

確かに部隊設立から半年は、あちこちに任務で派遣されたしな……

ベトナム、上海、イラク……

特にカナダでの作戦は地獄を見る羽目になった……

どんな内容だったかだって？

……その事は思い出したくないが、例えるならば湾岸戦争が子供の遊びと思える位か……

取り敢えず、トウコ將軍の件を終えて、基地へと帰還すると同時に休暇命令を受けた後、特別兵舎（部隊設立時にもっとマシな寢床を作れ、と言って上層部に作らせた個室有り、シャワー完備、生活基準はホテル並み）に戻り、自室のベットへと倒れ込み、泥のように眠った……

そこまでが俺の記憶に残っていた

- - - - -

「……っ……？」

外から聞こえる歩兵の行進、射撃訓練時に鳴り響く銃声で目を覚ます

まだ眠気で朦朧とする意識の最中、仰向け寝の自分の両サイドから感じる違和感に気付く。ふと、右側を見てみると……

「……いやいや、無い無い……」

軽く目を擦り、先程よりも視界をはっきりとさせて今度は左側を見

てみるが……

「いやいやいやいや………」

自分の左右から感じる違和感を確認しただけで、眠気も一気に吹っ飛んでいった

何故かって？

【右側の状況】

窓の隙間から差し込む日の光に照らされ、紅く煌めく長い赤毛にスヤスヤと寝息をたてて眠るヘックス……

肩までかかったシーツの下からは、素肌が見えるのを考えて恐らくは衣服類（下着も含む）を着てない様子

右腕に絡む両腕と右腕を挟み込む神々の谷間（？）の柔らかな弾力と温かさ……

【左側の状況】

シーガーと同じように、仰向け寝で静かに寝息をたてるチエキータ

……

胸元にまでかかったシートから見える素肌のままの神々の谷間を見るからにして、ヘックスと同様に衣服を着けていない様子……

左足に絡むチエキータの太もも辺りから伝わる柔らかな感触と弾力……

ベット脇を覗き込めば、二人が脱いだと見える衣服と黒の下着（勿論、上下ともに）……

これを意味する事とは……

「いやいや……無いだろ、そりゃあ……」

おかしい、何がおかしいって？

全てにおいてだよ……！

俺は部屋に戻ると同時に眠った筈だ。ヘックスたちと会った覚えが無ければ、こんな風になるような行為をした覚えも無い……

第一、あの「悪夢」の再来を自ら招く程、俺は馬鹿じゃない筈だ……

悪夢とは何かだって？

……言にくい話だが、俺の純潔はコイツらとショコラーデの三人によって、奪われてるからだ……

そりゃ、もう丸一日をかけて、じっくりゆっくりねっとりと……

というか、この二人はまだしもショコラーデ、お前はそんな肉食系じゃなかっただろ

確かに戦場で、幾度となく恐怖を感じ、危機的状況になるのはあったが……あの時は、それ以上にマジで死ぬかと思った……

兎に角、この状況から脱出するのが先け……「あらあ……もう起きたの？」

右を見ると、まるでオモチャを手にした子供のような笑みを浮かべるヘックスが……

「……あー……ヘックス、何でお前が俺のベットで寝ているんだ……？
それも、「真っ裸」で……それに「まあーまあ……落ち着きなつてば……」

首に絡みつく細い腕に引き寄せられて、左を見れば……

ニタニタと妖しい笑みを浮かべるチエキータが……

「そうね、その質問に答えるとしたら……ただ、単に寝たかったからかしらあ？」

シート内で俺の腹部へと這いずるように移動して、女性特有の柔らかな双山を俺の胸板に押し当てるヘックス……

コイツ……本当に腰、細いなあ……体重なんて殆ど、感じないぞ……

「でも、最近は無沙汰だったし……最後にしたのは半年前かしらね……？」

妖艶な笑みを浮かべ、ヘックスよりも若干は大きめの双山を肩へと押し当てるチエキータ……

コイツも内臓とかあるのか？……って位に細い腰だよなあ………って…

「チエキ……一応、聞いとくが……シたって何をだ……？」

嗚呼、背中に大量の冷や汗が伝うのを感じてるよ、俺……

「何って……ナニ？」

長く細い指で、なぞるように俺の唇に指を這わすヘックス

…このまま、さっさとする事をした方が良いんじゃないのか？

そんな惚けた考えが頭を過ぎるも、せつかくの休暇をそうして潰すのは困る

「さっさと服着ろよ。俺はシャワーを浴びてくる……」

腹部の上に乗っているヘックスを下ろし、足早に部屋を出て行く俺
……

これ以上居たら、確実に喰われるからだ（性的な意味で）

-
-
-
-
-
-
-

「……逃げられちゃったわね、ヘックス？」

「そうねえ……でも、不思議な話よね…戦場（現場）じゃあ、精鋭
だの何だのって呼ばれる私たちが、たった一人の男に執着するなん
て…」

シーガーが立ち去った後の扉を眺めて、呟くヘックス…

「…今更な話だけど、ヘックスは何でシーガーに惚れたのよ？」

まあ、アタシも人の事は言えないが、と考えると、ヘックスを見るチエ
キータ…

「そうね……たまには昔話も良いかしら……」

-
-
-
-
-
-
-

あれは……確か、私が「P・O・O・（パラミリ）」になってから
一年位の話だったかしら……

当時、私は「自分は男の兵士よりも優秀な隊員である」という高い
プライドを持っていた。

一年の間で数多くの作戦を成功させ、気付けば部下を持つ程の権限
を所有する座にまで、上り詰めていた

公には出来ないような内容の作戦にも参加した……全ては、この国
を脅威から護る為に……

でも、そんな私の想いは簡単に崩れることになったわぁ……

ある日、私は上司に「テロリストの脅威を排除して欲しい」と言われた

内容は簡単、国際的なテロリストの潜伏先を突き止めたので現地へと潜入し、速やかにメンバーを殺害すれば良い

拒否する理由なんて、無かったわ。ましてや、両親をテロで失った私にとっては…

直ぐに部下を数名、引き連れて現地へと向かった私を待っていたの

は……

- 裏切られたという現実だった -

潜伏先へと潜入すると同時にテロリストからの攻撃を受けて、部下は全滅……

そこで連中から聞かされたのは、信用してきた上司が莫大な謝礼と高い地位を約束に私たちを売った事だった

半ば、放心状態だった私を見下ろす薄汚い連中の欲望が入り混じった目を見て、悟ったわ……

部下を殺された上、自分はコイツ等の慰み物にされて殺される以上の屈辱を味わう事になるのだろうか……

そう全てを諦めかけた時だった……

突然、鳴り響く銃声……次々と銃弾に貫かれて自分の血溜まりに倒れていくテロリスト……

気が付けば、私の周りに居た連中は皆、急所を撃ち抜かれて死んでいたわ……

そこに現れたのが、シーガーだった

（後から知った話だけど、別件の任務で私の上司と連中の取引を知ったシーガーは命令違反を承知で単身、私たちの救出に来るらしい）

『……大丈夫か？ 俺はダリアス・シーガー大尉、救出に来た』

そう言って、手を差し伸べるシーガー……

信用してた人間に裏切られ、部下をも失った私にとっては……

正に救いの手だった……

その時…長年、自分の感情を押し殺して任務に徹していた私の中の
何かが抑えきれなくなつて、私はシーガーに縋り付くように泣いた

-
-
-
-
-
-

「……………それ以来かしら、シーガーに惹かれるようになったのはあ…
…」

「フフフツ……………シーガーらしいわ、命令違反を承知でねえ……………」

アハアハッ……そこがシーガーの良い所なのよね…

何故、命令違反を承知で来たんだって聞いた時なんて……

【同じように国を護る立場に居る仲間を助けられないような奴に、国を護れるのか？】

…って、笑いながら言ってたわぁ……

「じゃあ、チェキータはシーガーのどこに惹かれたのかしらぁ……？」

脱ぎ捨てた下着を拾い上げ、それを着ながらチェキータを見る

「アタシの場合は……ヘックスのような感じでは、なかったかねえ？」

確か、あれはまだ陸軍特殊部隊時代……
デルタ・フォース

-
-
-
-
-
-
-

まだ陸軍の方で暴れまわってた頃、アタシは欲求不満な感じだった

陸軍でも随一の強さを誇り、周りの連中からは浮いてる存在だった
……

そんな時、シーガーと出会った事となる

当時、シーガーはあちこちの部隊や部署へと転属しては奇想天外（
又はクレイジー）な行動をとって、手に負えないと別の部隊へと転
属を繰り返すので有名な軍曹……軍隊でも常に噂の問題児^{トラブルメーカー}だった

初めて、顔を合わせたのは白兵戦の訓練時

また見かけ倒しのヤワな奴だと思っていたのだが……

いざ、訓練が始まると僅か数分でアタシとシーガーとの一騎打ちとなり、こちらの攻撃を簡単に避けては、全く読めない奇抜さが目立つ攻撃を繰り返す…

そして、三十分ほどが経過した頃には…

陸軍最強と呼ばれていたアタシは、アイツの前で息も絶え絶えの状態で膝を着いていた

【ハア…ハア………やっぱ、陸軍最強と言われる腕だなあ…チエキータ？】

敗北感よりも以前までアタシの中を渦巻いていた欲求不満な感じは消し飛んでいた…

何よりも、アイツに名前を呼ばれる事に喜びを感じた

それから、よく白兵戦の訓練や軍事作戦の際には必ず、アタシの隣にはシーガーが居た

けど、2、3ヶ月が過ぎたある日…

ある任務中、一人の隊員のミスから部隊が全滅の危機にさらされる状況となり、アイツは部隊を逃がす為に単身、一人で敵陣へと乗り込み、自らが囷となった

そのお陰で、全滅は免れて任務も無事に遂行……基地へと帰還して、待っていたのは……

- シーガーへの転属命令だった -

アタシらはシーガーのお陰で助かったと言っても過言ではない

直ぐ、上層部へと抗議を持ち掛けるもアイツは……

【転属は俺の趣味のようなモンだ。それにお前らには迷惑をかけたくねえ】

……そう言っで、アイツは部隊を去っていった

その後、アタシに残ったのは妙な喪失感とアイツが隣に居ないという現実だった…

-
-
-
-
-
-

「それから、この部隊の選抜の噂を聞いてからは鍛錬の日々。また、アイツと一緒に戦えるって期待しながらね」

そう言つて、服を着ながらヘックスへと目を向ける…

「意外と一途なのね……でも、チエキも知らず知らずの内に惹かれてつた訳か…」

「そういえば、シヨコラーデはどうなのよ？ アタシやヘックスのは分かったけど、アイツとはそんなに関わりがないんじゃない？」

「シヨコラーデは……そうね、また少し昔話になるけども……」

-
-
-
-
-
-

当時、私がパラミリとして活動してる時にシヨコラーデと初めて出会ったわ…

でも、今みたいに笑う子じゃなかったわぁ……

何時も暗そうな感じで何かを抱え込んでるような表情をして、どこか無理をしてる感じ……

その理由は所謂、偏見だった…

若くして、CIA所属の情報屋となった彼女には良い噂を聞くことは無かった…

「彼女は上役に身体を使って、今の立場に上り詰めた」、
「個人情報^{リーク}を密告して、上役たちに気に入られている」など……

実際は彼女の情報収集能力が優れているからであって、全くの根も葉もないくだらない噂なのだが……

噂というのはどんどん広がっていくモノ…

それがどんどん彼女を精神的に追いついていった…

そして、私たちと同様、シーガーと出会う事になったのよねえ……

当時、シーガーは軍だけの情報網では不充分と考えていて、腕の立つ情報屋を探していた

そして、偶然か必然なのかは分からないけど、シヨコラーデと出会う

あの子は疑問を感じてたみたいで…

「何故、色々な悪評がある自分なんかに情報を提供して欲しいのか？」

でも、シーガーにはそんな事なんて関係ない

【それは単なる噂でしかなくて、お前はお前だろうが？ 俺は噂な

んかよりもお前の情報屋としての腕が欲しいんだよ】

一人、色々と抱え込んでた彼女もシーガーのそんな所に救われて、
惹かれたんでしょねえ……

-
-
-
-
-
-
-

「成る程ねえ……やっぱ、天然タラシかしら、シーガーって？」

「三人共に苦労しそうねえ……あんな人に惹かれたんじゃない……」

-
-
-
-
-
-

「ヘックシュツ!!」

温度が低すぎたんだろうな……

シャワーの温度を上げ、再び頭から浴び始める…

チエキたち、三人に好意を抱かれてるのは薄々、気付いてはいる

でなければ、夜這いなんざをかける必要は無いだろう…（だが、ヘックスとチエキは「溜まったから」って理由でやりかねないが）

…でもよお……………

「一体、何時にそんなフラグを立てたんだ、俺は……………」

正に謎だ…………

- - - - -

シャワーを浴び終え、濡れた髪を拭きながら広間^{リビング}へと向かうと、そこには…………

「ふあ、ふあひいひよふっふ、ふいーふあー（訳：あ、おはようッス、シーガー）」

「シヨコラーデ……何時も言ってるが、口の中にメシを詰め込んだまま、喋んなっての……」

軽く、5〜6人分はあるであろう程の量の朝食を口に詰め込みながら、パソコンをいじるシヨコラーデが居た

「ムグムグッ……だって、お腹は減るものなんっスよ？ 人間、空腹には勝てないんだから」

俺はその細い身体のどこに、そのふざけた量のメシが入るのかが不

思議でしょうがねえよ……

「あ…そう言えば、さっき、メールが来たっスよ？」

ほらッ、とパソコンの画面を俺に見せる…

宛先は………

「げっ……上層部からかよ……」

メールの内容を見ると即刻、削除したくなる内容だった…

『明日、本部へと召集。新たな駐在任務として詳細を説明後、イラクへと向かってもらう。尚、拒否権は存在しない』

やれやれ……休暇は1日で終了かよ……人使いが荒いぜ、全くよ……

だが、俺らはまだ知らなかった……

この1日だけの休暇が…軍隊で過ごす事になる最後の休暇だとは……

昔話　　〱　昔話といつても、人それぞれ　　〱　（後書き）

やっぱり、上手くまとめられない……

準備　　ゝ　何事にも準備は必要　　ゝ

あのメールから、翌日には俺らはイラクへと派遣された

内容はこうだ、とある政権が崩壊後、その残党の処理と情勢維持の
為……

それから、半年間はちらほらと現場への偵察に残党の処理に追われ
る日々……

そして、少しずつも平和を取り戻していき、軍上層部からも引き時
だと撤収の話が出始めた頃だった……

-
-
-
-
-
-

「それでは、大尉 我々も本部へと戻りますが……大尉もお元気で」

「ああ、そつちも元気でな。早く、家に帰ってやってカミさんを喜ばせてやれよ?」

本部へと戻っていく仲間たちを見送りながら、煙草をくわえて愛用のオイル・ライターで火を着ける……

「シーガー大尉ですか?」

後ろから声をかけられて、振り向くとそこには……

「どうも、大尉…会えて、光栄です。私はCIAの「リンチ」という者です」

軍の拠点基地では先ず、見ることの無いスーツ（上着を着なず、上はYシャツのみだが）の上に防弾ベストを着用したサングラスの男が居た…

「リンチ」……………

「以前、「砂漠の嵐作戦」^{デザート・ストーム}の際にもそんな名前の男が居たって聞いていたが？」

「ええ、以前の者からその名前を引き継ぎましたので…」

…成る程な……………

「俺の部隊にも、そちら側（CIA）の出が二人居るが……知ってるか、CIAは本名を名乗らないからあまり、好かれてないのを？」

「ヘックスとシヨコラーデの二人ですか、彼女らは有能な局員でしたよ。だから、貴方の部隊に居る」

「…それで、こんな所まで来て何の用だ？　ただ世間話をする為に来る訳が無いよな？」

お役所仕事の連中が現場に向かうのは先ず、無いだろう（「P・O・O・」なら、話は別だが…）

すると奴は一枚の写真を手渡し、こう言った

「以前、「サダム・フセイン」が米ドル紙幣の原版とその印刷機を所有していた話はご存知で？」

その写真には、印刷機を運搬する兵士たちの姿が写っていた

「その印刷機は、砂漠の嵐作戦の時に軍が奪還したって話だろう？」

「ええ……ですが、原版は行方不明のまま」

確かに原版がどうなったのかは聞いた事が無いが……

「原版だけじゃ、どうしょうも無いだろう？ 印刷機が無ければ……」

「……その印刷機が復元されたと言ったら？」

奴の話じゃ、こうだ……

造幣局から盗み出した部品パーツを一から組み立てて、「自由の兵士」の
クズ共が米ドル紙幣を自由に刷れる印刷機を復元した……

それが事実なら、テロの資金調達する必要も無くなり、一気にテロが
活発化するだろう

「……何処にあるんだ？」

するとリンチは、俺がそう言うのを知っているかのように笑みを浮かべる……

「今のところ、バグダットですが……30時間以内に運ばれます。原版と印刷機の他にその印刷機で刷りまくった30億ドル程の現金と共に……」

30億もかよ……

「連中の運搬手段は……？」

「トレーラーです。それを護衛するのは完全武装の武装護衛^{コンボイ}、元イラク特殊部隊であって正に殺しのプロです」

- 貴方なら、どうやって阻止しますか？ -

-
-
-
-
-
-

ラス・アリストリア將軍 基地司令官

「儂にどうしろと言っんだ、シーガー？」

俺は將軍に話をつける為、リンチと共に訪れた

「儂が指揮官ならば、お前に任せるが……これは撤退命令だ、バグダットには近付くなとな」

「だが、スレイヤーズ隊に任せたら、間違い無く国際問題になるぜ？ それこそアイツらはズブの素人集団だ。第一、連中のリーダーは？」

「……【ルーク・ウィルソン】だ……」

「ルーク」……冗談だろ……？

「ルークだと？……アイツは、スーダンで無抵抗の女、子供を殺して興奮してるような変態野郎だぞ？」

「シーガー、これは命令なんだ。この件は諦める……」

「將軍、そこを何とか……」

すると將軍はリンチを見て、こう言った……

「他の「リンチ」と言う男は大勢、見てきた……1968年のラオスでもな。まさか、君の親父さんじゃあ、無いだろうな？」

「……無関係です」

「本当か？ 見掛けも今の君にそっくりだったぞ、リンチ」

「……これから、私は別件でカプールへと発ちます。48時間以内の解決を期待しておりますので……」

そう言っ、リンチは足早にテントの外へと行った…

「…司令部で防弾ベストとはな…所詮、CIAには机仕事がお似合いか…」

立ち去っていったリンチを見て、將軍は俺の方へと向き直す…

「お前が弱くなったと言っている訳じゃない…だが…」

「…「教官」、アンタに鍛え上げられた時の少なくとも、10倍は強くなっている。スピードだって、新兵時代の倍だぜ？」

そう、俺が入隊して間もない頃、俺の教官として鍛え上げたのが今

のラス・アリストリア將軍だ

俺が此処まで生きてこれたのは將軍のお陰でもある……

俺が出会った中で、最高の上司でもある

「ラス教官……原版を取り戻せば、新たな流血を防げる。テロの軍資金を無くせるんだ……頼まなきゃ、駄目なんですか……？」

「……儂を困らせるな……お前は儂が受け持った中で、最高の兵士……
……今では、お前たち以外に変幻自在かつ確実に重要な任務をこなす
部隊を見たことがない……」
チーム

「それより、何よりも僕に【頼む】と言わないでくれ……頼むのは、僕の方だ……」

- シーガー、頼む……忘れてくれ -

- - - - -

「なあ、ヘックス……帰国が少し延びることになった。バグダットに戻るぞ」

司令部から出た俺はヘックスを呼び出した…

「でも、帰国命令は出されてるんでしょっ？」

そりゃ、確かにな……

「だが、事情つてのが……「おい、シーガー」……ルーク……」

俺らの前には、黒シャツと迷彩柄のズボンに「チェスト・リグ」を身に付けた私兵集団……「スレイヤーズ隊」が居た

「オレたちの任務を横取りするって聞いたんだが……そりゃ、本当か？」

「スレイヤーズは独裁政治の復旧に民主主義の破壊工作に忙しい、って聞いたんでな……」

コイツ等、スレイヤーズ隊は軍でも悪評が絶えない連中だ……

【動く物が無くなるまで撃ちまくる】が、連中のモットー……「敵味方構わず」にな……

「大したことじゃ無いぜ、大尉？」

「アハアハッ……相変わらずの減らず口ねえ……私兵と言つよりも武装した葬儀屋かしらあ……？」

「ヘックス、相変わらずのイイ女だよなあ……思わず、興奮してヘンな事を想像しちまうぜ……」

値踏みするかのようにサングラスをずらして、ヘックスの身体を眺めるルーク…

「……此処は軍事基地だぜ、ド素人はさっさと失せな」

そう言って、俺とヘックスは奴らの横を通り過ぎていった……

- - - - -

「……という訳で、また命令違反をしての極秘作戦って訳ッスか…」

「何言ってるのよ、シヨコラーデ。楽しそうじゃないのよ?」

全員を集め、計画を練る事にした……

既に非法ながらも將軍には許可を得てる……

將軍も俺も……「馬鹿な所」を持ってるって訳だ

「【準備】、【展開】、【実行計画】だ。よく呼んどけよな」

そう言つて、人数分の資料を手渡していく……

「アハ、アハハッ！　アハアハッ……はあ、随分と面白そうな計画ねえ……」

「完全にイカレてるわねえ……完璧じゃない……」

「……これつて、軽くイカレてるを越えてるっスよね……？」

資料の内容を読んだ三人からの感想を聞きながら、煙草に火を着ける……

「……ノってきただろ？」

-
-
-
-
-
-
-

-
チエキ、アンダーカバーに使える鉄板を調達しろ
-

い
-
ヘックスはバッテリーを……スレイヤーズから失敬すれば良
-

-
記者証と小道具が必要だ
-

- チェキ、テレビカメラを報道陣用のテントからくすねてこい

- ショコラーデ、磁石が必要になる。それも強力なヤツをな

- 大量のエアバックも必要だ。後は俺が揃える

準備を終えた俺らは將軍と酒を飲み交わし、談笑をしていた……

作戦の成功を祈願してのな……

「……準備は良いな？」

そう言って、將軍は俺らの持つグラスに酒を注いでいく……

「……それでは……幸運を祈る……」

そして、俺らは一気に酒を煽った……

展開と実行　　人によって計画とは、面白い位に上手くいく　　（前書き）

キャラたちの会話と戦闘描写を同時に書くのは難しい……

展開と実行　　人によって計画とは、面白い位に上手くいく　　

イラク　「バグダット」

【奴らが動き出すのは、3時間以内だ】

道路を一台のトレーラーが走る…

いたって、普通の光景なのだろう……

トレーラーの前後に武装した装甲車に、トレーラーの運転席の屋根に固定銃座が設置してるのを除けば………

【連中は障害を吹き飛ばし、進んでいく】

装甲車とトレーラーの前には衝突事故が起きており、互いの運転手が胸ぐらを掴んでもめていた……

するとトレーラーの助手席に居た男は立ち上がり、固定銃座へと移動し……

文字通り、二台の車を固定銃座から発射される大型口径の弾丸で吹き飛ばした…

激しい爆発音と共に、二台の車が左右別々に吹き飛び、道を開けるとトレーラーは何事も無かったかの様に通過していった……

-
-
-
-
-
-

トレーラーの位置から1〜2 K m程、離れたホテル

一人の女性が警備兵と記者たちの間を通り抜け、入り口の警備兵の前へと近付く…

【ショコラーデ、お前の開始地点は外国人記者と警備兵の詰め所スタート・ポイントになっているホテルだ】

「フランス人記者の「アンナ・ショコラーヌ」っス」

そう言って、首にぶら下げた顔写真の入った記者証を警備兵へと見せる

勿論、拠点基地で記者から拝借したのを偽装したパスだが……

「よし、入れ」

記者証を確認した警備兵は「アンナ」をホテル内へと入れた…

-
-
-
-
-
-
-

ホテルから数百メートル程、離れた町市場

【チエキ、お前の出勤は18:00だ】

「……そろそろかしらね…?」

裏路地に隠してある一台の大型バイクに跨り、エンジンを掛けると
腕時計を確認する…

時刻は「17:50」を示していた…

-
-
-
-
-
-

ホテルの地下に位置する下水道

「……ハア、下水なんて貧乏クジじゃないッスか……」

ホテルの地下から下水道へと降り、走りながら呟くシヨコラーデ……

「それに、こんな重い装備モノを持って走るなんて聞いてないッスよ……」

【ホテルに入ったら、下水道に降りて第二開始地点に迎え。武器はサブ・マシンガン
軽機関銃を持ってけ、それにスレイヤーズから拝借した鉄板とバッテリーから作った強力磁石もな】

「全く……第一に後方支援担当なんっスよ、私は……」

数分程、走り続けて一つのマンホールの真下へとたどり着くと梯子を登り、蓋をずらす…

ちょうど、その数メートル手前には武装したトレーラーが走っていた

-
-
-
-
-
-
-

「さあーて、お仕事の時間かしら…」

腕時計が「18:00」を示すと同時に大通りへとバイクを走らせる

-
-
-
-
-
-
-

【タイミングが全てだぞ、シヨコラーデ。一瞬のズレも許されないからな？】

前方の装甲車がシヨコラーデの待機するマンホールの真上を通過していく…

「シーガー……もしも、死んだら絶対に化けて出てやるっスからねッ！―」

トレーラーの荷台部分がマンホールの真上に来た瞬間、両手に持った強力磁石の電源を入れ、磁石をトレーラーへと向ける

その時、磁石が発生させる強烈な引力に引き寄せられたシヨコラーデは地面スレスレの位置にあるトレーラーの真下にしがみついた

【トレーラーの真下にしがみついたら、後続の装甲車を潰せ】

懷からシーガーに手渡されたチタン製の撒き菱を後続の車両へと向け、バラ撒く

次の瞬間、猛スピードで走る装甲車は撒き菱によるパンクによって、操縦不能に陥って道路脇の建物へと突っ込んでいった…

-
-
-
-
-
-
-

【前方の装甲車がショコラーデに気付いたら、まず狙いやすい側面へと移動する。その時がチェキ、お前の出番だ】

バイクで裏路地を突っ切ると目の前にはトレーラーの真横へと移動しようとする装甲車が……

【突っ込む際は左右を確認しておけ。それにバイクのガソリンも満タンにな】

バイクの座席に立ち上がり、装甲車に突っ込むと同時にトレーラーへと飛び移るチェキータ……

そのまま、ガソリンが満タンのバイクは装甲車の側面へと衝突し、爆発。その反動で装甲車は宙を舞い、トレーラーの後ろへと転倒しながら誘爆を起こす

【トレーラーの運転席に居る二人以外にも見張りは居る。丁重にお引き取り願えよな、チェキ？】

トレーラーとコンテナを繋ぐ接続部に飛び移ると助手席に居た見張りが異変に気付き、チェキの前に現れるも……

「ごめんねー……そして、さよなら」

見張りが銃口を向ける前に銃身を掴み、見張りの急所へと鉄板を仕込んだブーツの蹴りを叩き込む

そのまま、蹴り飛ばされた見張りは駐車していた車へと勢い良く飛ばされ、衝突して屋根をへこませる

【そのまま、運転席席へと移動して運転手にも退場してもらえ】

無駄な動きも無く、運転席のドアを開け、運転手を外へと引きずり落として運転席へと入るチエキータ

だが、コンテナの上からチエキータの居る運転席へと移動する残りの護衛が銃口を窓越しからチエキータの頭へと狙いを定める……

【取りこぼした敵が居ても、ヘックスが片付ける】

走行を続けるトレーラーから少し手前のビルからワイヤーを伝い、滑降するヘックスがそこに居ることを護衛が知る訳が無い……

無防備の護衛へと滑降して、接近したヘックスはそのまま、護衛を道路へと蹴落とす

そのまま、コンテナから運転席に繋ぐ接続部へと移動したヘックスは真下に居るシヨコラーデを引き上げる

「ほら、ちゃんと計画通りでしょお？」

「だから、シーガーの計画はマトモじゃないんっスよッ！？ 一歩、間違えたら確実に即死っス！！」

『ほらほら、話してる暇があるなら早く、次の行動に移ってよね？』

無線からチェキータの声が響くと二人はコンテナの真上へと移動する

コンテナの真ん中辺りで、それぞれが用意したワイヤーを中心に取り付けると荷台の左右の側面へと移動する

左右、別々の側面へと移動した二人はサイド・バックからエアバックを仕込んだプレートを端から端へと取り付けていく

『この先、曲がるからしっかりと掴まっててよねえ？』

無線から連絡が入ると同時にトレーラーは大通りから右側のトンネルへと突き進む……

そのトンネルの入り口脇には「建設中。この先、800m程先、道路無し」という看板が立てかけてあった……

- - - - -

『チエキ、こっちのエアバック取り付けは完了したわあ』

『こっちも完了っスよー』

二人からの無線連絡がチエキータの無線へと届く

「OK、それじゃあ……」

ふと、サイドミラーから後方を見るとそこには一台の車がトレ
ーラーを追っていた

明らかに普通じゃあ、出すことの無い速度で……

「背後に敵っスー!」

トレーラーを追いかける一台の車両に気付いたシヨコラーデは即座にマシンガンを構え、フロントミラーへと発砲する

「こつちからも視認したわ……って、防弾仕様じゃない……冗談じゃないわぁ……！」

左右、シヨコラーデとヘックスからの銃撃をモノともせず、トレーラーを追いかける車両からも負けじと反撃が返ってくる

『チエキ、そろそろ第三地点よ。コンテナの中に早く移ってえ……！』

ヘックスからの連絡を受け、運転席からコンテナへと銃弾が頭をスレスレで通り過ぎていく中で移動していくチエキータ……

『コンテナの中に入ったわ、そろそろ行くわよ?』

コンテナへと入ったチエキータからの連絡が二人の無線へと届く

「計画じゃあ、この部分が一番の不安だったんっスよ!!」

激しい銃声がトンネル内で木霊する中、シヨコラーデが叫ぶ

「大丈夫よお、ワイヤーは切れないから心配しなくても…!」

追撃して来る車両へと反撃をしながら、ヘックスが答える…

「いざという時は、コンテナに爪をたててもしがみついてやるっ

スよ!!」

運転手が居ないまま、走り続けるトレーラーの前方には建設中で途中までしか無い「終点」が見えていた…

「掴まってて……行くわよお……!」

しっかり、ワイヤーへと両手でしがみつくヘックスとショコラーデ…

「やっぱり、無茶苦茶っスよおおおッ!?!」

ショコラーデが叫ぶと同時にトレーラーは宙へと舞って、コンテナ

は川へと投げ出されて水面へと叩きつけられる

その衝撃で左右の側面に取り付けたエアバックが作動、水中で膨らんだ複数のエアバックの浮力によってコンテナは浮かび上がっていく

建設中の道路のギリギリの所で止まった車から、二人の護衛が浮かび上がるコンテナへと銃口を向けるが……

「悪いな、此処からは通行止めだぜ？」

突如、護衛たちの眼前へと現れた大型ヘリに取り付けられた機銃の掃射攻撃によって、一瞬で車ごと、機銃の餌食となる

『ヘックス、ゲームセンターで、クレーンキャッチャーをした事があるか？ まるで、あれと同じだよな』

大型ヘリを操縦するシーガーからの無線が入ると共にヘリからフック付きのワイヤーが下ろされていく…

ワイヤーがコンテナへと届くと同時に、二人は左右の両端へとフックを取り付けていく

『よし、これから荷物を吊り上げて基地に戻るぞ』

取り付けられたフックで、ヘックスたち三人を乗せたコンテナを吊り上げてヘリは基地へと帰投していった……

展開と実行　　人によって計画とは、面白い位に上手くいく　　（後書き）

取り敢えず、後一話で「A - チーム」編が終わる予定です

任務完了　　～　全てにおいて、良い結果で終わる訳じゃない　　～（前書き）

今回の話で軍隊編が終わります

任務完了　　～　全てにおいて、良い結果で終わる訳じゃない　　～

イラク　軍の拠点基地

俺らは「荷物」の奪還に成功させ、基地へと帰投した

『將軍、聞こえますか？　荷物の奪還に成功しました』

ヘリから降りると無線で將軍への任務完了を告げる

『了解、五分でそっちに向かう。祝杯のスコッチのボトルを持ってな』

『どうせ、だったら1ケース位は用意してくださいよお、將軍？』

『それにご飯もお腹、いっぱいに食べたいっス！』

コンテナの手前に立っていた俺らの目の前に將軍が乗る装甲車が見えると俺も装甲車へ歩み寄っていく

「今回も奇想天外な作戦だったわよねえ、シーガー？」

肩にぶら下げた突撃銃を両手に持ち、顔を覗き込むチェキータ…

「何時も言ってるだろう？ 作戦つてのは…」

「「奇を以って、良しとすべし」」

俺の言葉の続きをヘックスとショコラーデが言う…

…それは、俺のフレーズだぜ？

「ああ、そうだよなあ……」

そう笑いながら、將軍の車まで後、数メートル程の距離に近付いた時……

突然、将軍の乗った装甲車は爆発を起こした……

- - - - -

爆風で後ろへと飛ばされそうになるのを何とか、堪える

鼓膜が震え、視界がぐらつく……

何が起きた？ 何故、基地内で爆発が？ 将軍はどうなったんだ？

頭の中で様々な考えが浮かび上がって、混乱している俺は軽い吐き
気を覚える

「將軍ッ！！」

辺りの兵士が炎上する装甲車へと駆け寄る……

だが、炎は装甲車を包み込んで爆発のせいで半ば、原型を留めていない……

明らかに將軍の生存は絶望的だったのは分かりきった事……

その時だった、辺りの兵士たちの叫ぶような声に混じり、微かに聞こえる複数の足音が後ろから聞こえたのは……

俺は振り返ると同時に銃を構える……そこで見たのは…

「ルーク……ッ!」

コンテナから原版入りのケースを片手に走り去ろうとするスレイヤーズ隊……ルーク・ウィルソンたちの姿だった

-
-
-
-
-
-
-

「背後に敵だッ!」

そう叫ぶと同時に引き金を引き、奴らに向けて撃ちまくる

俺の声を聞いた三人も即座に振り返り、応戦を開始する……

だが、焦りから生じる手ぶれか射程距離外の為か、発射される弾丸は奴らの足下やコンテナに命中するばかり……

その間も奴らは振り向く事なく、走り続ける

「クソッ、追っぞッ!」

攻撃を中断し、奴らの後を追いかける…

コンテナの側へと近付き、後少しで奴らに追い付くと思った瞬間……

突如、コンテナが爆発して俺らは数メートル後ろに吹き飛ばされた

-
-
-
-
-
-
-

爆発して後ろへと吹き飛ばされたシーガーたちを横目に、オレたちは用意しておいた装甲車に乗り込む

だが、残念だったなあ……奴らも死んでくれれば、オレたちも「計画」にとっても楽だったんだが……

まあ、良しさ……連中の無様な姿を拝めただけでも良しとしよう

「悪いな、シーガー？ これもオレたちの仕事なんadena……」

そう言うところク・ウィルソンたちを乗せた装甲車は基地を後にした

原版入りのケースを持って……

-
-
-
-
-
-

爆発したコンテナからは、焼け焦げた30億ドル分の紙幣が雨のよ
うに降り注ぐ……

「……ルーク……あの……クソ野郎……ッ！」

怒りで握り締めた手から血が滲み出る……

行き場の無い怒りに身を震わせている最中、俺ら四人は周りの兵士
たちによって包囲されていた……

-
-
-
-
-
-
-

アーリントン国立墓地

鉛のような重たい空気と曇天からは雨が降り注ぐ中、将軍の葬式が行われていた

空へと掲げられた銃口から発射される銃声が鳴り響く中……

俺は一人、将軍の埋葬を離れた場所から見つめていた…

その時、俺の頭の中では先程までの会話が延々と巡っていた……

- - - - -

【つまり、貴官の率いる部隊の極秘作戦の存在を知る唯一の証人は死亡したと？】

【いいえ、裁判長…將軍は死亡したのではなく、殺害されたのです】

【大尉……我々は長年、君たちのような部隊を目にしたが……君らは「無法者」だ】

【君たちは軍の本質を揺るがしかねない危険な存在だ】

- シーガー、無実を証明しようも無いのよ -

- でも、私たちは無実なんつスよ! ? -

- また……裏切られるのお……? -

【裁判長、彼女らは私の命令に従っただけであり、全ては私の罪であります】

【いえ、私は自分の意思で作戦に参加しました】

【自分も同罪であります】

【自分もまた、同罪でありますっス】

- 何を考えているんだ、お前らは！？
-

- 生きるも死ぬも一緒でしょう？
-

- 私たちは四人で一つなのよお…？
-

- つまり「家族」なんっスよ、シーガー…？
-

【…では、当法廷は合衆国軍事法に則り、「A・チーム」こと、「アルファ・チーム」を解体…貴官ら、四名のこれまでの功績は剥奪され、【不名誉除隊】となす】

【本来なら刑務所行きは免れないも、今まで国に尽くした面を考慮しての判決だ。寧ろ、感謝するべきなのだぞ？】

-
-
-
-
-
-

葬式が終わり、辺りには俺一人だけが佇んでいた…

俺は一つの墓標の前に立つ

『国に忠を尽くし、大いなる偉業を果たした英雄「ラス・アリスト

リア將軍「此処に眠る」

「…必ず、ルークたちを見つけ出し……原版を取り戻し、奴らに報いを受けさせる……」

そう、どれだけの月日が過ぎようとも……

必ず……

「では、將軍……いえ、ラス・アリストリア教官。貴方は軍の誇りであって……俺の最高の上官でありました」

静かに敬礼をして、墓地を後にする……

雨はいつの間にか、止んでいた……

任務完了　　～　全てにおいて、良い結果で終わる訳じゃない　　～（後書き）

一応、次話からは新たに「傭兵」として四人は再び行動を始める予定です

追加設定& a m p・傭兵部隊について　　そう簡単には変わらない　　（前

今回も補足であつて、「A・チーム」に代わる新たな部隊の説明と
キャラ紹介の追加設定です（基本的な部分に関しては、以前のキャラ紹介と同じです）

追加設定& a m p・傭兵部隊について　　そう簡単には変わらない　　

【E x p e n d a b l e s】

シーガー、ヘックス、チェキータ、シヨコラーデたち、元「特殊少数精鋭部隊（A - T E A M）」のメンバーが設立したP M C（民間軍事企業）であつて所謂、傭兵部隊

「消耗品」、又は「使い捨て傭兵部隊」を意味しており、高額な報酬と引き換えに仕事を完全遂行させると同時に、たった四人でありながら情報収集から破壊工作までもをこなす完全無欠な傭兵集団として、業界でも有名である

しかし、リーダーであるシーガーが気乗りしなければ、如何なる金額を積まれても引き受けない事がある（逆に言えば、引き受ける気ならば、タダ同然の金額でも引き受ける）

「Expendables（消耗品）」と名乗る由来は、不名誉除隊を境に「兵士は所詮、使い捨ての物同然……だったら、開き直つてやろうじゃねえか」と名付けた

会社のロゴとして、「Expendables」と書かれた髑髏の上に宿る鴉がトレードマークとなっており、メンバーの身体にも同じロゴの刺青が入っている事が特徴

表向きには、アメ車専門のガレージ「Cross Road」として経営している（『Cross Road（十字路）』の由来は車を買う換えたり、手にする事で十字路の様に様々な人生へと分岐するという意味から）

-
-
-
-
-
-

「ダリ阿斯・シーガー」

軍をチエキータと共に不名誉除隊後（ヘックスとシヨコラーデはCIAへと戻された）、ルークたちの足取りを掴むには「同じ世界」へと入れば、良いとしてヘックスとシヨコラーデを勧誘して、アメ車専門のガレージ（同時に裏側では、民間軍事企業「Expendables」）を設立した（ルークたちへの報復もだが、兵士としての能力を生かす為でもある）

メンバーで、一番の愛煙家（と言っても、他の三人は煙草を吸わないが）であり、よく吸う銘柄は「アメリカン・スピリッツ」

様々な武器を扱えるが、狙撃銃（PSG-1）や拳銃（Mk-23）等の米国製、または軍や特殊部隊装備の銃を好んで使用する

会社のロゴと同じ刺青を背中に入れている

- - - - -

「ヘックス」

「A - TEAM」の解体後、シヨコラーデと共にCIAへと戻されるも冷遇した扱いを受けている中、シーガーからの勧誘を受けると同時にシヨコラーデと共に退職後、シーガーたちと仕事を始める（CIAが情報漏洩の防止策として、「処理部隊」を送り込むも呆気なく、シーガーたちに壊滅へと追い込まれて以来、それらしき妨害は無くなった）

使用する武器は、シーガーと同様に軍や特殊部隊の使用する銃器を好んで使う（本人曰わく、「元々は軍人だったし、パラミリの名残かしらあ…」との事）

ロゴの刺青は右肩の裏側に入れている

-
-
-
-
-
-

「チエキータ」

不名誉除隊後、シーガーと共に「Expendables」を設立、
今でもシーガーと共に戦える事を一番、喜んでいる

使用する武器は、P-90などの小型の銃器を好んで使う（元々は
接近戦を得意とし、愛用のナイフと上手く使い合わせれる為）

ロゴの刺青は、左肩に入れている

-
-
-
-
-
-

「シヨコラーデ」

ヘックスと共にCIAを退職後に再び、シーガーたちと仕事を始める

204

相変わらず、後方支援を担当するも、よく現場での工作にまわされるのが悩み

これと言って、愛用する武器は無いがシーガーたちから銃器の取り扱いを指南され、ある程度の武器は扱える（だが元々、軍人ではなく後方支援を担当してる為に反動の強い重火器などは苦手）

ロゴの刺青は、左太股に入れている（あまり、目立つ部分には入れ
たくなかった為）

追加設定&a m p・傭兵部隊について　　そう簡単に人は変わらない　　（後

取り敢えず、今後は傭兵としてシーガーたちが活動を再開させます

傭兵　　身体が覚えた経験と感覚は消えないモノ　　

不名誉除隊後、俺ら（正確に言えば、俺とチエキータは軍を去る事となり、ヘックスとシヨコラーデはCIAへと戻された）

俺は直ぐに、ルークたちの足取りを捜すも……結局、奴らの手掛かりは一つとして掴む事は出来なかった……

だが、同時にある結論へと辿り着くことにもなった

奴らを見つけ出す為には、同じ領域……つまり、「傭兵」としての世界に入る事だった…

自分が余計な心配事やリスクなんて、考える事をしない性格と分かっている

俺とチエキータはすぐさま、残りの二人を集め、四人それぞれの人脈やコネを使い、PMC（民間軍事企業）を設立した（元々、戦闘や情報収集、処理能力に（異常な程）特化した四人にとっては簡単な事）

設立時、これと言つての規則は無^ルかったが原則として、二つ程の規則を俺たちは作った

【仕事と依頼人は選ぶ】

【何があつても、絶対に仲間を裏切らない事】

その二つを俺らは誓った

その後は、アップ・タウンとダウン・タウンの中間に位置する郊外に表向きとして、
アメ車専門のガレージ（販売 & amp ; 修理屋）『Cross Road』を設立した

それからは、表ではガレージとして、裏側では傭兵としての二つの
仕事をしながらもルークたちの足取りを探る毎日を送っていた……

-
-
-
-
-
-
-

上層街 大通りに位置する銀行

『犯人は複数、防弾ジャケットを装備し、小型携帯式ロケット砲に突撃銃を所持しており、完全武装している』

『こっちは警官が三人以上もやられたッ！ 至急、救急車をよこしてくれッ！！』

『銀行に立てこもった犯人たちは、銀行内の人たちを人質に……』

『二時間以内に車を用意しないと人質を殺すと言っている！！』

『既に「S・W・A・T」にも死傷者が出ているッ！ 応援を早くッ！…！』

白昼の大通りはさながら、戦場だった…

銀行の辺りには横転した数台の警察車両が炎上して、その周りには道端に倒れた仲間を引きずりながら、応戦する警官や車両を盾にして隠れるS・W・A・T・隊員…

その警官隊から向かい側の銀行からは突撃銃を手に、警官隊に向けて発砲し続ける男たちが数名、居た

警官隊の隠れる車両に向け、携帯式ロケット砲を発射させ、爆発する車両から逃げる警官たちを容赦なく銃撃していく…

そんな戦場と化した大通りにある銀行から、およそ2000m程、離れたビルの屋上から狙撃銃を構えていた

何故、そうなっているかだつて？

それは今から二時間前に遡る……

-
-
-
-
-
-
-

【二時間前】

相変わらず、ガレージへの客入りの少ない状況に暇を持て余していた俺らは、仕方ないので休業の札を出し、広間でそれぞれ、好きなように時間を潰していた…

「なあ、ヘックス……」

「何かしらあ……シーガー……？」

「何で、俺の上に寝そべってるんだ……？」

先程までソファーに寝転んで、テレビを眺めていた俺の上には何時の間にか、ヘックスが馬乗りとなっていた……

普通は気付くだろう……だが、コイツは気配を完全に絶った上で足音も消して近付くんだよ……！

「あら……イケないかしらあ……？」

ご自慢(?)の双山を俺の胸板に押し当て、妖しい笑みを浮かべる
ヘックス

「いや、だからよ………」

他の二人が怖いんだよ……
チェキータとシヨコラーデ

「……………」

愛用のナイフを研ぎながら、そのナイフよりも鋭い視線で此方を見
つめるチェキータ……

頼むから、無言でナイフを研ぐなよ……それもこっちに感情が全く籠もっていない瞳でよ……

「ブツブツ………」

此方をどこか、病んだような瞳で見つめて何かを呟くシヨコラーデ……

お前も頼むから、その暗く濁った病んだような瞳で見つめるな……

「……何か、面白い番組でも無いかねえ……？」

若干、棒読み気味で言いながらテレビのチャンネルを変える…

自分でも、この修羅場の如きの空気を変えようと必死だという事は良く分かってる……

『先程、上層街の大通りに位置する銀行にて完全武装した強盗犯たち
ちが……』

変えたチャンネルからは、上層街の銀行での立てこもった犯人たちの映像と共に事件を紹介する司会の声が聞こえるとヘックスを隣へと下ろし、テレビへと目を向ける

「白昼で随分と派手にやってるわねえ……普通なら、もっと巧妙にやるんじゃない？」

ナイフをしまい、後ろから俺の肩へと顎を寄せ、テレビへと目を向けるチエキータ……

「それに装備も普通じゃないッスよね、携帯式ロケット砲に自動小銃……突撃銃まで持つてるし……」

俺の頭に組んだ腕を寄せ、テレビを見るシヨコラーデ……

お前ら……俺は置物でも何でも無いんだぞ……？

「……無駄な動きも無く周りの警官に発砲してから、弾倉交換の時には交代するように他が攻撃にまわる……明らかに訓練された動き

よねえ……」

そう呟くと俺の腕に自分の腕を絡めるヘックス……

だからよ……

何度も言うけどな……

「俺は置物でも何でも……」

すると俺の言葉を遮るかの様に、ズボンのポケットに入れた携帯が鳴り出す……

この着信音は……

「はいよ、こちら『Expendables』……ああ……見てるよ……分かった、今から向かう……」

そう言つて、電話を切ると静かに立ち上がる

「ヘックス、チェキータ、シヨコラーデ……「仕事」の時間だ」

- - - - -

俺らに來た依頼は、上層街と下層街の二つを管轄とする警察からであり、先程まで見ていた事件での犯人たちが立てこもった銀行の制

斥、及び犯人たちの無力化（生死は問わず）だった

そんなに乗り気では無かったが、現場に向かう最中にシヨコラーデが仕入れた情報では、相手は元特殊部隊上がりの傭兵であり、警官隊とは比べ物にならない程の武装をした連中だそうだ……

まあ、仕事でのライバルを減らすと考えれば良いか……、等と思い、仕事を引き受けた訳だ…（少なからず、報酬もそこそのモノであり、犯人の生死問わずならば生け捕りよりも手っ取り早く済むしな）

だが、一つの不安が俺にはあった……

「ヘックス」の事だ

今回、犯人である傭兵たちはどうやら過去にテロ組織にも雇われていて、過去に起きたテロ活動にも加担していた様だ……

アイツは、両親をテロで失ってから軍隊……最終的にはパラミリに所属していた

誰よりもテロを憎み、軍に居た頃もテロ関連の任務の際にはどこか、一線を踏み越えたような感じをアイツは醸し出していた……

221

「なあ……ヘックス、大丈夫か……？」

現場へと車を走らせる俺は助手席に座るヘックスへと目を向ける

「……大丈夫よ、何時も通りにやれるわぁ……」

そう言って、ヘックスは笑う

だが、それは今にも壊れそうな脆さを感じさせる笑みだった……

-
-
-
-
-
-
-

現場へと到着した俺らは移動に立てた作戦通りの配置へと着いた

作戦は至って、シンプルな内容だ

まず、ヘックスとチェキータは銀行の横に位置するビルの屋上から銀行の屋上へと移動、その後は通気孔から換気ダクトを使って、内部へと潜入して待機

シヨコラーデは現場まで移動してきた車の車内に設置したパソコンと機材を使用して、銀行のセキュリティへとハッキングして、連中の退路を断つ

俺は銀行の正面から2000m程、離れたビルの屋上から、真つ正面の警官隊に注意が向いている連中への奇襲攻撃と銀行内への誘導を兼ねての狙撃

狙撃された連中が銀行内へと退却すると同時にシヨコラーデがハッキングしたセキュリティを使い、連中を閉じ込めて混乱させる

それと同時にヘックスとチェキータが残りの連中を片付ける……

それが作戦だった

-
-
-
-
-
-
-

『そろそろ、作戦開始だ。全員、準備は良いな？』

狙撃銃を構えながら、側に置いた無線へと呼び掛ける

『準備万端よ、こっちはヘックスと一緒にもう潜入したわ』

『配置に着いた、何時でもOKよお?』

『こつちもハッキング済みッスよ、後はキーを一押しするだけ』

よし……そろそろ、おっ始めるとするか……

『了解、俺の狙撃後に連中が内部へ退却後、シヨコラーデがシャッターを作動させて連中を閉じ込める。後は連中が人質に手出しする前に二人は連中を一掃しろ……作戦開始だ』

そう言う俺は愛用の狙撃銃 - PSG - 1 - を構え直し、スコ
ープ越しから連中の一人の頭へと狙う

過去に幾度となく使ってきたコイツ（PSG-1）……何度も修理と改良を重ね、どの銃よりも愛着がある相棒とも言える存在だった

「……フー……ッ」

深く息を吐き出し、呼吸を整えて心臓の鼓動の周期を把握して、三脚の上に鎮座するその銃口に起こる微かな振動に全神経を集中させる

これまで、様々な状況下で切り抜けてきた俺の身体に刻み込まれた経験が俺を奮い立たせる……

スコープの中心を標的の眉間と口の間の間へと移動させ、狙いを定める（補足でもあるが、そこを狙うのは脳から神経を伝って、身体へと信号を送る際、そこを撃ち抜かれると神経が寸断され、身体へ信号が届かなくなる為である）

狙いを定めた俺は、羽毛が触れただけでも作動する程の極限の軽さに調節された引き金に指を掛け……………

…そして、引き金を引いた

眩い閃光が迸り、それに続き射出音が白昼の空の下、鳴り響く

標的から、およそ2000m離れた場所から発射された7・62mm NATO弾は空気を切り裂き、標的の頭を撃ち抜いた

「……一体、撃破……」

排莢するよりも素早く俺は、ロケット砲を持つ標的へと銃口を向ける

狙うは確実に仕留める為、頭へとスコープの中心を定める

息をつかせない様なスピードで二発目の弾丸を発射させる

二発目の発射から、僅か数秒後には、ロケット砲を持つ男は頭に風穴を開け、地に倒れ伏していた

見えない敵からの攻撃により、二人を殺された連中は辺り一面に発砲し、遮蔽物となる銀行内へと駆け込んでいく……

『シヨコラーデ、檻を閉めろ』

愛銃を肩に担ぎ上げ、無線へと呼び掛ける

『了解ッス』

キーボードを叩く音と共に、シヨコラーデからの応答が返ってくる
と同時に俺は懷から煙草を取り出し、それをくわえて火を着ける……

一応、様子見にでも行っとくか……

そう考えながら、俺は屋上を後にした

-
-
-
-
-
-

「流石よねえ……」

暗闇に身を隠し、息を潜めるチェキータは呟く

シーガーからの狙撃により、二人を殺された犯人たちは作戦通りに銀行内へと逃げ込み、シヨコラーデからのハッキングにより、作動したシャッターが入り口を塞ぎ、袋小路へと追い込まれる

「何がどうなってやがるッ!？」

連中の一人が苛立ちと焦りから叫ぶ……他の連中もどうやら同じようだ

「…さあて……やるわよ、ヘックス？」

愛用のナイフを逆手に持ち、見る者を魅了するような妖しい笑みを浮かべるチエキータ…

「右に三人……左に二人……左側の二人は私が仕留めるわあ……」

そう言うとホルスターに納めた拳銃 - U S P M a t c h - を引き抜くヘックス…

お互いに恐怖心などは全く感じない……ただ、速やかに連中を片付

けるという事だけを意識する

「…………行くわよ?」

その言葉と同時に二人は動き出した

先ず、左側の二人の内の一人の後頭部へと発射された9mm口径の弾丸は男の頭蓋を砕き、眉間へと飛び出して貫通した弾丸は壁に穴を開ける

そのまま、流れるような動作で男の頭へと狙いを定めると同時に引き金を引く…

その時、後頭部を撃ち抜かれて倒れ伏そうとしている仲間の隣にいた男の眼に映った最期の光景は……

先程、後頭部を撃ち抜かれた仲間が受けたのと同じ、9mm口径の弾丸が自身の眉間へと吸い込まれていく瞬間と自身の額に風穴の開いた音だった……

-
-
-
-
-
-
-

ヘックスが左側の二人を片付けると同時にチエキータも右側の三人へと迫る

一人がこちらに気づき、銃口を構えるよりも先に男の喉を横一文字に切り裂く……

ナイフから伝わる肉と神経を断つ生々しい感触と共に、切り裂かれ

た男の喉からは鮮血が舞う

白い頬に血飛沫が付着しながら、流れるような動作で二人の喉を再び切り裂く

血管を切り裂き、先程の男と同じように血飛沫を上げ、ゆっくりと倒れ伏す男……

最後の一人が引き金を引こうとした瞬間、男の喉へとナイフが突き立てられる

男の喉へと突き立てたナイフからは先程の二人と同様、肉を切り裂

いて神経と血管を裂く感触が伝わる

溢れ出す血が器官へ入り込み、咳とも呻き声とも言えないような声を上げ、苦痛に歪む男の顔を見下ろす

すると二人の背後から、シャッターが上がる音と共に声が聞こえた…

「…一応、様子見に来たんだが……その必要は無かったみたいだな…？」

男の喉に突き立てたナイフを引き抜き、その場にあつた布で血を拭いながら振り返り、頬に着いた振り返り血を手で拭い、声の主を見るチエキータ…

「やーねえ、何を笑ってんのよ、シーガー？」

「いや、余計な手間を掛けたかと思ってな……」

先に車に戻る、と言い残して隣を通り過ぎるチエキータに声を掛けながら、俺はヘックスへと近付く……

チエキによつて、ナイフを喉に突き立てられるも、不幸にも即死出来ずに最早、虫の息と化した男を見下ろすヘックス

「苦しいでしょ？……痛いでしょお……今、楽にしてあげるわぁ……」

そつ言つと銃口を男の頭へと向け、弾切れになるまでヘックスは引き金を引き続けた……

「……終わったな、帰ろうぜ……」

俺はヘックスを片手で抱き寄せると現場を後にした……

傷跡　ゝ　人は誰しも、傷を抱えている　ゝ（前書き）

今回はシリアス風に挑戦……

傷跡　　人は誰も、傷を抱えている　　

銀行での一件を片付け、報酬の手続きや俺ら（傭兵）の関与を隠蔽後、ガレージへと戻ったその夜……

-
-
-
-
-
-

何時もように広間でくつろぐ俺ら……

だが、そこにヘックスの姿は無かった

「……ヘックスの奴は……？」

ソファアーへと腰掛けながら、隣に寝そべったチェキータへと目を向ける

「また、『何時も通り』よ」

部隊に居た頃から、アイツはテロ関連の任務が終わった日には必ず、部屋に籠もりつきりになる

次の日には何時も通りなのだが……恐らく、気持ちの整理でもしているんだろうな……

「相変わらずッスよねー……まあ、理由が理由だから仕方ないんだけれども……」

菓子を口へと運びながら、呟くショコラーデ…

「……ちよつと、様子見でもして来る……」

そう言つて、俺は広間を後にした

- - - - -

二階へと上がり、俺の部屋の向かい側に位置するヘックスの部屋（因みにチェキータとショコラーデの部屋は俺の部屋の両隣に位置してる）の前へと来ていた

扉越しに気配を感じる事から、未だに部屋に引き籠もった状態だと理解できる

「……ヘックス、入るぞ……？」

そう言いながら、俺は扉を開ける……

部屋の中は電気を着けておらず、暗闇の中で、ヘックスはベッドの上に座り込んでいた……

「あらあ……何か、用かしら……？」

俺を見つめるヘックス……

その表情は……どこか、儚げで……

今にも壊れそうな脆さを表していた

「……落ち着いたか……？」

ヘックスの隣へと腰掛け、俺はそう言う……

「……自分でも分かってるんだけどねえ……」

そつと、俺の胸板に顔を埋め、縋り付く様に寄り添うヘックス……

「……まるで、初めて会った時の様よねえ……まだ覚えてる……？」

「……アフガニスタンだったよな……あの時、俺は救出に来たが……遅すぎた……」

「……でも、私は助かったわ……お陰様でね……」

そう言いながら、細長い指を俺の頬へと指を這わす…

「……………どうしても、テロ関連だと……………自制心が利かない……………自分でも、一線を越えている事だって言うのは分かってる……………けど……………」

普段とは違い、弱々しい声でヘックスは呟く

「……………お前は両親をテロで失ってる……………だから、仕方ない事だろう？……………誰だって、テロを憎む……………「崇高なる目的」だの「大義の為」だの理由をつけて、無関係の人間を巻き込むから……………」

俺はヘックスの頭を壊れやすい物を扱うようにそっと、優しく撫でる……………

「……私は国の為、戦ってきた……でも、今は……シーガーの為に
だって戦えるわぁ……」

「……俺の為に何で、戦う必要はないだろ……それに人はいずれ、
死ぬ……戦わなきゃ、何のために生まれてきたんだ？」

【人はいずれ死ぬ。戦わなきゃ、何のために生まれてきた？】

出会った当時、ヘックスがよく口にした言葉だ……

だが、今は俺がその言葉を口に出している……

変な話だよな……？

「……そうよねえ……でも、今だけは……」

そう言いつと、俺の顔へと顔を近付ける…

「……満月だな……」

俺は近付くヘックスの顔を横目に窓から差し込む満月の月明かりへと目を向ける

「…満月の夜は眠れない……だから……」

- 今日だけでも良いから、私を満たして頂戴……？ -

そして、月明かりに照らされた二人の影は一つになる…

「っ…は……んう……」

お互いの息が弾み合い、肌と肌が擦れ合う

擦れ合った肌から互いの鼓動が伝わって更に、その行為に熱を増していく……

拒むつもりはない……

快樂を求めてる訳でもない……

ただ、彼女の癒えることのない傷を癒やす為だけに行為を続ける……

暗闇の部屋を月明かりが照らす中、互いに行為へと没頭していく中……

俺は思った……

二度目の生を受けて、生まれた俺は国に忠を尽くした

それが思わぬ結果になった今……

俺は国を護る為でなければ、名誉の為でもない……

少なくともルークたちの件は別だとしても……

俺は……

今、俺の側に居る彼女たち……

仲間の為に忠を尽くそう……

仲間を護る為なら、俺はこの二度目の生を投げ捨てても構わない

仲間の為ならば……

- 神にも悪魔にもなつてやろう -

そう思った……

-
-
-
-
-
-
-

「……なのに、何でこうなったんだろうなあ……?」

あれから、3時間程が経過して部屋で熟睡するヘックスを残し、俺は部屋を後にした筈だが……

何故か、俺の部屋のベットの上でチェキータとショコラーデにより、押し倒されていた（現在進行形で……!）

「ヘックスの事に関しては納得できるわ……でもねえ……？」

「一人だけ、イイ思いをさせる訳にはいかないんツスよねー……」

俺の上で馬乗りとなり、目視できないような速さで服を脱ぎ捨てていく二人……

おい、お前ら……ナニをする気だよ……？

「……それに……もう飢えちゃってる上に……」

「…溜まっちゃってるのもあるッスから……」

- 覚悟は良い？ -

俺の目に映ったのは……

見る者、全てを魅了するような妖しい笑みを浮かべる二人だった……

- - - - -

- おい、ちょっ……待てって -

- おいおいッ！ どこに手を伸ばして… -

- ま、待てッ！！ 話せば分か…… -

- おい、ちょ……ちょッ、待てよッ！ -

- アー……ッ！！ -

月明かりに照らされた夜の下……

悲痛（？）なシーガーの叫びが響いたのは言うまでもない……

傷跡　　人是谁しも、傷を抱えている　　（後書き）

結局、シリアスで終わらないのがこの作品の特徴（？）です

今回も駄文で、スイマセン……

再会　　ゝ　たまに友人に会って、見た目なり何なりと昔とは大違い　　ゝ（前書き

今回から、以前に登場した人物の名前が登場していきます

所謂、伏線（？）が今後の話へと繋がります（ご都合主義と無理矢理な感じでも、ありますが……）

再会　　ゝ　たまに友人に会うつと、見た目なり何なりと昔とは大違い　　ゝ

結局、あの後、二人に解放されたのは既に夜が明けて、時計が正午を過ぎる頃だった……

……未だかつて無い程、死ぬかと思ったのは言うまでもないよな……

それから、2ゝ3日が過ぎたある日……

-
-
-
-
-
-
-

また相変わらず、表での仕事は殆ど無く、暇な時間だけが過ぎる時だった

俺の携帯が鳴り出したのは……

「はいよ、どちらさんで……」

『……ダリアス・シーガーだな？』

電話の相手の声は壮年さを感じさせる低い男の声だった

「……誰だ、俺の名前を知ってるって事は……前に脅した事がある

奴か？ちょっと待ってる、今から思い出すから……」

『……相変わらずだな、「軍曹」……』

「……もしかして、「ハリソン」か？」

俺を軍曹と呼ぶ奴は極僅かにしか居ない……

電話の相手である「ジェームズ・ハリソン」も限られた奴の一人である

「……久々だなあ……三年……いや、四年振りか？」

『まあ、そんな所だ……ところで、今は暇か…?』

「ああ………つても、毎日、暇だけだよ」

苦笑いを浮かべ、頭を掻く俺……

『……「本業」以外は暇って訳だな』

その言葉を聞いて一瞬、自分の動きが止まるのを感じる……

「……流石に知ってるか………まあ、アンタには簡単な事だもんな……
……「少佐」殿？」

「ジエームズ・ハリソン」……

俺が軍に入り、今……いや、生前のラス・アリストリア將軍（当時は俺の教官であつて、階級は「大佐」だったが……）と出会つて、間もない頃……

後に、あちこちへと転属する事となる発端とも言える部隊に所属していたメンバーの一人だ

『……会つて、話せるか……電話じゃ、マズいんでな……』

「……訳有るか……で、場所は……？」

-
-
-
-
-
-

その電話の後、俺は下層街にある古ぼけた教会へと来ていた……

「……………ここだよな……」

如何にも年季の入った木の扉を開き、辺りを見渡す

あちこちがボロボロとなっているからか、教会としての雰囲気より一層、高まっている様な感じがする中、礼拝堂の端にある席に座る目当ての男を見つけ、近付いていく……

「……五分程、遅刻だな……」

「おいおい、数年振りの戦友との再会だぜ？ 細かい事は気にすんなつての……」

そう言つて、俺はハリソンの隣へと腰掛ける……

「……まあ、良い……早速だが……「ルーク・ウィルソン」の件だが……何か、掴めたか？」

「……全く……あのクソ野郎、昔からそういうのは得意中の得意だったんでな……」

平日だからか、参拝客が少ない礼拝堂では此処に訪れた数少ない人々に教えを説き、聖書を読み上げる牧師の声が、静かに響き渡る

「それとは、また別件だが……お前たちに仕事を依頼したCIAの「リンチ」と言う局員……当時、ラオスでの仕事に着いてた局員の偽物だと判明した」

「……薄々、可能性は考えていたさ……第一、自分たちのメンツを考えてる連中が「原版の奪還」なんて大役を最初から他人に任せるのがおかしいだろ……」

「……最近、CIAと「ウチ」の局員や幹部たちが次々と殺されてる……それも「国内」でな」

「……国内でやられたんじゃ、機密もクソも無いな……で、それがルークたちの原版の件に偽物のリンチの件……どう関係するんだ……？」

「……コレを見たことがあるか？「ウチ」の支部を襲撃し、局員を皆殺しにした連中の装備の一部と思われるモノだが……」

そう言って、懷から取り出したモノを俺へと手渡す

「……さあな、見たことは無いが……こういうのに精通した奴が、ウチには居るからソイツに任せるさ……」

それは小型のディスク状の機械だった。手渡されたソレを懷へとしまい込み、ハリソンへと目を向ける

「……それで、アンタの推測じゃ、どう見るんだ……少佐殿……いや、「NSA（アメリカ国家安全保証局）」重役幹部「ジェームズ・ハリソン」さんよ……？」

しかし、出世したものだよな……

軍で少佐だったハリソンが、NSAの幹部になるとは……

「……あくまでも、私の推測だが……恐らく、リンチと名乗った男と私兵部隊「スレイヤーズ」を率いるルーク……その二人は、今回の襲撃者たちと関係しているだろう……」

「……何か、デカイ事を企んでいて「原版の奪還」は、その為の軍資金の為に必要とした……ってか？」

「それに機密となっている情報に場所も知っていた……恐らく、政

府高官や幹部……若しくは軍上層部……或いは、それ以上の大物が
関与しているだろう」

「正に国家の危機って訳か……悪いが、最近は愛国心も薄れてきて
いてな……手は貸さないぜ……」

そう言つて、俺はその場所を後にしようとするが……

「シーガー……既にお前も巻き込まれている。お前もお前の仲間も
な……昔、私とラス將軍、お前が居た部隊の数人が消息不明とな
っている……」

「……国の為、戦った奴らには常に戦争と無縁の世界では生きられ
ない……って、言いたいのか……」

「お前は自分たちが不名誉除隊で、軍人としての物語は「BAD
END（最悪の終わり方）」で終わったと考えるのかも知れないが
……物語はまだ終わっていないぞ、「ダリアス・シーガー大尉」……」

「……つまり、こういう事か？ 【戦争は一時の物だが、兵士の心
は永遠なり】」

「そつだ……良い言葉だな、誰の台詞だ……パットン將軍か？」

「^{ラッパ}
Tupacだ」

「……成る程……注意しろ、お前も私も何れは狙われるだろう……」

「……精々、足掻いてやるさ。それが俺たちの特技だろ？」

そう言って、俺はその場を立ち去った……

-
-
-
-
-
-
-

【3時間後】

ハリソンとの再会後、俺は足早にガレージへと戻り、三人にハリソンとの会話を話した……

「……成る程ねエ……よくある映画の話みたいになりきたりな話よねエ……」

ナイフを指先でクルクルと回し、呟くチエキータ

「でも、私たちまで狙われるとなると……厄介な話になるわよねえ……」

そう言つて拳銃 - H & a m p ; K M A R K 2 3 - を分解し、
部品を磨いて手入れをするヘックス

「まあ、少なくとも機密性の高い事を知ってる位だ……俺らの居場所を見つけ出すんなざ、簡単な事だろ」

「それにPMCをやってるんじゃ、看板を持って自分をアピールしてると変わないツスからねー……」

ハリソンから手渡されたモノを調べながら、呟くシヨコラーデ

「それで……ソレを見たことはあるか？ シヨコラーデ」

煙草に火を着け、俺はシヨコラーデへと目を向ける

「夢でしか見たことが無いツスよ、地熱式マイクロ波カメラ……」
4

80GB以上の送信機能付き……CIAやNSAの技術を遙か、先に進んでるッスね……」

「……となると、連中は準備万端である訳か……第三次世界大戦でも始めるつもりか……っ？」

すると俺を含め、全員がある異変に気付いた……

「……シーガー……」

手入れを終えた銃に弾を込めた弾倉を入れ、窓から外を覗き込むヘックス……

「……どう思うっ？」

ナイフを懐のケースへとしまい込み、立ち上がるチェキータ…

「…………ヤバいッスよね…………？」

愛用のノートPCを急いで、バックへとしまい込むショコラーデ……

「ああ…………静か過ぎるんだよ…………」

そう、ガレージの辺りからは普段、野良犬や猫、又は野生の鳥などの気配を感じるのだが……

明らかに今は何一つ、気配は感じられなかった……

「……シヨコラーデ、データを全て消去しろ。ヘックスは車の用意を、チエキは俺と連中の足止めだ……来るぞ……ッ！」

その言葉を合図に各々の役割へと一斉に取り掛かる

その瞬間、窓を破り投げ込まれた閃光手榴弾スタン・グレネードの強烈な光と共に窓を突き破り、武装した一団が俺たちの前に現れた

-
-
-
-
-
-
-

「チエキ、コイツ（P-90）を使えッ！！」

そう叫びながら、ソファー下の床板を開け、隠していた（収納）武器をチエキータへと投げ渡す

仕事柄、このガレージには襲撃時の際、応戦する為に至る所に武器を含む仕掛けを施してある

備えあれば、憂いなしってヤツだな……正によ……ッ！

「ショコラーデがデータを消去して、ヘックスが車を持って来るまで足止めだ！」

床板の下に隠してある散弾銃 - S P A S - 1 2 - を取り出し、
襲撃者たちへの応戦を開始する

ガレージである為、広い広間にも置いてある商品（車）が遮蔽物として役立ち、連中の攻撃を防いでくれる

「連中、かなりのプロねッ！ それにかなりの装備をしてるみたいだよッ！！」

遮蔽物となっている車の陰から連中に応戦しながら、チエキータが叫ぶ

「ああ、連中の… 5 ・ 5 6 m m N A T O 弾が車を撃ち抜くのも時間の問題だな！！」

接近してくる連中の一人をSPAS-12（散弾銃）から発射される12ゲージの散弾を喰らわし、後ろへ数メートル程、吹き飛ばしながら言う

「シーガー、チェキッ！ 早く乗ってッ！！」

後ろからのヘックスの声で振り返るとそこには…

「1967年型 PONTIAC GTO」の側から俺たちの後ろから迫る連中に向け、突撃銃 - H & amp; K G36 - を撃つヘックスと後部座席の窓からは光学照準器レーザー・ポインターを装着した拳銃 - H & amp; K USP9 - を撃つシヨコラーデの姿があった

「チェキ、走れッ！！」

連中へ応戦をしながら、俺とチエキータは車へと走り出す

あちこちに銃弾と薬莢をバラ撒きながら、車へとたどり着くとヘックスは助手席へ、チエキータはシヨコラーデの隣の後部座席へと乗り込む

「クソッ、弾切れだッ!!」

忌々しげにそう吐き捨て、弾切れとなった散弾銃をその場に投げ捨てながら、俺は運転席へと乗り込む

「シヨコラーデ、この車に以前、頼んだ装備を積んであるかッ!？」

アクセルを目一杯、踏み込みガレージの裏側に位置する出口へと車を走らせる

V・8ユニット（八気筒）のエンジンから鳴り響く獣の唸り声のよ
うなエンジン音を上げながら、出口へと走るGTO

「ちゃんと取り付けてあるっスよッ!」

「そりゃ、結構……早速、使つとるかッ!」

ハンドル脇にあるスイッチを入れる

すると両方のヘッドライト部分が箱を開けるかのように開き、ヘッドライト部分に内蔵されたロシア製携帯式ロケット砲 - R P G - 7 - にも使用されている40mm ロケット弾の弾頭部が露わとなる

「シャッターを開く暇が無いから、ちょっとばかり乱暴なやり方でやるぞ?」

そう言うと同時にハンドル脇のスイッチの下に位置する赤いボタンを押す

それに伴い、車に内蔵されたロケット弾は前方のシャッターに向け、勢い良く発射される

ロケット弾がシャッターへと直撃し、外にも居る襲撃者たちを吹き飛ばし、爆炎の中から外へと車が飛び出していく

エンジンから足まわりまで至る所を改造した結果、軽く馬1000頭分(1000馬力)を誇るパワーで地面から、タイヤからの摩擦熱による煙を上げながらガレージから離れていく…

「シヨコラーデ、データの消去は？」

バックミラーから、後部座席でノートPCを操作するシヨコラーデを見る

「ちょっと待って……今、「完全」に消去するっスから」

そう言って、ノートPCのキーを細長い指で一押しする

次の瞬間、キーを叩く軽快な音と共に襲撃者が居るガレージが盛大な爆発を起こす

「……気に入ってたんだがなあ……あのガレージ……」

まさしく、木っ端微塵に吹き飛んだガレージを横目に俺は静かに呟いた……

再会　　ゝ　たまに友人に会つと、見た目なり何なりと昔とは大違い　　ゝ（後書き

一応、軍隊時での話をヒントに今後の話へと繋がるようにしていく
予定です

安全な場所　　危険と思われる場所が、逆に安全な時もある　　（前書き）

今回の話では軍に入る前、シーガーのストリート時代での仲間が登場します

安全な場所　　危険と思われる場所が、逆に安全な時もある　　

襲撃者ごとガレージを吹っ飛ばした後……

俺らはガスの給油と共に状況を把握する為、ガレージ（今では跡地と化したが……）から数十キロ程、離れたスタンドへと寄っていた

「……武器は何がある……？」

煙草をくわえ、車にガソリンを入れながらトランクを漁るヘックスへと目を向ける

「……拳銃は……」ハンドガン
「Desert Eagle」と「ベレッタ M9」
、マシンガン「Five - seven USG」に「MARK 23」が……
機関銃系は、チェキが持つてる「P - 90」と私の「G - 36」と
……」

トランクの奥底を漁りながら、言葉続けるヘックス

「……狙撃銃は……」スナイパーライフル
「レミントン M - 40」の合計、7丁ねえ……弾
薬も余り、無いわあ……」

「となると、次に連中と出会ったなら……」

「正に絶体絶命ねエ……」

辺りを見渡しながら、呟くチェキータ

「……長年、愛用してた狙撃銃（P S G - 1）も吹っ飛ばしたのは
痛手だよなあ……」

マジで愛用してたんだぜ。何度も修理と改造を重ねてたんだぞ……

嗚呼………

「クソツタレめ……」

「……でも、これからどうするんっすか？ 何時までも此処に居る訳
にもいかないし……」

後部座席に寝転びながら、俺を見るシヨコラーデ……

確かにな……先ずは……

「……【安全な場所】に避難するか……」

ちようど、此処から近い方だしよ…

-
-
-
-
-
-
-

スタンドから車を走らせ、一時間

俺らはダウントウン（下層街）の通りへと車を走らせていた

「^{ダウントウン}此処が安全な場所っスか？」

路上で生活を送るストリート・チルドレンやホームレスたちを後部座席の窓から眺め、そう言うシヨコラーデ…

「ああ、連中もガレージの近くの^{ダウントウン}此処には居ると思わないだろ、
「灯台下暗し」ってヤツだよ」

「それで、どこに向かっているのかしらあ…っ？」

助手席に座るヘックスは俺へと目を向ける

「以前、俺が入隊する前にストリートのワル共の頭で此処らを仕切っていたのは話したよな？」

「ああ、昔は色々とヤンチャだったって言ってたわよね？」

シヨコラーデの隣に座るチェキータが答える

「ダウンタウンの離れに古い劇場の跡地があつてな、俺が入隊する前は劇場の中を改装して、アップタウン（上層街）から盗んできた車や廃車を改造、修理をして商売をしていたんだよ」

「アップタウンアップタウンからって、彼処は、たったの数キロで「ホワイトハウス」がある上、「超」が着く位の高い身分の人間が住む場所っスよ？ よくそんな所で盗もうなんて考え付くんっスね？」

「確かに防犯面は厳しいが、連中は過信し過ぎてるからな、何も直ぐに盗むんじゃない、夜になったら、1トンの大型車両とかに使う「スーパージャッキ」を使って、トラックの中に積み込んで頂戴するんだよ」

「確かに1トンのトラックを持ち上げるジャッキがあるんなら、こちらの車なんて簡単よねエ」

「それで、俺が軍に入る前にチームのNO・2の奴に仕切りを任せたんだ」

そう言って、俺はかつての古巣へと車を走らせた

-
-
-
-
-
-

ダウンタウン郊外 【キャピタル劇場 跡地】

劇場の前へと車を止める

劇場からは微かな機械音が聞こえ、閉めきつた入り口には軍人にも
引けを取らない程のガタイの男が二人……

「話をつけてくるから、待ってるよ?」

そう言って、俺は車から降りると入り口の前に立つ男たちの側へと歩き始める

男たちは俺の顔を見て、若干は驚いた顔をするも直ぐに入り口を開ける

「相変わらず、鍛えてるなあ……」「リッ格斯」、「ザンダー」？」

二人の肩を軽く叩き、俺は中へと入っていく

劇場の中は外見とは全く違い、正に修理工場と呼べる様子だった

男女を合わせ、30人以上の連中が車やバイクをいじり、あちこちには溶接機などの機械音と火花が見受けられる

そんな中、女を一人、引き連れて葉巻をくわえた黒人男性が俺を見て、笑みを浮かべながら近付く

「^{ダリアス}D・シーガー、久しぶりだなあ！ 軍じゃ派手にやってるって噂を聞いてたんだが、どうしたんだよ、おい？」

コイツは「ジーク・ウィンストン」

当時、ストリートのワル共を仕切っていた時のチームのNO.3であり、悪友でもある

「少し前に行儀が悪過ぎて、追い出されちゃってな……って、キューバ産の葉巻かよ。随分と繁盛してるみたいだな、俺が居た頃よりも人数が増えてるしよ？」

「まあな、それよりも元気にしてたかよ？」

そう言つて、俺とジークは握手を交わす

「まあな、それよりも「ボス」は居るか？ 話があるんだがよ……」

ジークの奴は当時のNO・3であり、俺が居なくなつた後を考え、NO・2だった「アイツ」がNO・1となり、今やジークがNO・2となっているから……

「アイツ」が此処らを仕切っている筈……

「それがよ、お前が居なくなってから世の中、変わってな……今じゃ、俺が此処らを仕切ってるんだ」

待てよ、それじゃあ……

「…」「ロー」の奴は？」

するとジークはこう答えた

「今はアップトウンだ」

「……アップトウン？」

-
-
-
-
-
-
-

ジークから聞いた話じゃ、こうだ

俺が居なくなってから、チームのNO.2だった「ロー」の奴はジークにダウンタウンの仕切りを任せ、個人で車の商売を始め、一年前に商売は成功し、今ではアップタウンで高級車専門の店を営んで、暮らしてゐるらしい

俺らはジークから聞いたアップタウンの「ロー」の店へと向かっていた

「此処こそが【安全な場所】だと思わないっすか、シーガー？」
アップタウン

「何事にも欠点はある、過信し過ぎるとロクな目にあわないぜ、シヨコラーデ？」

そんな会話をしている内に車は、「ロー」の店へと到着した

店の前や窓からは「Ford GT」や「Ferrari テスタ
ロッサ」、「McLaren F1」など名だたる高級車の数々が
勢揃いと言わんばかりに並べられていた

店を見てもダウントウンの劇場と引けを取らない敷地の広さを誇り、
修理に使う機材も明らかに最新のモノばかりだった……

マジで成功したんだな、盗難車の部品パーツを使って、廃車を修理してい
た頃とは大違いだ……

そう思いながら、俺らは店内へと入っていった

安全な場所　　ゝ　危険と思われる場所が、逆に安全な時もある　　ゝ（後書き）

最近、話のネタは次々と浮かぶもソレを表現するのに時間が掛かる

……

他の作家の方々の文才がつくづく羨ましい……

親友　ゝ　友人は昔と今とは全く違っている奴もいる　ゝ（前書き）

今回も数々の映画などのネタやマニアックな用語が登場します

あまり、深く考えずに「まあ、話を盛り上げる為の要素（？）だろ」と割り切っていたただければ、幸いです……

親友　　友人は昔と今とは全く違っている奴もいる　　

店内では、キツチリと作業着を着こなした従業員たちがあちこちに並ぶ高級車の整備やら接客を励む中……

店内の奥にある一台の高級車の側に何やら、従業員と話している黒スーツの男が居た

「この「McLaren F1」は最大トルク（馬力）に達すると
若干、出力にブレが出るから出力制御装置の幅を15%程に……」
インジェクター

俺は男の後ろへと近付くと声をかける

「20%の間違いじゃないのか？」

すると男は俺の方へと振り返る。俺の顔を見るなり、若干は驚いた表情をしたが……

「…シーガー、何時、こっちに戻ったんだ？」

「あー……半年位か……久しぶりだな、「ローグ」？」

「ローグ・クルーガー」

かつて、チームのNO.2であり、今やダウンタウンからの成功者……

そして、昔からの親友でもある

「ああ……それで、わざわざ俺の所に来たんだ……何か、用があるんだろ？」

コイツは昔から話が早く済むから楽なんだよな……空気が読めるとも言うのかねえ……？

「先ず、熱いシャワーと寝場所が欲しいんだ」

「……それで、俺への見返りは何なんだ？」

見返り……そうだな…

「67年型のGTO ハイパワーの1000馬力、サス（サスペンション）とトランスミッションも特別チューンの改造車」
スペシャル
カスタム・カー

「ええッ！？ この車をツスカ！？」

俺の後ろに居るショコラーデが声を上げる

「でも、それが正解よお？」

「それにあの車じゃあ、目立つから妥当じゃない？」

俺の見返りに賛成意見を出すヘックスとチエキータ…

俺はローグの方へと向き直すと更に言葉を続ける

「それに俺らが欲しいのはアレ（GTO）よりも、速くて強力なヤツ（車）だ……腰がブツ飛ぶ位のな？」

俺の言葉に苦笑を浮かべながら、ローグは言った

「奥の車庫^{ガレージ}に來いよ、お望みに答えられるヤツが一台、あるぜ？」

- - - - -

ローグに案内され、奥の車庫へとやって来た俺らの目の前にあったのは……

「俺が手塩をかけた中で最も強力なヤツ（車）だ。『GMC SA VANA SLT』、グレート・モーターにレーシング・ブレーキを装着。ブースターも向上させ、エンジンも改良、お前らの車（GT0）と同様、軽く1000馬力以上は出せる上にロールゲージ・バーも装着し、万が一の為の防弾仕様、タイヤはランフラット……気に入って貰えるか？」

「ああ、特に車体横に走るの赤のレーシング・ストライプ（縞線）がな」

「某 飛行機嫌いの剛腕メカニックの愛車」を彷彿させるな……それよりも遥かに強力だが…

「……交渉は成立か？」

「ああ、文句無しだな」

そう言って、俺とローグは握手を交わした

-
-
-
-
-
-

その後、俺らの寝場所として使っていない車庫をローグから借りる事となった

車庫だから、車があるのは分かるが……名だたる高級車や名車に囲まれた此処を寢床に出来るのは悪くない

俺らは武器の整備とハリソンへ連絡をとる事にした

『……成る程、お前たちも矢張り、襲われたか』

「ああ、お陰様でアンタと再会して3時間でな」

『…取り敢えず、情報についてだが……二つある内、一つは私の家に隠してあるから、私が回収する』

「残りの一つは？」

『襲われた支部にあったが今は軍によって厳重保管されている。場所は「ヴァージニア州 郊外」の軍基地だ』

「ヴァージニア州」……

「CIAの本拠地じゃねえかよ。それじゃあ、基地の装備も最新鋭のフル装備だろうが……言っておくが俺らは不名誉除隊された身でな。「元同僚のよしみ」でって、俺らを簡単に通してくれるとでも？」

『確かに、お前たちには今回の襲撃犯たちの疑いも掛かっている……お前らが「原版」の件での恨みを持っていると思われるしな』

「アンタの意見は？」

するとハリソンはこう答える

『お前ら程の実力者なら、そんな手を使うとは思えん。寧ろ、真に向勝負で壊滅させる事も不可能じゃないだろう？』

……そりゃ、まあ……

「否定はしないぜ？……で、どうやって回収を？」

『其処までは知らん、だがお前なら簡単な事だろう？ それにお前たちの「古巣」でもあるだろう。方法は任せる……だが、間違っても兵士たちを殺すなよ？』

最新鋭のフル装備で武装された嚴重な……

それも「軍基地」に乗り込んで、しかも「殺すな」だと？

「アンタは俺らに、豆鉄砲で戦車に立ち向かえ、って言ってるようなモンだぞ？」

『言っただろう？ そこまでは知らんとな……切るぞ』

……無理難題をふっかけた上、「切るぞ」だぁ……？

「……どーすっかなぁ……」

回収以前に「ヘックスたちへの説明」をよ……

-
-
-
-
-
-
-

「……って訳なんだが……」

「……冗談……な訳が無いっスよね……」

うなだれながら、机の上に突っ伏すショコラーデ……

「でも、自分たちが所属してた場所にあるなんて好都合じゃないの？」

見方を変えれば、と付け足して言うチエキータ

「少なくとも内部は把握出来てるわぁ……後は、その情報の場所さえ分かれば……」

ヘックスがそう言うと三人（俺、ヘックス、チェキータ）は一斉に
シヨコラーデへと目を向ける

「……まさか、私に軍のデータベースにハッキングしろと？ NS
AやCIAのファイアウォール（防衛ネットワーク）を掛け合わせ
た様な代物っスよッ！？」

「『『『そう／だ／ねえ／よ』』』」

異口同音、揃えて答える三人

「うう……三人、揃って答えなくてもいいじゃないっスか……分か
ったっスよ……」

若干、涙目で呟きながら愛用のノートPCを開くシヨコラーデ…

何故、コイツに任せるか？

それは俺たち……いや、世界中を捜してもハッキング等を含む情報処理能力が最早、チート級のシヨコラーデに勝てるハッカーもフアイアウォールも存在しないからだ

以前、まだ軍での部隊いた頃……完全フル装備の傭兵とテロ組織が軍の原子力空母を占拠し、その処理を任された時だった

俺らは空母へ潜入を成功した後……

何とコイツは空母内からラップトップ（膝に乗る程のサイズのパソコン）、一台で空母のセキュリティへとハッキング、空母全てのシステムを支配下に置いた上に……

そのラップトップで空母を占拠し直したんだよ、コイツは……！

それ以来、軍でのシヨコラーデのあだ名は……

「ミス・アンロック（解除）」、「パーフェクト・ハッカー」等、情報処理能力面でのチート級の実力を知らしめた位だ……

そうこうしている事、十分ほどが経過すると……

「ワオ、シヨコラーデが今世紀最大のハッキングに成功したわねエ？」

チエキータ……今世紀最大より寧ろ、史上初だろ……

「世界最速のハッキングねえ……？」

ヘックス……世界最高峰のファイアウォールを10分ほどでハッキングする奴は居ねえよ、普通……

「……ああ、常識で考える方が馬鹿げてきたな……それで、情報は？」

二度目の人生を得た上、確かにチートな俺が言うのもおかしい話だが……常識なんぞ、存在しねえ……

そう再確認したよ。今、正にな……

「えーっと……ハリソンの言っている情報は……基地、中枢にあるマザーコンピューターに保管されてるっス」

となると先ず、シヨコラーデがソレの相手をする事が確定したな……

……やるしか無いよな……こりゃ……

「よし、計画を練るぞ。先ずは……」

そうして、2日後……俺らは不可能としか言いよつゝの無い仕事に取り掛かる事になった

親友　ゝ　友人は昔と今とは全く違っている奴もいる　ゝ（後書き）

次話では主にシーガーのチートがフル活用（活躍）します

「有り得ない」？、「ご都合主義過ぎる」？、だから何？（これも改ざんしてますが、とある映画ドラマのネタです↑）

生ける伝説の再臨　　一騎当千どころか、一個兵器　　

【ヴァージニア州　郊外　ラングレー軍事基地】

正面で警備する兵士に加え、外から見える最新鋭の装甲車、輸送機、戦車……

兵士たちの持つ榴弾射出装置グレネード・ランチャーを装着した突撃銃 - M4A1　カービン・ライフル　- という兵装からして、重装備である事は明らかである……

そんな完全武装の基地の正門ゲートに近付く一人の男が居た……

-
-
-
-
-
-
-

正門を警備する兵士たちから見て、近寄ってくる男の格好はサングラス、黒のタンクトップの上には軍でも使用する防弾ベスト、黒ズボンと黒で統一しており、釣竿などを収納する縦長のバックを肩に担いでいた

服装はともかく、防弾ベストに関しては軍の流出品を取り扱う店で購入したと思える

時折、現れる「軍に入りたい」等と戯言を抜かす輩の一人と思いいながら、男に静止を呼び掛ける

すると男はこう言った

「なあ、ちょっと聞いて欲しいんだけどよ……」

肩に担いだ縦長のバックを足元に下ろし、サングラスを外して兵士へと視線を向ける

また、くだらない連中の戯言か、と思いながら男を見る兵士

だが、男が言ったのは予想だにしない事だった

「……「緊急事態発生」だぜ？」

その瞬間、男はバックから二本の刀を瞬時に取り出すと兵士、二人が武器を構える前に鞘に納めた刀で二人の意識を刈り取った…

-
-
-
-
-
-

二人の警備兵を気絶させた俺は、門へと近付くと軽く門に触れて強度を確かめる

「……立案者ながら、馬鹿げた計画だよな……」

ともかく、文句を言っても始まらない

ため息をつきながら、俺は背中に引つ掛けた二本の刀に手をかけ……

門を文字通り、真つ二つにぶつた斬った……

-
-
-
-
-
-
-

シーガーが正門で派手にやらかし始め、数分……

基地全体には警報音と共に銃声や爆発音……それに何かを「切り裂く」ような鋭い斬撃音も鳴り響き始めた

「…本当に大丈夫なんっスかね……？」

シーガーへと注意が向き、手薄となった警備の網を潜り抜け、ヘックスたち三人は基地内へと潜り込んでいた

「やーねえ、大丈夫でしょ？ それに心配するなら、兵士たちの方を心配した方がいいんじゃない？」

目的地へと駆けながら、シヨコラーデに目を向けるチエキータ

「それにしても、此処まで手薄じゃあ……相当、暴れまわってるんじゃないかしらねえ……？」

やっぱり、愛用の狙撃銃の事で怒ってたし……、と付け加えながら言うヘックス

「……あの「メイトリックス大佐」も真っ青っスよねえ……」

何故なら、目的である「情報」を保管するマザーコンピューターがある基地の中枢部には本来はかなりの警備網があるのが当たり前なのだが……

チェキータやヘックスが倒した（気絶で済ませた）兵士たち、四人

以外には警備兵とは全く出くわしていないからだ

「取り敢えず、早く「情報」を手に入れなきゃね……シーガーが此処を潰す前に」

そう言いながら、三人は中枢部へと駆けていく

-
-
-
-
-
-

鳴り響き続ける銃声に兵士たちの怒号が響く中、俺は居た

周りから発射されてくる5・56mm弾を二本の刀で弾き、兵士た

ちの意識を次々と刈り取っていく

「早く戦車でも装甲車でも良いから、応援をッ!!」

「『一人相手に何してる』だって!? こっちは化け物を相手にしてるんだよ!!」

「ヤバい、来るぞッ!?!」

化け物ってのは、充分に自覚してるっの……

嗚呼、段々と腹がたってきたぜ……

「オラオラアッ！！ テメエ等の股ぐらにぶら下がってるのは飾り物かぁッ?! 根性、見せてみるやッ!!」

迫り来る銃弾、榴弾をたたっ斬りながら、次々と兵士の屍（気絶で済ませています）を積み重ねていく

振り返れば、そこには……

主砲を俺へと向け、迫ってくる戦車が一台……

「上等だぜ……段々、楽しくなってきたぜ……！」

最早、キャラなんざ関係なしに暴れまくる俺は戦車へと駆け出す

-
-
-
-
-
-

一方、中枢部ではシヨコラーデがハッキングしている最中だった…

「最高のハッカーは10分でハッキングするけどねえ……あなたには、60秒でハッキングして貰わなきゃ、困るのよ?」

「分かってるっスよ、ヘックス……シーガーが死傷者を出す前に……」

マザーコンピューターの一部に愛用のノートPCを繋ぎ、目まぐるしいまでの速度でキーボードを打つシヨコラーデ…

「…45秒…30…25…」

腕時計を確認し、正確にカウントしていくチエキータ

ノートPCの画面からは次々とハッキングにより、画面が現れてわ、消えるを繰り返していく

「良い子だから…っ…」

更にキーボードを打つ速度を速めるシヨコラーデ

「…15…10秒…5…4…」

「もう少し……！」

画面のコードを次々と解除し、更にデータの奥底へと侵入していく…

「……2……1……」

「……見つけたっスッ……！」

その言葉と同時に画面には目当ての「情報」が現れる

「これで、回収は成功よねえ……後は……」

「【シーガーの回収】よ、アイツがこれ以上に暴れる前に」

-
-
-
-
-
-

「……チツ……折れたか……」

砲身を斜めにスライスされ、黒煙を上げる戦車の上に座り込み、見事にへし折れた刀を投げ捨てる

当たり前な話だよな、もう数百発のライフル弾を弾き、装甲車を三台……この戦車をぶった斬り続けりゃ、刃こぼれにひび割れ、へし

折れるに決まっている…（先ず、俺以外には出来ない芸当だな）

「…まだ来るか…ヤベエぞ、こりゃ…」

遠くからは数台の装甲車と共に迫ってくる増援部隊……

いくら、俺でも丸腰の上、不殺で戦い合うのはキツイ

「…何が【俺が陽動で暴れまくるから、お前らはその隙に回収にまわれ】だよ……」

「俺って本当、馬鹿だよなあ……」

これから、どうするかと思案を巡らせる最中……

「シーガーツ！ 早く、乗るっス！！」

声のする方へと振り返った先には……

「…ナイスタイミングだぜ、ショコラーデッ！ 愛してるぜッ！？」

一台の装甲車に乗った三人が俺を呼んでいた

俺はすぐさま、駆け出すと装甲車の助手席の窓から飛び乗る

「シーガーあ……私には「愛してるぜ」って、言葉は無いのかしらあ……？」

後部座席から細い腕で俺の首へと絡めるヘックス…

「取り敢えず、脱出したらなッ！！ チェキ、飛ばせ！」

「了解ッ！！」

俺らに乗せた装甲車は勢いよく走り出す

「逃げるって、何処につスカッ！？ このままじゃ、増援に囲まれて一生、刑務所の狭い独房行きっスよッ！？」

「基地の襲撃、情報の不法取得に器物破損……罪状だけでも軽く、十は越えてるわよね？」

「刑務所よりもその場で射殺されるのがオチじゃないかしらあ……？」

「悠長に会話できるなら余裕だろ！ チェキ、滑走路に向かえ！！」

「滑走路って、車で空を飛ぶ気？」

ブレーキを踏み込むと滑走路へと方向転換し、アクセルを踏み込んで一気に飛ばす

「いや、「輸送機」でだ！」

- - - - -

滑走路に着くと一台の軍用輸送機 - C - 130 ハーキュリーズ

- へと駆け出す

其処には整備を終えた空軍員が数名、居た

「おい、アレって……」

俺らを見るなり、驚愕の表情を浮かべる兵士

「まさか……「ダリアス・シーガー」？」

俺らは輸送機へと到着すると兵士の前へと立つ

「諸君、この基地を襲撃した凶暴な連中が居るんだが……？」

「あ……貴方たち、ですか……？」

「正解だ、となると俺らがこの輸送機に来た理由とは？」

会話を続ける俺の後ろでは……

「何、グズってんのよ、シヨコラーデ。早く乗りなさいってばッ！」

「嫌っスよッ！ シーガーと空を飛ぶとロクな目に遭わないんっスからッ！！ メキシコしかりバグダッドしかリッ！！」

輸送機に乗るのを拒むシヨコラーデを引き摺るチェキータが居た

「…シヨコラーデ……もしコレ（輸送機）に乗るなら、シーガーと「ベットイン」出来る権利を……」

「乗るッス！！」

即答かよッ！！ しかも、俺をダシにすんなって！？

「……ハイジャック……ですか……？」

兵士の声に意識を戻し、会話を続ける

「その通り、空軍は察しが良いな？ だから、俺が言いたいのは……」

言葉を発する前に鍵を手渡し、すぐさま輸送機から降りていく兵士たち……

賢明な判断だよ、全く……

「おら、グズグズすんなッ！ 早く乗れ！！」

その言葉と同時に輸送機へと俺らは乗り込んでいった

-
-
-
-
-
-

操縦席へと乗り込み、確認作業へと移る

「計器よし、レーダーにフレア（欺瞞装置）よし」

「燃料も問題ないわあ」

隣の副操縦席へと座るヘックスからの確認を聞く

「間もなく、当機は離陸しますのでシートベルトの着用を」

後ろに座るチェキータとシヨコラーデがシートベルトを締めると同時に離陸する為、滑走路を走り出す輸送機…

すると今度は……

「シーガー、お客さんよ？」

輸送機の前にはずらっと並ぶ増援部隊の一団が……

「C - 130 VS 増援部隊ってか？ 受けて立ってやるっじゃねえかよ」

更に速度を上げ、加速させる

それと同時に増援部隊からの銃撃が輸送機の機体へと叩きつけられるも輸送機は止まらない

危険を感じた部隊は一斉に輸送機の走行ラインから離れていく

「飛ばすぞ、掴まれ…ッ!!」

並べられた装甲車スレスレで輸送機は離陸していく

取り敢えず、脱出は成功……

だが、連中もそう簡単には逃がしてくれないだろうよ……

-
-
-
-
-
-
-

基地からの輸送機強奪で脱出した俺らを乗せた機体は目の前にある乱気流へと入り込んでいった

「こちらは機長のダリアス・シーガーです。当機は間もなく乱気流へと入ります」

乱気流の影響で機体は激しく揺れる

「心配すんな、飛行機は乱気流じゃ、墜落しないぜ？」

だが、俺の言葉とは反対に突如、^{アラーム}警告音が機内で鳴り響き始める

「今度は一体、何なんっスカッ!？」

レーダーからは後方に迫る二つの機体を示していた

この形は……………

「…けどよ、ミサイルを装備した無人航空機（UAV）が相手じゃあ、話は別だな!! 簡単に撃墜されるだろうよッ!」

「シーガー、後方からミサイルが二機ッ!!!」

ヘックスからの声を聞き、レーダーを見ると輸送機に迫る二機のミ

サイルが……

「掴まれ、フレア発射ッ!!」

機体から発射されるフレアの影響でミサイルは機体から遥かに逸れ、誘爆していく

「踏ん張れよッ! 揺れるぞッ!!」

更に発射されるミサイルが迫ると同時に操縦桿を右へと操縦する

すると機体は「メキシコ」でのへりのように右へ大きく横一回転し、ミサイルを次々と回避していく

「シーガー、何してるのよ？」

座席にしがみつく様にするチェキータが俺へと目を向ける

「メキシコでのへりを思い出すだろ？」

だが、UAV（無人航空機）はミサイルから機銃へと切り替え、輸送機の右エンジンを撃ち抜く

衝撃と共に警告音が激しく鳴り響く

「今度は、どうしたんっスカッ!？」

俺は右エンジンを操縦席から見ると機体を安定させる為、速度を緩める

「機体の右側をご覧ください。只今、右エンジンが炎上しておりますので」

次の瞬間、二機の内、一機のUAVからのミサイルが輸送機へと直撃した

-
-
-
-
-
-
-

【ラングレー軍基地 レーダー塔】

UAV（無人航空機）からの映像が設置された機材の画面に映し出され、輸送機にミサイルが命中した映像を映し出す

「ミサイル命中、C - 130 ハーキュリーズの撃墜を確認」

一人の兵士からの言葉が塔内に響く…

今回の襲撃事件もこれで解決した

誰もがそう思った

だが……

「……おい、コレを見ろッ！」

一人の兵士が画面を指差して叫ぶ

画面には爆発し、木っ端微塵となった機体が煙と共に落下していく
中で……

「…嘘だろ……？」

パラシュートを四つを装着した「戦車」がパラシュートを開き、降下していく映像が映し出されていた……

-
-
-
-
-
-

パラシュートで若干、速度が緩みながら戦車が降下していく

「…私たちが死んだと思ってるかしらあ……？」

車内で操縦席に座る俺へと顔を近付けるヘックス…

その言葉と同時に車体から、UAVの機銃から発射される弾丸が装甲に弾かれる金属音が鳴り響く

「いや、それは甘いみたいだぜ？」

「やっぱり、ロクな目に遭わないじゃないっすかッ！！？」

涙目で大声を上げ、叫ぶシヨコラーデ…

「けど、「飛んで」はいないだろうか？」

「落ちてるんっスよ！？ 飛ぶよりも悪いじゃないっスかッ！！」

だが、シヨコラーデの叫びをかき消すかのように車体からは金属音が鳴り響く

「ねえ、シーガー？ 高度6000メートルでも人って、息は吸えるわよねエ？」

ニタニタと妖しい笑みを浮かべるチエキータ…

やられっ放しは趣味じゃねえしな……！

「反撃すんぞッ!! チェキ、ちゃんと仕留めろよな?」

「チェキ!、シーガーッ!! 何をするつもりッスか!?!」

するとチェキータはシヨコラーデに笑みを浮かべて言う

「狭い車内で四人も詰め込んでるんだから、換気をしなくちゃねエ
?」

戦車のハッチを開け、落下する最中で備え付けられた固定銃座を構え、迫るUAVへと狙いを定める

「来なさあいッ……ロボットちゃん、お姉さんと勝負しましょ?」

迫る二機へと固定銃座で大型口径の弾丸を連射していくチエキータ

突然の反撃に一機のUAVは大型口径の弾丸の餌食となり、爆発を
起こしスクラップとなる

「おおっと……シーガー、ちょっとヤバいかもねー？」

爆風に飛ばされそうになるのを堪え、車内へと戻りながら悠長に言う

車内に備え付けられたレーダーに移る地表を俺は確認する

「よし…チエキ、ハッチを閉めるッ！ ヘックス、主砲を用意ッ！
」

「落ちてるのに主砲なんて、何に使っんッスカッ！？」

「俺を信じろってのッ…！」

俺はもう一度、レーダーを確認する

「ヘックス、此処から800メートル程、先に湖があるッ！砲塔を右へ16度旋回しろッ！！」

「分かったわぁ…！」

ヘックスは主砲の制御桿を動かし、俺が指示した方向へと動かす

「……撃てッ！！」

その言葉と同時に主砲からは砲弾が発射され、その反動で車体は大きく右へと移動する

「UAVをコレ（主砲）で撃ち落とす気？」

激しく揺れる車内で俺に抱き付きながら、言うチエキータ……

おい、シヨコラーデ……お前も俺の腰辺りにしがみつくなよ……

「違うわよお、チエキ 反動を利用してコレ（戦車）を飛ばしてるのよ。後、二人共、ズルいわぁ……」

制御桿を操作しながら、チエキータとシヨコラーデに目を向けるヘックス

「ヘックス、話は後だ！ 次は左に45度旋回ッ……」

指示通りに制御桿を動かすヘックス

「まだ撃つなよ……まだだぞ……！」

レーダーに映るUAVの位置を確認しながら、俺はヘックスに言った

「……今だ、撃てッ……！」

その言葉と共に砲弾を発射させると同時にレーダーに映るUAVの点はレーダーから消え失せる……

「……よし、片付いたなッ！？　ヘックス、砲塔を正面に向けて待機だッ……！」

再度、制御桿を操作し砲塔を正面へと向けるヘックス

「…もう撃ってもいいかしらぁ………？」

「いや、まだだぞ……」

高度計に記される高度は一気に下がり、既に3000メートルを下回る…

「……全弾発射だッ！！」

「いくわよぉ………！！」

その言葉を合図に主砲からは砲弾を次々と発射させる

発射する度に発生する反動は徐々に落下の勢いを相殺させていく……

そして、数分後……

俺らが乗った戦車は目指していた湖へと巨大な水柱を上げ、墜落していった

昔話 2 〵 誰しも失ったモノはある 〵 (前書き)

先ず、最初に……更新の停止については申し訳ありませんでした……

作者の仕事において、GW前の仕事が増え、更新に手がまわらない状態でしたので…

ともかく、今回も駄文ですが、どうぞ…

昔話 2 〽 誰しも失ったモノはある 〽

シーガーたちの軍基地襲撃（もとい、情報回収）から二時間後……

【NSA本部】

局員が慌ただしく局内を駆け巡る

最近から発生する襲撃事件やシーガーたちの件で、局員たちはあちらこちらに奔放する為だ

重役幹部である「ジエームズ・ハリソン」もその一人である

何故なら、彼は現場での指揮を得意としており、何よりも安全な場所
所で作業を人任せにする事を嫌う為である

「それで、新しい情報は？」

足早に進む自分を追い掛けながら、資料を腕に抱える部下へと目を
向ける

「はい、二時間前に「ダリアス・シーガー」元大尉が率いる傭兵部
隊がラングレー支部の軍基地を襲撃……「過去の軍の部隊」と「今
回の襲撃事件」に関連する情報を強奪したとの報告が……」

矢張り、実行したか……

そう仕向けたのが自分であることを知りながら、ハリソンは思った

「それで、死傷者は？」

「いえ、負傷者は打撲や骨折、軽い脳震盪など軽いモノでしたが……戦車を含め、数台の車両などが……その……」

急に口ごもる部下……

「……何だ？」

「……情報部の伝達ミスと思うのですが……シーガー元大尉によって、車両の大半を……鋭い刃物で「両断」されたとの報告が……」

「奴ならあり得る話だ、それで連中は？」

部下は資料へと目を向け、言葉を続ける

「その後、輸送機を奪い逃亡……無人航空機に撃墜されたとありますが……落下する「戦車」を使って無人航空機を撃墜させて、そのまま、郊外の湖に墜落したと……あり得ません……」

「奴らには常識も不可能も通用しない、それで墜落後は？」

「湖に釣りをしていた地元民からの証言では墜落した戦車でそのま
ま、湖から走り去ったと……」

半ば、信じがたいと言いたげな表情を浮かべる部下…

「良いか、連中にバカをやらせたら間違い無く世界一だ。連中を常
識の範疇で考えるのは止めておけ」

部下にそう言って、ハリソンは他の部下たちに指示を出し始めた

-
-
-
-
-
-

【アップタウン 車庫（ローグから借りた）】

あの「スカイ・ダイビング」の後、俺らはローグから借りた車庫^{ガレージ}へ
と戻り、回収した「情報」とやらを拝見していた

「でも、基地の中枢部で保管する「情報」を奪った奴らとはいえ、
「情報」ごと吹き飛ばそうとするかしらあ…？」

先程までシャワーを浴びていたヘックスは濡れた髪をタオルで拭いながら呟く（因みに格好は、上下ともに黒の下着姿という極めて無防備（？）な状態）

「敵の手に渡る位なら、「抹消」した方がマシって考えでしょ？
軍人ってのは武力行使をしたがるんだから」

ヘックスと同様、先程までシャワーを浴びていた為、黒のＴシャツを着て、下（下半身）の方は下着のみという刺激的（男にとっては）な格好で、ソファアーに座り込むチエキータ…

お前は寧ろ、堂々とし過ぎだろ……そのモデルも裸足で逃げ出す程のスタイルだよ…

「でも、何事にも限度があるんじゃないッスか？」

上の二人と同様、シャワー後なので白いＴシャツに下半身は下着のみという格好でＰＣを操作するシヨコラーデ…

まあ、俺も似たようなモンか…（現在、下は黒のスラックスに上は半裸の状態）

「……それで、情報とやらは？」

そう言つとＰＣを操作し、画面にある写真を映すシヨコラーデ

「一番の項目はコレッスね……陸軍特別編成部隊……」

その写真には12人程の兵士が集まった集合写真が映されていた…

「あれ……この右端の三人って……」

ヘックスがそう言っで、その三人に指差す

そこには以前よりも若い頃の「ラス・アリストリア」、
「ジエームズ・ハリソン」……

そして……

「…コレって、シーガーよねエ…？」

今よりも若干、若い「ダリアス・シーガー」が居た…

「……その部隊は通称『ハウンド・ドッグ（獵犬）』……俺が『軍曹』になりたての頃、当時に大佐だったラス將軍に少佐だったハリソンと俺の所属した部隊だ」

俺は煙草に火を着け、深く吸い込む……

一吸いでフィルターのギリギリまで吸い込み、吸い込んだ紫煙をゆっくりと吐き出した……

「チエキは聞き覚えがあるだろ？ 陸軍所属だったお前なら……」

「ええ、デルタ・フォース陸軍特殊部隊をも凌ぐ幻の特別編成部隊ねエ……」

「……幻……ッスか……？」

チエキータの言葉に首を傾げるシヨコラーデ

「設立から僅か、二年程で解体されたのよ。でも、軍じゃあ有名だったのよ？ 「ある三人」が腕はピカイチなんだけど、扱いにくさもピカイチ……ってね」

「それって、ひょっとして……」

「…ラス将軍にハリソンとシーガーの事よねえ……？」

シヨコラーデの言葉を続けるように呟くヘックス

「【ハウンド・ドッグ】のデビューからはもうテロ組織や要注意人物たち、犯罪界のブラックリストの『Most Wanted（最重要指名手配犯）』との闘いだっただけ」

灰皿に煙草を押し当てながら、言葉続ける

「国家転覆やら大規模なテロ行為……「偉大なる目的の為」……當時、そんな連中を全て、俺らが追っ払った」

あの頃は俺以上にラス教官と少佐^{ハリソン}がヤバかったよなあ……

誰もが俺らを敵にはしたくないと感じただろうよ……

「俺らのやり口は『先手必勝』と『完全殲滅』……あれは確か……ナイジェリアかクウェートだったっけな……」

湾岸戦争やら紛争で廃墟になった街だ。そこに軍部が最も要注意していたテロ組織が潜伏してた、デカい事を企んでたらしい

ラス大佐が指揮をとり、連中に気付かれない内に完全に包囲及び、退路を絶った……

その後はハリソンの奴が現場で俺らに指揮……

余りの周りの静けさに連中が不信感を抱いた時……

「四十人」以上の連中は5分で「一掃」された」

「……そりゃあ……凄いつスね……」

「だろ？ 俺らは完膚無きまでに……正に根こそぎに駆除って感じだっただぜ？」

後は……確か、アフガン辺りの……」

「まだあるんっすかッ!？」

-
-
-
-
-
-
-

【一時間後】

「……って感じだったな」

「絶対に敵にはしたくないっスよ、そんな恐ろしい連中を……」

もう聞きたくない、と言わんばかりに耳を両手で塞ぐシヨコラーデ

「…だが、そんな部隊にも終わりってのがやって来た」

-
-
-
-
-
-
-

あれは東アフリカだったな

俺ら、【ハウンド・ドッグ】はテロ組織が秘密裏に入手した生化学兵器の情報回収、若しくは兵器の破壊を命じられていた

命令を下したのは、「ウィリアム・パーネル」將軍という男だ

ウィリアムの奴は昔ながらの軍人と言える奴だった

「一を殺して、千を救う」

それが奴の考えであり例え、仲間だろうが肉親だろうが国の為には犠牲はつきものだと言って、躊躇なく実行する……

だが、おかしいけどよ

奴は一度たりとも、犠牲になる側になった事は無い。常に殺す側に居るからだ

「あの時」もそうだった

【東アフリカ】

度重なる戦闘で彼方此方が破壊された街と呼ばれていた場所に俺らは居た

爆発音と銃声が絶える事無く、晴れ渡る空の下に響き渡る

「よお、シーガーツ！！ 連中、害虫みたいに湧き出てくるな？！」

「んな事あ分かってんだよッ、プリーチャーツ！ 喋る暇があるならぶっ放せッ！！」

装甲車を盾にし、その陰から激しい攻撃をし続ける敵へと応戦する

「ハリソン、」目的地」は確保したぞッ！！ ジェイクたちを早く
行かせる！！」

身を低くし、俺は隣で応戦をするハリソンに声を飛ばす

「分かってるッ！ プリーチャー、ジェイクッ！！」

仲間の名を叫び、遮蔽物（装甲車）の陰へと仲間を集める

「良いか、あの廃屋の地下には連中の生化学兵器があるッ！ 情報の回収と兵器の破壊が俺らの任務だ！！」

だが、忘れるなよッ！ タイムリミットは10分だッ、もう空爆要請は出したッ！！

10分以内に片付けろよ、10分後には廃屋は完全に無くなっているからなッ！」

「イエッサーッ！！」

「ジェイク」と「プリーチャー」と呼ばれる二人と他の三人が声を上げ、俺とハリソンたちの援護射撃で連中を牽制し、廃屋へと五人は突入していった

「…シーガー、言いたくは無いが……」

遮蔽物へと身を隠し、弾倉交換しながら隣のハリソンは俺を見る

「なら、言っな……分かってるってのッ!!」

ハリソンが弾倉交換をする間、俺は敵へと応戦をし続ける

「ああ、【長い10分】になるだろうなッ!!」

弾倉交換を終え、シーガーが弾倉を交換すると同時に入れ替わるように敵への応戦を開始するハリソン

だが、その時だった

二人の居る場所から数メートル程、離れた廃屋に飛来する機体が現れたのは……

「おいおい、何だよッ！？ 早過ぎるぞッ、クソがッ！！」

飛来する爆撃機を確認すると敵に発砲しながら、仲間が突入した「空爆対象」である廃屋へと駆けるシーガー……

「シーガーッ、待てッ！！」

迫り来る敵の猛攻に応戦しながら、シーガーを追うハリソン

「ジェイク、プリーチャーツ!!」

仲間の名を叫び、廃屋へと駆け寄った瞬間……

シーガーは廃屋への空爆の強烈な爆発で後方に数メートル、吹き飛ばされた……

全身の骨が軋むような感覚がする

地面に叩きつけられた衝撃で視界がぐらつき、意識が朦朧とする……

「クソッ……プリーチャー……ジェイク……」

跡形もなく木っ端微塵に吹き飛ばされた廃屋へとフラフラと近付く
シーガー……

「よセッ、シーガー……！ アイツ等は死んだッ……！」

駆け寄ったハリソンがシーガーを羽交い締めするように押さえつけ、
引っ張る

「っ……助け……るんだよッ……アイツ等を……」

「シーガーッ！ お前まで死んじまうぞッ！！」

援軍を乗せた戦闘ヘリがあちろちらの空を舞い、地上に展開する
敵を一掃する中、ハリソンはシーガーを引きずりながらヘリに向かう

「ジェイク……プリーチャー……」

「……クッソオオオッ！！」

敵を殲滅しながら、地区を制圧する中……

シーガーの叫びが木霊した…

-
-
-
-
-
-
-

【陸軍特別編成部隊 拠点基地】

俺はハリソンと共に基地へと帰還した…

空爆に巻き込まれ、死んだ仲間は骨の欠片すら見つからなかった

無理も無えよな……廃屋は跡形も無く木っ端微塵になったんだからよ…

「何故、味方が居る廃屋を空爆したんだッ！　10分後の筈だろうがッ！！」

帰還すると同時に俺はウィリアムの奴にすぐさま、殴りかかると言わんばかりに詰め寄った

「シーガー軍曹、部隊の犠牲はつきものだ。彼等も無駄死にという訳じゃない」

「…っ……テメエ……もう一回、言ってみろ……ッ！ 部隊の犠牲はつきものだトッ！？」

今にも飛びかかろうとする俺を御したのは当時、大佐だったラス将軍だった…

「…ウィリアム將軍、私の部隊は仲間である以上に家族であります。それを「必要の為の犠牲」と仰るのですか？」

落ちていた口調で話すも、ラス大佐の手は血が滲み出る程、強く握り締められていた

「そうだ、兵士は国を護る為ならば命をも捧げる

全ては偉大なる我が国の礎となるのだ。彼等はこの国の為、犠牲となつたのだ

……寧ろ、光栄な事なのだぞ？ たかだか、一端の兵士よりも優れた連中が英雄としての名誉の戦死を遂げたのだからな」

その一言を聞いた瞬間……

俺の中の何かが切れ、俺を抑えるハリソンとラス大佐を跳ね飛ばし

……

ウィリアムのクソ野郎の顎に目掛け、渾身の力を込めた拳を叩き込んだ

-
-
-
-
-
-
-

「…その後、俺は軍法会議にかけられたが、ラス大佐とハリソンの弁護で2ヶ月の謹慎処分で済んだ…」

【ハウンド・ドッグ】も部隊の大半を失い、解体。その後、俺はあちこちの部署へと転属されるようになった

因みにだが、ウィリアムの奴は顎を粉碎骨折したらしい……正直、言えば殺したかったがな…」

「【ウィリアム・パーネル】と言えば、今の国防長官じゃないっすか？」

「…あの後、あのクソ野郎は国防長官になり、ラス大佐は奴の後任として將軍の座に……そして、ハリソンはNSAに渡った」

「でも、一連の襲撃事件と【ハウンド・ドッグ】……どんな関連があるのかしらあ……？」

ふむッ、と顎に手を当て考えるヘックス

「ハリソンが言っただろ？ 昔の部隊のメンバーが消息不明になってるってよ」

とは言っても、現メンバーは消息不明になった連中を入れ、俺とハ

リソンを合わせて6人……

つまり、4人が消息不明だ…

「何か、関わっちゃマズい事に関わって…その口封じに……って事かしらねエ？」

「チエキの言う通り、その可能性は高いな……現に俺らも襲われたしな」

だが、何かが引っ掛かる……

何故、今になってなんだ？

【ハウンド・ドッグ】を邪魔に思っなら、さっさと片付けた筈……

俺の答えに答えるものはある筈も無く……

ただ謎が深まるだけだった……

昔話 2 誰しも失ったモノはある (後書き)

GWでは一週間の休暇となりましたので、更新をしていく予定です

GW明けは再び、仕事で更新は停滞していくと思いますが……

番外編 〱 優秀だと、それを建前にロクな事は来ない 〱 (前書き)

遅れて申し訳ありません……

今回は番外編です

今回の話でも、とある作品のネタを使っております。知る人ぞ知るといようなネタです

それでは……

番外編 〽 優秀だと、それを建前にロクな事は来ない 〽

少しばかり……いや……

かなり昔の話だ……

まだ【ハウンド・ドッグ】に在籍……いや、解体前と言っべきか？

『あの時』はヤバかった（まあ、何時だってヤバい状況に陥るけどな……）

当時、ロシアではクーデターの危機が迫っていた

ある小隊がロシア軍には内密に雪山の拠点基地を牛耳っており、明らかに必要なまでの物資を集めていた

戦闘機、装甲車、大量の武器に爆薬……

普通ならば、軍が定めた基準の兵装を連中は軽々と越えていた

ロシア軍は同志を消す事を拒んだ……正確に言えば、誰が敵であつて誰が味方か、という疑心暗鬼に陥っていたからだ

ロシア軍はアメリカ軍へと協力を要請……

その白羽の矢が立ったのが、俺らだった……

それだけならば、まだマシなのだが……

あろうことが、上層部は【ハウンド・ドッグ】から2名のみを指定してきた

その理由は「クーデターの可能性はあるものの、その可能性は断定出来ない。その為、連中の情報を収集してこい」との事だ……

その2名に選ばれたのが……

「ジェームズ・ハリソン」少佐と「ダリアス・シーガー」軍曹だった……

-
-
-
-
-
-

【ロシア北部 トライビック雪山】

「……寒みい……」

俺とハリソンは連中の拠点基地がある「トライビック雪山」の中腹に居た

防寒仕様の白い迷彩服越しからでも、肌を突き刺すような寒さが身体中を走る……

「仕方ないだろ、ここはロシア北部であり尚且つ、今は真冬だぞ？
寒いのは当たり前だ」

吹き荒む吹雪の中、俺らは、ほぼ直角に近い角度の氷壁を登っていた

「んな事あ分かってんだよ、俺は何で標高何千メートルの高さで氷壁に登っているのが不思議で仕方ねえんだよッ!!」

吹雪で視界が真っ白に染まる中、先導するハリソンに大声を上げる

「それも仕方ないだろうが、気流の流れが悪い上に視界だってゼロに近いだろうが？ 第一、文句があるならラス大佐に言え」

何が「敵の裏をかき、先手を打つ」だよ……

「そりゃ、こんな場所を登って来る馬鹿なんざ、居る訳が無いと連中も思うだろうよッ!!」

大佐……恨むぜ……

そりゃ、へりとかを使えば連中に感づかれる上、気流の流れが悪い

のは分かるけどよ……

「エベレストに登れと同じ様に無茶な注文だぜ？　これはよッ！」

背中に担いでいる雪山用の迷彩を施した狙撃銃に拳銃までもを装備してだぞッ！？

「文句を言う暇があるなら、手を動かせ。あと少しで頂上の拠点基地だぞ」

そう言って、一足先に頂上へと登っていくハリソン

「これが終わったら、休暇申請してマイアミにでも行ってやる……絶対によッ！」

そう言って、俺も頂上へと登っていった……

-
-
-
-
-
-

【トライビック雪山 頂上部 拠点基地】

頂上へと登った俺らは基地から数名程、離れた丘から様子を見ていた

「……双眼鏡でも何も見えねえよ、それに吹雪も酷くなってきたしよ……」

「だが、俺たちには好都合だ。連中は俺たちが来るとは考えもしない上、この吹雪のお陰で連中にとって、俺たちは【ゴースト】だ」

「【ゴースト】ね……この寒さじゃ、マジで「逝っちまう」よ……取り敢えず、装備の確認をすんぞ、ハリソン」

「ああ、取り敢えず…軍用ナイフ、雪山用迷彩の狙撃銃・レミニトン M - 4 0 - に拳銃・H & a m p ; K M A R K 2 3 - ……どころかも消音器付き……」

武器を手に取り、異常が無いかを確認する

「それにC4爆薬に……んだ、こりゃ…?」

バックパックから携帯電話程のサイズの機械を取り出す

「それは試作品の装置だ、^{デバイス}心音のみを読み取り、相手の位置が把握できる」

「心音ね……少しはマシなモノを送ってきたな…」

そう言って、狙撃銃の側面部に装置を取り付ける

「そろそろ行くぞ……」

狙撃銃・レミントン M・40・を構え、姿勢を低くして吹雪の中を進み始める

- - - - -

数分程、吹雪の中を警戒しながら進んでいく

装置のお陰で『目の前に居る兵士』の事も丸分かりだからな

「敵兵二名を確認、右は俺が仕留める………3カウントだ」

姿勢を低くしたまま、狙撃銃の照準器^{スコープ}から敵兵の後頭部に狙いを定める

「了解………3………」

ハリソンも同じ様に左側の敵兵の後頭部に狙いを定める…

「…2…」

息を殺し、純白の世界に染まる視界から微かに動く敵兵に狙いを定め、引き金に指を掛ける

「…1…」

その言葉を合図に引き金を引く

消音器で極限まで消された二発の銃声が吹雪の音にかき消される

二人の敵兵はシーガーとハリソンからの狙撃により、後頭部から額に小さな風穴を開け、純白の雪を赤く染めて静かに倒れ伏す

「…死体を隠す必要は無いよな？」

仕留めた敵兵を確認すると俺はハリソンに目を向ける

「ああ、吹雪が隠してくれるさ……連中も雪山用迷彩服を着ているしな」

そんな会話をしながら、俺らは再び歩き始める…

再び数分程が経過……

「シーガー、俺はこの見張り台から援護する。ここから、200メートル先の滑走路脇に燃料補給用のタンクがある。そこに「弁当箱（C4爆薬）」を仕掛ける」

「了解……ついてないよな、お互いによ？」

足下に転がる数分前に見張り台から狙撃により、転落した敵兵を見下ろし、呟く

『視界が悪いが、ちゃんと仕留めろよな？ アンタの尻拭いはゴメンだぜ、「少佐」殿？』

ハリソンの居る見張り台から数メートル離れ、俺は無線でハリソンに連絡（という皮肉）をする

『心配するな、視界は悪いが装置デバイスがある分はマシだ、安心して「逝つて」「こい」

へっ、まあ…アンタの腕は信頼できるがな…

そう思いながら、俺は吹雪の中を突き進む

-
-
-
-
-
-

「さて……かれこれ、何人を始末したか……」

背後から喉を切り裂かれ、血溜まりを作る敵兵の迷彩服でナイフに付着した血を拭いながら、俺は呟く

少なくとも、目の前にある燃料補給用のタンクに辿り着くまで……

ハリソンの狙撃で、3人……

俺のナイフの餌食になったのは……2人……

「今のを合わせて、6人か……吹雪じゃなかったら、とつくに死体

も見つかっただろうよ……」

とは言っても流石に滑走路じゃあ、いくら吹雪の中とはいえ、目立つ為、俺は先程の「二人」と同様、目立たないように物陰へと死体を引きずり、そこに隠した

「……さて、さつさと仕事を片付けねえとな……」

燃料補給用のタンクに「弁当箱」を設置し、ハリソンへと無線を入れる

『ハリソン、こっちは設置完了だ。次はどうする？』

『了解、そのタンクから100メートル離れた場所に機材用の倉庫がある。恐らくは其処に情報もあるだろう』

だが、注意しろ。連中も異変に気付き始めたようだ……

此処（見張り台）からは、そっち（滑走路）に20人程が向かっているのを確認した…

俺は先に倉庫の裏口に向かう、其処で合流しよう。くれぐれも見つかるなよ?』

こっちに20人もかよ……

『了解……もしも発見された場合は……』

『お前を身代わりにして、俺は逃げるさ。何、心配するな、国では

英雄としての名誉の戦死になるように俺が頼んどいてやる』

『優しい言葉をありがとう?』

俺は無線を切り、吹雪の中で辺り一面に反応を示す装置デバイスを頼りに合流地点へと足を進める……

- - - - -

「設置」場所から移動し、数分後……

俺は合流地点へと辿り着いた

「…遅かったな、何してたんだ？」

……20人の監視の目をかいくぐって来たんだから、遅えのは当たり前だろうが…！

「悪いいな、ちょっと休憩がてら、お茶してたんでな…！」

軽く額に青筋が浮いてんだろうな……俺…

「お茶してたか、俺の分は？」

「テイクアウトは出来なくてよ……はぁ、早く行こつぜ……」

ため息まじりに俺は銃を構え直し、ゆつくりと扉を開く……

倉庫裏から侵入した俺らは二階の情報保管庫へと向かっていたが……
…その時、目の前に一人の敵兵が現れる

「シーガーツ、伏せろ」

落ち着いた口調でハリソンが言っていると俺は即座に伏せる

それと同時にハリソンは敵兵の眉間へと胸元のナイフケースに納めた軍用ナイフを投げ飛ばす

「……本領発揮だな、『M r・シェード』？」

眉間にナイフを突き立てられた敵兵にハリソンは近寄り、冷静にナイフを引き抜き、再びケースへとナイフを納める……

当時、ハリソンは俺ら（ハウンド・ドッグ）の仲間内では『M r・シェード』と呼ばれる事があった

アイツは如何なる時も氷以上に冷静沈着……正に氷点下20度のクール・ガイだからな…

「…よし、敵は居ないな……シーガー、二階に情報…若しくは連中のデータがある筈だ、見てきてくれ」

「ラジャー
了解」

俺は階段を上がり、保管庫へと入ると辺りを見渡す

「データは……っと…」

すると机上にある一台のラップトップが目映る

「中身を拝見つと……」「侵入経路」「物資内容」に「襲撃計画」…大当たり（ビンゴ）だな」

俺はバックバックにラップトップをしまい込み、ハリソンの所と戻ろうとした時だった…

ハリソンの居る倉庫正面のシャッターが開く音と銃を構える金属音が聞こえたのは……

俺はすぐさま、隠れながらハリソンの居る一階の様子を窺う

「……完全に囲まれたか……」

目視で確認できる限り、10人程が銃を構え、両手を上げるハリソンにその銃口を向けていた…

「私はこの小隊の指揮官^{リーダー}、ペドロフ少佐だッ！ 武器を捨てて降伏

しろッ!」

「ペドロフ少佐」と名乗る男は拡声器を使い、ハリソンと（恐らくは二人居ると考えているだろう）俺に降伏を呼び掛ける

『…シーガー、計画^{プラン}Bだ……タイミングは任せる』

ハリソンからの連絡が入ると同時に俺はサイドバックから「弁当箱」の起爆スイッチを取り出す

「良いか、五秒やるッ!」

ペドロフ少佐は拡声器で5カウントを開始する……

「4……………」

兵士たちはハリソンへと銃を構え直す

「3……………」

狙いをよく定め再度、安全装置セーフティの解除を確認する

「2……………」

引き金に指を掛ける……

「1……………」

そして、俺は一気に起爆スイッチを押し込んだ

-
-
-
-
-
-
-

燃料補給用タンクに仕掛けたC4爆薬は大量の燃料により、大爆発を起こす

ハリソンに銃を向けていた連中も驚き、爆発する滑走路を見る

「ハリソン、今だッ!!」

その言葉を合図に俺とハリソンは銃を抜き、周りの敵兵の殲滅を開始する

鳴り響く銃声、敵の断末魔……辺りは雪では無く、薬莢と硝煙……
そして、血の匂いが充満する

「シーガー、南東に向かうぞッ!! 援護しろ!」

「了解ッ!!」

そして、俺らは爆発の影響で次々と車両の誘爆していく滑走路を一気に駆け抜ける

「ハリソンッ！、6時と8時に敵だ！！」

俺は手に持つ狙撃銃を使い、言った方向に居る敵の胸元を撃ち抜き、敵兵は倒れ伏す…

確認なんぞ、必要は無い

確認してたら、俺らまで死ぬことになるからな

「走れ、走れッ！！」

後方に迫る敵兵たちに牽制射撃をし、叫ぶハリソン

だが、俺は近付く二つばかりのエンジン音を耳にする

その接近する音の方向へ目を向けると…

「クソッ、スノーモービルだ!!」

運転手と後ろに雪山用迷彩仕様の突撃銃・AK-47-を構える敵兵が乗るスノーモービルが二台、俺らに迫っていた

「シーガー、アレ（スノーモービル）を使うぞッ!! 敵だけを仕留めるッ!」

ハリソンはそう言うと倒した敵の死体から突撃銃（AK-47）を

拾い上げ、迫るスノーモービルの運転手に向け、発砲する

ハリソンの持つ突撃銃から連射された5・45mm口径の弾丸は運転手の胸を貫き、後ろの敵をも貫通……

運転手を失ったスノーモービルはハリソンから逸れた方向に行き、横転する

「今度は俺の番だな……」

俺は軍用ナイフを取り出し、持ち前（神より授かったと言っべきか？）の超人的反射神経と身体能力を使い、迫るスノーモービルの運転手の額に向けて投げ飛ばす

運転手の額に投げたナイフが突き刺さるのを確認すると同時にホル

スターから消音器付きの拳銃・H&M P;K MARK 23・
を引き抜き、そのナイフの柄部分に狙い撃ちする

軽い金属音が鳴り、運転手の額に突き刺さるナイフは弾丸により、
押し込まれて運転手の頭を貫通……

後ろに座る敵の額へと突き刺さった

先程のスノーモービルと同様に運転手を失ったスノーモービルは俺
から逸れた方向に横転する

「シーガーッ、フルスロットル（全開）だ!!」

俺らは横転したスノーモービルを起こすと座席に跨り、アクセルを
一気に回して雪山を駆け下りる

『リチャードッ！ 聞こえるかッ！？』

俺は無線を使い、俺らの回収役であるヘリパイロット…

「リチャード・ウォルター」へと連絡を入れる

『こちら、リチャード どうぞ』

『回収地点は連中に抑えられた。今、敵車両スクーモービルを使って第二回収地点に向かっている！ そちらに向かえッ！！』

『了解、お前ら人気者だな。こっちからは後ろに大勢の追っ掛けが見えるぞ?』

『お前は芸能リポーターかッ!? さっさと第二回収地点に向かえよ!』

無線を切り、再び運転へと意識を集中させる

下り坂を一気に駆け下りる

岩場や木々……そして、後ろからの銃撃を避ける……

「クッソ、ハリソン! ヤベえぞッ!」

「分かりきった事を言っなッ！……「奥の手」を使うぞ！！」

するとハリソンは懷からC4爆薬を……

…「爆薬」……？

「おい、ハリソンッ！　んなモン（爆薬）を使ったら雪崩が……ッ
！！」

だが、俺の言葉を待たずにハリソンは爆薬を下り坂である雪原に落とす

そして、後ろからの『追っ掛け』が爆薬の側に来た所、起爆させる

当たり前の事だが、追っ掛けの大半は吹き飛び、爆発の衝撃で地面の雪は地面ごとなだれ落ちる…

「ハリソン、どうすんだよッ!？」

追っ掛けの代わりに雪崩が迫る中、俺らは更にアクセルを回し、第二地点へと駆け下りる

「簡単な事だ、雪崩との競争、先に着いた方が勝ち!」

簡単な事って……

「明らかにヤベえだろうがッ！！ 第二地点ごと飲み込まれちまうぞッ！？」

「その点は考慮してゐ、アレを見る」

俺はハリソンの指差す方向へと目を向ける

そこには向かいの山との間にある大きな谷間があった

「目算でも、対岸との距離は500メートルはあるぞッ！？ 一か八かの賭けじゃねーかよッ！！」

「何時もの事だろうが？ 無事に帰りたいや、アクセルを緩めずに全開を保てッ！！」

俺以上に無茶苦茶だろうが、コイツはよッ！！

アクセルを全開に保ち、谷間へと一気に駆ける

「行くぞ、シーガーツ！！」

「無茶苦茶だろうがよおおおッ！！」

俺らが乗るスノーモービルは対岸へと谷間を飛んだ

後ろに迫る雪崩は空中に飛ぶ俺らに届かず、そのまま谷間に落下していく

そして、激しい衝撃と共に対岸の雪原へと着地する

「っ……無事、成功しただろう？」

スノーモービルを止め、隣に居るシーガーへと目を向けるハリソン……

「……死んだ……普通は死んだって……これはよ……」

俺は冷や汗をかきながら、ハリソンへと目を向ける

背後からのエンジン音で振り返ってみれば、そこには……

リチャードの操縦するヘリが俺らを回収すべく着地しようとしていた……

-
-
-
-
-
-
-

その後、俺とハリソンは無事、情報と共に帰還……

見事、任務完了って訳だ……

因みに余談だが、その小隊は俺らの起こした爆発の影響か、派手な銃撃戦の影響なのか……拠点基地ごと雪崩に飲み込まれ、「壊滅」となった……

その後、ロシア側からは感謝と請求書（拠点基地の）が来たのは言うまでもないよな……？

番外編 〽 優秀だと、それを建前にロクな事は来ない 〽 (後書き)

今更ながら、後書きは必要ないと思える

話の内容自体が後書きみたいなモノだから……

濡れ衣、過去に問題がある奴が居ると、すぐソイツのせいになる、（前書き）

今回は急展開となる話です

会話が殆どなので、読みにくいかもかもしれませんが、御了承ください……

濡れ衣、過去に問題がある奴が居ると、すぐソイツのせいになる、

あれから、1日が経過……

俺らは情報の整理をするも…結局、関連性は不明のまま、行き詰まっていた

そんな時、ヘックスは気分転換と言って、TVをつけたが……

そこには更に俺らを悩ませるには充分過ぎるまでの映像が映されていた

『昨夜、ワシントンでの大統領演説の際に何者かの狙撃により死亡した「ウィリアム・パーネル」国防長官の……』

TVにはニュース・キャスターが、俺の犯人予想に近い人物……

「ウィリアム・パーネル」の死亡を報道していた

「どういう事ッスか！？　だって、昨日のシーガーの話と【ハウンド・ドッグ】の情報じゃあ一番、ウィリアム国防長官が怪しいじゃないッスか……！」

驚愕の表情を浮かべ、シヨコラーデは声を上げる

だが、更に俺らは愕然となる事をニュース・キャスターは報道する

『警察やFBI当局からは、犯人である狙撃手は大統領を狙撃しようとするも失敗、大統領の側に居たウィリアム国防長官を狙撃する事となり、逃亡したとの報告です』

狙撃は大統領の位置から2000メートル離れた距離からの狙撃であり、当局は犯人が「ダリアス・シーガー」元大尉であると断定。ダリアス・シーガー元大尉は軍の特殊部隊を指揮しており、軍でも随一の狙撃手としての腕を誇っていました

数年前にダリアス・シーガー元大尉は命令違反により、部隊全員と共に不名誉除隊となり、今回の事件はその逆恨みとの報告もあります』

「何で、シーガーが犯人になってるのよッ!?　だって、昨日は私たちと……!」

ニュースの報告に異を唱えるチエキータ……

「……ハメられたな……俺らが嗅ぎ回ったからだろうよ……」

それに襲撃事件の真犯人たちなら改竄も簡単だろうよ、クソツたれめ……

「大統領の暗殺が連中の目的なら、失敗するかしら……それに数々の襲撃をした連中なら、もっと秘密裏にだって出来る筈じゃないかしらぁ……?」

顎に手を当て、考え込むヘックス…

確かに妙だ……

「俺を犯人に仕立て上げるなら、完全に大統領を暗殺して歴史に名が残る程の犯罪者にするしな……」

だが、俺には確認すべき事があった

「…シヨコラーデ、事件現場、周辺の写真か建物の情報を頼む」

「…分かったッス」

すぐさま、ノートPCを開き、情報収集を開始するショコラーデ…

一番、「コレ」が引っ掛かって仕方がない……

何故、最も警備が厳重なワシントンで連中は狙撃を選んだ？ 最早、自殺行為とも匹敵するのは明白な筈……

しかも、大統領を外して「ウィリアム」の奴を殺した事も引っ掛かる……

奴が今回の襲撃事件の黒幕ならば、全てにおいて、辻褄が合うのだ

が……

それも、お陰様で水泡に帰した……

「シーガー、事件当時の情報、周辺の建物についてを入手したッス」

そう言っつて、画面に映る周辺地図を見せるショコラーデ……

「……大統領の位置から、2000メートル離れた距離って言ったわよねエ？」

画面を覗き込んで、チェキータが呟く

「同じ狙撃手の立場から言って、この位置を狙うとしたら……5、6階建ての建物から狙うな…」

俺は地図にある数十ヶ所の5、6階建ての建物を見る

「でも、2000メートルと言えば、「約2Km」よ？ 並大抵の狙撃手じゃあ、無理よねえ…？」

同じように画面を覗き込むヘックス…

「それだけの射程距離だとあらゆるモノが影響する事になる

「湿度」に「標高」、「気温」と「風」、チリまで影響する上、着弾までに7、8秒がかかり、地球の自転の力も影響する

防弾チョッキを考慮して、頭を狙う事は必然的……それも、2000メートル先の標的を仕留めるには尚更な……」

「なら、そんな腕を誇るのはアタシ等が知るのはシーガーしか居ない……他に居たとしても、世界中に何人が居るんだか……」

溜め息混じりにチェキータは呟く

「少なくとも5〜6階以上の建物なら、大統領の狙撃にはうってつけ……演説が始まって4〜5分、待てば無防備となる

先ず、大型口径の銃は必要不可欠だ。合金から削りだした特注製の弾丸も必要になる

空気抵抗が少なく、より確実となる高速弾……俺なら、そうする」

「でも、そんな距離から人を殺せるんツスカ？」

「例え、2400メートルあったとしても…その弾丸なら、44マ
グナム弾以上の破壊力を誇るから、簡単だろうよ

問題は風だ。ほんの僅かな風の誤差ですら、その距離だとデカい的
でも外す事になる

大統領たちの立つ演壇と発射位置との間に目印が必要だ。風速や風
向きに対しての微調整は簡単だが、風向きや三角関数の問題を瞬間
で計算した上、測量するモノが無い限りは一撃で仕留めるのは至難
の業だ」

「だから、大統領を外して国防長官に命中する事になった……って

事かしらあ……？」

「いや、最新鋭の装備を持つ連中だぞ？ その線は怪しい。連中ならそれを可能な測量器ぐらいは簡単に用意するだろう」

だが、狙撃手は別だ。いくら、機械が優れても結局は狙撃手の腕が必要になる

チェキの言った通り、そんな腕を誇る狙撃手は、そうは居ない……」

460

「……なら、誰がシーガー以外に狙撃をしたんツスか？」

俺は煙草を取り出し、ソレをくわえて火を着ける

「……出掛ける支度をしとけ、「テネシー」に向かうぞ」

-
-
-
-
-
-

【テネシー州 郊外】

俺らは「ある人物」に会う為、車を郊外へと走らせた

幸いにも検問はまだ本格的になってなく、指名手配となつた俺が発見される事は無かつた

「シーガー、事件現場の情報が分かつたツスよ。現場ではあちこちに軍への敬意を示す為に黄色い勲章入りのリボンを張り巡らしてたのが分かつたツス」

助手席に座るシヨコラーデが後部座席に座る俺へと目を向ける

「となると、目印に關しての問題は解決……他には？」

「それが、FBIのデータベースにハッキングしたら……狙撃場所に残された銃の線条痕からはシーガーの使う銃と一致したらしいっすよ。恐らくは軍隊時代の銃を使っ たんっすかね……」

「線条痕が指紋代わりか……ますます、俺が犯人と断定されてくな、畜生め……」

「それで……遙々、テネシーの郊外まで来た理由は？」

俺らに乗せた車は目的地に到着し、降りながらチェキータは俺を見る

「此処に住む【伝説の銃職人^{ガン・スミス}】に会うからだ」

俺らは車から数十メートル離れた小さな小屋へと歩く

「『S & a m p ; W』や『H & a m p ; K』の創設者たちよりも銃に詳しく、銃の全てを知り尽くした男だ

俺らが来た事は、5キロ先からの時点で分かってるだろうよ」

「凄いわねえ……それは……」

そして、俺らは小屋へと辿り着いた……

-
-
-
-
-
-

「わざわざ、遠路を遥々と……何の用かな？」

俺らの前に座る初老の老人は俺らに声を掛ける

「知恵をお借りしたいのです」

後ろの三人からは、「あのシーガーが敬語……?」、「信じられないっス……」、「夢じゃないかしらあ……?」等と小声が聞こえるのは気のせいだと思う事にしよう……

「…まあ、座りなさい。そちらのお嬢さんたちも」

俺らは側にある席へと座る

「一度、撃った弾丸を線条痕をそのままに別の銃で撃つ……可能ですか？」

「最初のライフルから撃った弾丸を綺麗なまま、取り出せば線条痕を保てる。もう大昔に試した事だがな」

すると俺の後ろに座るシヨコラーデが言う

「FBIの情報じゃあ、国防長官から検出された弾丸は潰れていて、金属鑑定では凶器としか断定されなかったって言ってたっスよ」

老人はシヨコラーデを見て、言う

「ああ、後ろの金髪のお嬢さん、その本棚にある本を取ってもらえるかな？ 赤い背表紙のヤツだ、書いたのはラガーフェルドって人だ」

シヨコラーデは「コレっスか？」と言い、古ぼけた赤い背表紙の本を取り、老人に手渡す

「十五年前にしまいっきりでな、もう一度も読んでない」

老人は本を受け取るとシヨコラーデの手を軽く掴み、掌を見つめる

数秒後にはその手を離し、シヨコラーデを席に戻す

シヨコラーデは不思議そうな表情を浮かべ、老人が見た自分の掌を見つめる

老人は本のページを捲り、言う

「ああ、この項目だ」

そのページには「銃弾の加工と効果」という項目があった

「【紙で銃弾を包む】19世紀、南アフリカで考案された方法だ。実に素晴らしい発想だったな

紙で包めば、銃身の中で弾は擦れない。発射すれば、紙は燃えて証拠も残らない

そうすれば、線条痕も前の銃のままに保てる」

老人は満足げに本を閉じる

「実に面白い質問だった……まだ何か、あるかね？」

「はい、もう一つ」

老人は予測してたように言った

「やはりな、それで何かな？」

「2000メートル以上の距離からの狙撃で、最初の一発で仕留められる狙撃手をご存知で？」

「…実は最近、そんな狙撃の話を目にしたな……その狙撃手の名前は「ダリアス・シーガー」…

会った事がない奴だから、よく知らんがな」

「ええ、その話は知っています…」

「他にも知っている事はあるぞ？」「人工甘味料は安全」だと…「フセインには双子の兄弟が居る」とか……「イラクには大量破壊兵器がある」とかな

……だが、その狙撃手は笑えん話だ」

「……………何故ですか……？」

ヘックスが老人に言う

「その狙撃手はもう土の中だろう……陰謀ってのは、そういうものだ

ケネディ暗殺の真犯人だって、そうだ。全員が三時間以内に死んでいる

テキサスの砂漠のど真ん中に埋められ、無名の墓がたっておるよ」

「それって、本当なんですか？」

チエキータが老人に言う

「何なら、「その時に使った」シャベルを見せようか？」

「…その男以外、誰が居ますか？」

「三人程、居たな……ロシアの奴は、今でも刑務所だ。フランスの奴は大昔に死んだ

あと一人居るが……ソイツはもう撃つとらんよ……」「冷酷無比なクソツたれ」だ

普通、狙撃手は一撃で仕留めるのだが……奴は、わざと手傷を負わせる。仲間が助けに来た所で仕留める……一人が四人になる

男も女、子供も……百人単位で殺す

……やがて、ソイツも命を狙われた。そして、ついに6階建ての廃虚ビルの中に追いつめられた

追いつめた連中に周到な作戦など、必要ない。防弾、迫撃砲での一斉砲撃……辺り一面は焼け野原、ビルも奴の上に崩れ落ちた

そこから這い出した、と言う奴が居れば死んだ、と言う奴も居る……

だが、噂では這い出したソイツには一人息子が居て、自分の技術を全て息子に伝授したという話もある」

その時、俺の頭の中には一人の男が浮かび上がった

その狙撃手に極似したやり方の男が……

「まさか……」

「どうしたんっすか……？」

シヨコラーデが俺の顔を覗き込む

「……その男」の息子には一人、心当たりが居る」

すると老人は俺の手を掴み、掌を見つめて、こう言った

「世の中、見かけとは違うモノだな、【大尉】」

「……そうですね」

老人は手を離し、こう言う

「良いか、よく覚えておくんだ……」

真実というモノは近くにあり、見落とす事となる……それに……

簡単に分かったとは思わない事だ、そう思った途端に……失敗する事

になる」

俺は静かに老人を見据え、言った

「…その男の名前は？」

そして、老人は静かに言った…

「名前は分らん…だが、名字からの通称で呼ばれていた

通称は「ウィル」…名字は…

【ウィルソン】だ」

濡れ衣、過去に問題がある奴が居ると、すぐソイツのせいになる、（後書き

ここで、作者も忘れがちな【ウィルソン】の名前が登場……

分かる人には、本当の黒幕の正体に分かると思えます

決意　く　腹を括つたら、怖いものなんて無い　く（前書き）

久々の投稿です……と言っても、相変わらずの駄文かつ短いですが
……

決意　　腹を括つたら、怖いものなんて無い　　

【ヴァージニア州　フロイド港】

貨物船などの様々な船が行き来する、この港から少し離れた海岸沿いの駐車場に一台の黒い車 - 1967年型 Ford Mustang - が駐車され、その側にはサングラスをかけ、片手には携帯を持った男が一人居た

「……ああ、オレだ……アンタの予想通り、『連中』はテネシーの銃職人^{スミス}に会いに行ったぜ？　大方、オレの『親父』の事も知つただろうよ」

懐から煙草を取り出し、口にくわえると火を着ける

「……こっちの方は準備万端だぜ、『アイツ』も餌になる事を承知で

引き受けた位だ……正に「真の愛国者」ってか？

…心配しなさんなつての、後は『連中』にアンタが情報を教えりやあ、完璧だろ？

…分かってるって、「生け捕り」にしるだろ？……ぶっちゃけ、心臓が動いていて、ちゃんと話せる状態だったら問題ないよな？」

男はこれから起こる事に対して、愉しげな笑みを浮かべる

「……OK、オレだって「この国」を思つての行動だ。アンタを裏切る真似はしねえ、保証してやるぜ？」

軽口を叩きながら、電話を切る男は……

長年、シーガーたちが追い続けた人物…

【ルーク・ウィルソン】だった

-
-
-
-
-
-

【アップタウン ロードの車庫】

俺たちはテネシーの銃職人と話した後……再び、車庫（寝床）へと戻っていた

「……【ウィルソン】か……最大のチャンス到来ってか……？」

「でも、連中もただ黙っている訳でも無いっスよね？」

少なくとも【ウィルソン】親子のどちらか……まあ、十中八九は『息子^{ルーク}』の方だろうな。俺もアイツも互いに嫌っているし……

「じゃあ、アタシらはどうする？　連中が動き出す前に叩くべき？」

巧みにナイフを弄びながら、俺を見るチエキータ

「……ハリソンに連絡すべきだな……少なくとも、「父親」の情報
はありそうだ」

俺はハリソンに連絡を取るべく、携帯を取り出した……

- - - - -

『…そうか、やはりな…』

「予測していたなら、俺への濡れ衣を取り消してくれないか？ この先、俺らが指名手配リストのトップ・ランカーにされる前によ」

『もう手遅れだ、私一人の権限ではどうする事も出来ん……それと【ウィルソン】の件だが詳しい詳細が分かった

【チャーリー・ウィルソン】

元KGB（国家保安委員会）職員であり、超一流の「狙撃手」兼「暗殺者」……冷戦の終結後、アメリカへと亡命……CIAでは狙撃と暗殺の教官を勤め、一部の人間に「ある暗殺術」を伝授……

その後、暗殺や狙撃の任務をこなしていき……ある日、任務中に死亡とされているが……恐らくは銃職人の言った通りだろうな……」

「……「ある暗殺術」……バリステイカ『弾道』の事か？」

『ああ……「近距離」、「中距離」、「遠距離」の三つを考慮した殺人術……射撃と格闘技を合わせて考案されたヤツだな』

「アレは……正直、修得するには並大抵の苦労じゃ、済まねえな……」

『…例に「弾道」を修得した者は極限にまで研がれた五感により、三距離からの銃撃も瞬時に回避する事も可能……「お前」のようにな』

「…俺は忘れちゃったな……少なくとも、『一生をかけて、磨き続

ける暗殺術』なんぞ、性に合わねえよ」

『…恐らくは息子であるルークも修得しているだろう。出なければ、あんな距離からの狙撃は不可能だ』

「……それ以外に情報は？」

『一つある、以前に【チャーリー・ウィルソン】が住処としていた場所だ』

-
-
-
-
-
-

さてさて……随分と懐かしい名前が出てきたな……

俺はハリソンから「住处」に関しての情報を聞いた後、話に出てきた『弾道』の事を思い返した…

俺が軍に入り、大尉へと昇進した頃だ……

俺はCIAでの特殊訓練とやらを受けさせられた

確かに俺は…忘れがちだが「転生者」として、超人的な身体能力を持っている

だが『弾道』は特殊なモノだ。アレは極めて僅かな人間を俺に近いレベルにまで身体能力を引き上げさせる暗殺術……人を殺す事に特化させた技術だ

だが、俺にそれを教えた奴は【チャーリー・ウィルソン】では無かった（恐らくはソイツの弟子にあたる奴だろう）

先ず、基本的な武器の取り扱いから始まり、近接戦闘からあらゆる射撃術……基礎という基礎を徹底的に叩き込み、次にペイント弾を使つての銃弾の回避法をやり、徐々にペイント弾からゴム製の模擬弾……最終段階では実弾を使用する事になる

「弾道」を修得できる人間はそう簡単には居ない。大抵は銃弾の回避時で脱落（つまり死ぬという意味だが）するからだ。

俺は元々、ソレが出来る為に苦労はしたが修得した

修得時には必ず、銃弾の首飾りを渡されるらしい（現に俺も持っているが、首輪は認識票^{ドッグ・タグ}だけで充分だが）

流石にあの野郎^{ルーク}までも修得しているとは思ひもしなかったがな……

だが、あの野郎は2000メートルからの狙撃をした時点で「修得者」は事実なんだろう

「……段々、面倒な事になってきたな……」

煙草を取り出し、口にくわえて火を着けながら、俺はため息混じりに呟いた

「……覚悟を決めるしかねえ……か……」

-
-
-
-
-
-

それから次の日……

俺らは車庫ガレージの中心にあるローグから貰った車の前に集合していた

「……状況は良くないな……俺らは大統領の暗殺未遂の濡れ衣を着せられた上に、国家にとって……どのテロ組織よりも最重要指名手配犯……」

俺らをハメた連中は正体不明であり、武装も完全フル装備……恐らくは米軍の中隊クラス……若しくはそれ以上の相手……

俺らが高性能の武器を1つ手に入れたとしても、連中は何千と手に入れているだろう

CIAやNSAの情報能力ですら、把握出来ていないんだからな……」

「…まともな奴なら、朝起きて「今日、自分は死ぬんだ」なんて、考える事はないんでしょうね…でも、それは贅沢なのよ…皮肉ぬきでね」

「そう…死に場所を選べるなんて、一種の自由なんっすから…それに自分を見つめ直すには良い機会っすよ」

「武器も無ければ、味方も居ない…明らかに利口な人間がする事じゃないわぁ…」

そう言つて、俺らは静かに武器を取り出す……

俺は狙撃銃 - Intervention - を……

ヘックスはスコープと銃身の下にグリップを装着した突撃銃 - SCAR-H - を……

チェキータは長年、愛用している軍用ナイフを……

シヨコラーデは30発入り弾倉の拳銃 - G18 - を掲げる

「……だが、この国はそんな馬鹿たちを永きに渡って見守ってきた

受け入れてもらえるだろう、俺たちも……

何故なら、数ある選択肢の中で…無謀であり、最悪のを選んだんだからな」

そして、互いに掲げた武器を交差させる

「例え、これ以上に最悪な事態に陥ったとしても……」

「例え、不可能な事に挑むとしても……」

「アタシたちに不可能なのはただひとつ……」

「諦める事だけなんっすから……」

そして、俺は言った

「……やってやろうぜ、俺らをハメた連中は全員、地獄に叩き落とす……」

何時だって、そうだ

どんなにヤバい状況になろうが、不可能な任務に挑もうが……

俺らに不可能な事はただひとつ

- 諦める事だけだ -

決意　く　腹を括つたら、怖いものなんて無い　く（後書き）

タイトル通り、今回はシーガーたちの決意の話でした

果たして、真犯人たちの目的は？　黒幕の正体は？　どちらの計画通りにいくのか？

そんな感じに仕上げたつもりです

次からは再び、シーガーたちの常識を覆すような活躍を書きたいと思っております

それでは、

予告 - 映画とかの予告って、映画の内容よりも盛り上がる - (前書き)

予告を兼ねての話です……この時点で、様々なネタがありますが……

予告 - 映画とかの予告って、映画の内容よりも盛り上がる -

かつて、何者かの策略によって不名誉除隊となった4人の特殊部隊

彼らは自分をハメた連中を突き止めようとするも、更にハメられ大統領暗殺未遂の濡れ衣まで着せられた……

…しかし……

「俺らに不可能な事は1つ」

彼らは決して、諦める事は無かった

「まずは、軍資金が必要になるわぁ……………」

「それなら、考えがある」

ハメた連中への報復を決意した四人

「この情報だと、個人名義で銀行の金庫を借りてるっスね」

「あらあら…………随分と「懐かしい顔」なこと……」

より無謀で…………

「金庫の中身は恐らく、原版から刷りまくった連中の資金「1億」だ。借り主の『リンチ』には悪いが、俺らの軍資金にしよう」

「流石に国家御用達の銀行っス……最新鋭の防犯システムにフル装備の警備員……」

「普通はイカレてると思うんでしょうね、アタシたち以外は？」

「簡単過ぎちゃ、つまらないだろ？」

より過激に……

「奴ら、原版を狙っている。正気とは思えないような作戦でくるぞ」

「シーガーたちの得意分野だろ、オレらの想像を遥かに超えたブッ飛んだ作戦だろうよ」

彼らの反撃が始まる

「いらっしやいませ、本日は当銀行にどのような御用で？」

「ああ……ちょっと金庫を「拝借」しに」

「……はい………？」

今まで以上に奇想天外

「よお、チエキ！ この車の乗り心地はどうだ？」

「最高ねエ！」「金庫を引き摺って」警察とのカーチェイス、興奮するじゃないッ！！」

「シヨコラーデ、出番よお？」

「了解、「足下注意」っスよ」

常識を覆す

「何が起きたッ！！」 原版を乗せた輸送車が何で道路のド真ん中で消えたんだッ！？」

「ルークさんッ！ 連中は地下から輸送車の居る道を爆破して、「輸送車ごと」原版を地下に落としたんですよッ！！」

そして……

「やっと会えたなあ……シーガー？」

「ヘッ、KGB仕込みとCIA仕込みの近接戦闘対決ってか？ あ
りきたりな展開だな」

「お前も「修得」してたのか……まあ、オレの方が上手だろよッ
……！！」

「確かめてみるよ、ド素人がッ！！」

真相が明かされる

「我々の「組織」を知る者はこの国にもそうそうは居ない……我々は昔からこの国の国内外から脅威を守り抜いてきた」

「テメエが黒幕だったかよ……まんまと騙されたぜ、「長年の付き合い」だったのによ……！」

「お前らは最早、我々にもこの国にも「脅威」となる……」

「おら、お前にとっては懐かしい顔触れだろうよ？ 【ハウンド・ドッグ】の「再集合」だぜ？」

「…死んだ筈じゃあ……！」

果たして、生き残るのはどちらか

「奴らは俺らを史上最悪の犯罪者にする気だ。だが、そうはさせね

え……俺らは星条旗に誓いをたてた

「あらゆる」危機から国を守るとな」

「たかが、四人の精鋭に何ができる？ 我々はお前らよりも遙かに上に居る」

「知らねえのか、高見に居る奴ら程、転げ落ちるんだぜ？」

『転生者は消耗品を望む』

「……お前にだけは……分かって欲しかった……」

……それも、もう無理だろう……お別れだ、シーガー……」

現在、
執筆中

予告 - 映画とかの予告って、映画の内容よりも盛り上がる - (後書き)

何度も言いますが「予告」です。映画の予告と同様に内容が変化する事もあります

取り敢えず、もうネタバレ的な面も多くなりますが……

襲撃　　女は怒ると、どんな男よりも恐ろしい　　（前書き）

1　2カ月ぶりの更新です……

相変わらず、駄文や表現の下手さには磨きがかかってる始末です…

襲撃　　女は怒ると、どんな男よりも恐ろしい　　

あの誓いから2日が過ぎた……

2日間も何をしていたかだつて？

そりゃあ、物資から連中への報復までにおいて、全ての面に計画を
たてていたんだよ……

我ながら「ブツ飛んだ計画」^{プラン}の数々だがな……

「……マシな結果になってくれよな……」

俺はソファーに寝転び、ため息混じりに呟く

「……あまり、根を詰めすぎちゃあ、身体に毒よお……？」

ふと、自分の上に軽い重みを感じて見上げれば……

「……ヘックス、気配を絶って近付く癖は止めろっての……」

寝転ぶ俺の腹部に馬乗りとなっているヘックスが居た

「……でも、不安よねえ……敵も味方も分からない状態なんだから……」

そう言つて、ヘックスは俺の胸板に細長い指をゆつくりと這わす…

「……濡れ衣を着せられたまま、独房の中でくたばるか、どこかのドブに葬られるのがオチだろうよ………だが、少なくとも、それは今日じゃない」

「……なら……気分転換でもしましょうかしらあ……？」

するとヘックスは一個の鍵を取り出し、俺の眼前に差し出す

「……その鍵は？」

「此処にある車の内の一台の鍵」

「……ドライブでも、しようつてか？……チェキやショコラーデが簡単に行かせてくれるとでも？」

「心配ないわあ、二人とは話をつけたあるから……」

用意周到というか、抜け目ないというのかねえ……

-
-
-
-
-
-
-

【アップ・タウン 大通り】

時刻は深夜、大通りには昼間に比べて車の量は少なく、人通りも殆ど無い

そんな中、一台の赤い車 - 69 Corvette CONV -
- が大通りを駆け抜ける

「ローの奴もクラシック好きも相変わらずか……」

車を運転し、煙草を吸いながら俺は呟く

「車も昔ながらの方が一番って事かしらあ……？」

「アイツは昔からの車好きでな……アップ・タウン此処での車両窃盗に違法改造車の
商売もローグが考えたんだよ」

「成る程……今じゃあ、高級車専門のオーナー……夢を掴んだのか
しらねえ……？」

すると、ヘックスは車の後ろへと目を向ける

「……どうした？」

「……「お客」が来たみたいねえ……一台……いえ、二台ね」

サイド・ミラーから映る後方には……

真ん中に車、一台分の間隔を開けて、左右に明らかなまでに異常なスピードで迫る二台の黒い大型車が迫っていた

「……昔、俺がモットーにしていた言葉を知ってるか？」

そう言って、俺はアクセルから足をゆっくりと離し、徐々に速度を緩める

「何かしらあ……？」

俺の意図が読めたのか、ヘックスは助手席から身を乗り出すとハンドルを持ち、車の位置を安定させる

「それはな……『先手必勝』だよ……ッ！」

一気にサイド・ブレーキを引き、迫る二台の中間へと車を戻すと同時に俺は運転席から立ち上がる

左右のホルスターに納めた二丁の大型自動拳銃・DESERT EAGLE - を抜き、（襲撃の為であろう）開いている左右の車の助手席部の窓に向け、構える

銃口の先が助手席と運転席に乗る連中の頭へと重なりと同時に引き

金を引く。左右、一発ずつの銃声と共に発射された50 Action-Express弾は、助手席に座る男の頭蓋を砕き、威力を保ったままに貫通、そのまま、運転手の頭へと吸い込まれていくように助手席の男と同様に頭蓋を砕かれ、フロント・ミラーの内側に脳髓と血飛沫をバラまく……

俺とヘックスを乗せた車が乗用者を失った二台の間を通り抜けると同時に、二台の車は長蛇の列となっている路上駐車車の列へと突っ込み宙を舞う。そのまま、地面との激しい衝突キスをした二台の車は激しい衝突音と共に爆発、炎上を起こす

「……相変わらず、イイ腕してるわねえ………？」

「狙った獲物は女も標的も逃さない………ってか？」

「古すぎじゃないかしらあ……？ まあ、私やチエキたちも見事、」
「撃ち抜かれた」けれどもねえ………」

すると今度は前方、数十メートル先からは先程、仕留めた二台と同型の車が三台、此方へと迫っていた

「どのどいつか、知らねえけどよ…ワンパターン過ぎんだよ……」

そう愚痴を零しながら、俺は車を降りると後部のトランクへと向かう

「ヘックス、この車に「オモチャ」を積んでるか？」

「以前、チェコの業者に注文したヤツならあるわよお？」

トランクを開け、中を覗き込むとそこには大型バックがあり、中身を確認すると……

「……昔を思い出すな……」

俺は『オモチャ』を取り出し、大まかに分解された部品を組み立てる

組み立て終えた『オモチャ』に接続してあるベルトを肩に吊り下げ、前方へと迫る車に視線を戻す

前方の車の助手席部の窓から箱乗り状態で銃を構える黒い部隊装備の男。覆面にゴーグル……フルフェイス装備だな

俺は迫る車に向け、ヘックスが業者に注文した『オモチャ』……
240 7.62mm 機関銃 - を構える - M

引き金を引くと同時に連射される7.62mm NATO弾が迫る
車のボンネットからフロント・ミラーを撃ち抜く

数分で車はスクラップ同然となり、乗っている男らも物言わぬ死体

へとなり果てた……

「ヘックス、運転しろ!!」

助手席から運転席へとヘックスを移動させ、俺は背後に迫る数台の増援車両へと銃撃を続ける

「了解したわぁ……!」

ヘックスはアクセルを目一杯、踏む込むと車を猛スピードで発進させる。前方の車列を縫うように避け、更にスピードを上げ、俺は追撃してくる連中の車に向けて撃ちまくる

「流石にマズいかも知らないわぁ……!」

「ああ……だから、この際に告白しとくけどよ……!」

弾切れとなった銃を抱え、俺は助手席に座ると弾倉交換を始める

タイヤが地面を蹴る激しいホイール音と唸るエンジン音……そして、連中からの銃撃音が段々と一つの音楽のように感じてくる

「……実は……前に一回、『結婚』してた事がある」

「……………っ!!」

「……っおッ!？」

するとヘックスは急ブレーキをかけると同時に車を180度、反転させる

「お前、正気かよッ！？ いきなり、何しやがるんだッ！！」

ヘックスは懷から拳銃 - ベレッタ M9 - を引き抜き、連中へと応戦をするも銃身で俺に殴りかかる（勿論、片手でハンドルを操作し、バック走行を続けているが）

「貴方の言葉にむかついただけよお……！！」

「痛えってッ！！ いや、ベガスで酔っ払った勢いでよ！！」

バック走行を続け、連中への銃撃を回避しながらも速度を保つ

「女の名前と社会保証番号はあ……？」

「駄目だ、殺させないぞ……」

俺は装填を終え、迫る連中への応戦を開始する

プロ顔負けの運転技術で迫る銃弾の嵐をぐぐり抜けるヘックス……

その隣にある助手席から応戦を繰り返す俺……

襲撃から、数十分が経過すると俺は完全に大破した襲撃者たちの大型車両へと車から降りる

「……見覚えはあ……？」

俺は息絶えた襲撃者の一人の亡骸に近付き、武装を改めて見直す

「……いや……だが、暗殺部隊コンピテの類だな……だが……『コイツ』には見覚えがある」

俺は亡骸の覆面を外し、顔を確認する

「……『ジョニー・フェニクス』……?」

「……ああ、『スレイヤーズ隊』のな……」

運転席部に転がる死体を確認するも、ソイツも見覚えがある奴だった……

「……『フランキー・フィッシャー』……」

そつ、運転席部に転がる死体ヤツもスレイヤーズ隊の一員だった…

「他の車に乗っていたのはあ……」

「……恐らくは、スレイヤーズのメンバーだろうよ……」

スレイヤーズの連中が俺らを襲った……恐らくは一連の事件にも関与していたんだろうよ……

「……でも、この暗殺部隊の装備……明らかに「ラングレー」御用達の装備ねえ……私も以前はよく使っていたから分かるわぁ……」

「……コイツ等との関連性を確認するには……行き先は一つしか無いな……」

俺とヘックスは車へと乗り込み、足早にこの場を走り去る

「……行ったら、「確実に死ぬ」わねえ……」

「……ヘックス、車庫に戻って車を乗り換えたら、シヨコラーデとチェキータを連れて……「協力者」の所に向かうぞ」

あまり、気乗りはしねえけどな……

襲撃　　女は怒ると、どんな男よりも恐ろしい　　（後書き）

相変わらず、短い……

寧ろ、一話の内容は短いから話数でカバーしているのが常々、感じてます……

協力者　　人に貸しをつくと後々、面倒　　

スレイヤーズの襲撃から数時間後……

既に真夜中になり、辺りの建物には非常灯か街の街灯しか、暗闇を照らしていない

そんな中、俺は先程、車庫でチェキータとショコラーデを連れて乗り換えたローグからの贈り物（大型車両）で、暗闇の中をヘッドライトで道を照らしながら、走行していた

「つまり、スレイヤーズ隊はただの傭兵集団じゃなく、プロの暗殺部隊^{ユニット}って訳？」

後部座席に座るチェキータが運転する俺へと声をかける

「ああ、連中の武装も傭兵如きが入手できる代物じゃない……」「パ

ラミリ」と同じモノだった」

「でも、一連の襲撃事件に大統領の暗殺未遂……それらにCIAが関与してるんッスか？ 第一に国を防衛する為に存在する機関ッスよ？」

チエキータの隣に座るショコラーデは腑に落ちない様子で俺を見る

「でも、これまでにスレイヤーズやルークの足取りが掴めなかったのと極秘にされている場所への襲撃……もしも、関与しているのなら……納得できるわぁ……」

助手席に座るヘックスは、静かに答える

「その答えを知る為に、これから行く場所に居る『協力者』が必要なんだよ……」

先程も言ったが……あまり、気乗りしねえけどよ……

-
-
-
-
-
-

【アメリカ ロシア大使館】

俺らはアメリカのロシア大使館へと到着していた。正面玄関から、少し離れた場所に車を止める

「……シーガー……この類は『協力者』とは言えないツスよ……？」

「……分かってるって……正直、俺も気乗りしねえがな……」

「奴」とは昔、少しばかりの……いや、かなりの対立を繰り返していたからなあ……

「それで……どうするの？ どう考えても、高確率で話す前にドンパチになるのは分かるでしょ？」

指先で愛用のナイフを回しながら、呟くチエキータ

「私はパスするわぁ……以前、「連中」に危うく、蜂の巣にされかけたのをまだ覚えてるからねえ……」

「…俺が話をつけてくる……」

そう言つて、俺は二丁の銃を納めたホルスターを外すと隣に座るヘックスへと手渡す

「ナイフ位は必要じゃないかしら？」

「いや……それじゃあ、かえってドンパチになる。丸腰の方がまだマシだ」

俺は丸腰のまま、車を降りると目の前の正面玄関へと向かう

正面玄関へと着いた俺は玄関脇にあるインターホンを押し、その側に設置された監視カメラへ目を向ける

「……【アイヴァン・コーヴィル】にダリアスが会いたいと伝えてくれ」

数秒後には玄関のロックは外れ、扉は自動的に開かれる。俺は静かに扉を通過する

その瞬間、ホールへと到着した俺の背後にある扉が閉まると同時に……

丸腰である俺は完全武装した警備員の二団に取り囲まれた……

- - - - -

【ロシア大使館 地下『存在しない空間』】

俺は地下にあるロシア大使館の設計図にも一部の局員以外は知らない『存在しない空間』へと連行された

丸腰なのだが、お決まりの身体検査を受け、小さな机の備え付けで
ボディ・チェック
ある粗末な椅子へと座らされていた

「……懐かしい顔だな……お前が生きているとは……」

俺の目の前には……50代後半で短く切りそろえた白髪、スーツの上からでも鍛え抜かれたのが分かる程の筋骨隆々の肉体……

顔には歴戦を切り抜けてきた証拠に切創などの数多くの傷痕があり、鷲の様に鋭い眼が俺を見つめていた……

「……生憎、しぶとさが俺の最大の取り柄でな……アンタも机仕事デスク・ワークの方に転換した割には……鋼鉄の肉体は健在みたいだな？」

【アイヴァン・コーヴィル】

ロシアでも腕利きの傭兵集団『アクーラ鯨』のリーダーであり、20発近く
の弾丸を喰らっても平然と敵を片付けたという逸話を持つ男。着い

たあだ名は『鋼鉄の肉体』

俺たちが傭兵としての「転職」した時からの商売敵でもあったが…
…数年前に、奴はロシア大使館での軍事的外交官として、傭兵から
出世を果たした訳だ…

「……まあ、お前とは色々とあったな…」

アイヴアンは向かい側の席へと座るとウォッカのボトルを取り出し、
持参していた二つのショット・グラスへと酒を注ぐ

「…お前も派手に有名人となったようだな……大統領の暗殺未遂…
…」

「……アンタも俺じゃない事は分かってんだろ？」

「…確かに前ならば、ホワイトハウスにでも潜入しての暗殺すらも可能だろう…ましてや、お前程の狙撃手が外す訳がない…」

「…そう言ってもらえて、光栄だな…アンタも昔は派手にやっていたんだろ？」

「…年をとると昔の事など、どうでもよくなる…だが…『ヴィクトル・スローダー』をお前に殺された事だけは忘れもしない…」

『ヴィクトル・スローダー』……

「あの時の殺し屋か……やたらと重火器を好んだ男…」

「…優秀な奴だった」

「いいや、単なる腐れブタだった」

するとアイヴァンはウォッカを一気に飲み干し、こう言った

「奴は私の従兄弟でもあった……」

「……悪かった……アンタの身内とはな……」

俺もグラスに入ったウォッカを飲み干すとアイヴァンは先程と同じように二つのグラスに酒を注ぐ

酒の入ったグラスを高らかに掲げ、アイヴァンと言う

「ヴィクトルに……『腐れブタ』に乾杯だ……」

そして、アイヴァンは酒を飲み干そうとするが……

「……だが、死んじやいねえけどな……」

俺がそう呟くと奴は咽せたのか、咳き込みながら俺を見る

「ゲホッ……何だと…？」

「俺らの方に寝返らせた……今や、ホーム・センターのオーナーだよ」

殺し屋の割には安定した暮らしを求めていた不思議な奴だったけど
な……

「…信じられんな……」

「…体重230キロの巨漢」

俺の言葉を聞いた途端にアイヴァンは声をあげ、大笑いをする

「ッ……ハッハッハハッ！！　まあ、飲めッ！」

互いに酒を飲み干し、三度目になる酒の注ぎ足しを行う

「…今度は誰に乾杯するんだ？」

「フフッ……『ローラ・マクナマス』だ」

「……ローラだって？」

「此方に寝返らせた」

「……嘘だろ？」

すると奴は大笑いしながら、酒を煽る

「……腕の良い調達屋だったのになぁ……」

『ローラ・マクナマス』は業界随一の調達屋であり、彼女に調達できない代物は無い程だ

一時期、『^{アクーラ}鯨』の武器や装備がやけに超一流の兵装になった事があったが……納得だな……

「……それで……ただ、酒を飲みながらの昔話をする為に来た訳じゃないだろう……目的はなんだ……？」

俺は本題に入る事にし、目的を話す

「……『CIA本部』に潜り込みたい…完璧な本部内の図面、IDカードも必要だ…」

「中々の面白く、魅力的な話だが……私の力では、どうしようもないな……」

俺は酒を煽るとアイヴァンに顔を近付ける

「……今、頼れるのは、アンタしか、居ない」

一つ一つ、言葉を区切りながら強調して俺は奴に言う

「フッフ……かの有名な『ダリアス・シーガー』に【貸し】を作る訳か……」

奴は心底、楽しそうな表情を浮かべた

……これだから、気乗りしなかったんだよ……

後に、この時の【貸し】がロクな事にならなかったのは言うまでもないけどな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155s/>

- 転生者は消耗品を望む -

2011年6月28日20時04分発行